

---

# Dead in pokemon world!

時雨 豊

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Dead in pokemon world!

### 【NZコード】

N5119V

### 【作者名】

時雨 豊

### 【あらすじ】

車にひかれて死んだと思ったら、何故かやぶれたせかいにいた。話によると、アルセウスが俺の命を救つて（？）くれたらしい。  
つて、何でアルセウスが人の姿してるんだよ？ とにかく、俺が元の世界に帰るには、奪われたアルセウスの力の源、『プレート』を探す必要があるらしい。なんだかよく分からないままで、死んだはずの俺はポケモン（擬人化）の世界に落とされて……。  
でも、せっかくのポケモンの世界！ たくさんポケモンGETだぜ！ なんて思っていたんだが、仲間になるのはいつもワケアリの

ポケモンばかりで……。

この作品は擬人化ものです。

## 始まり。

「……んうえ?」「

起きたらいきなり真っ暗闇だったので、つい素つ頓狂な声をあげてしまつた。

それにもしても、どうしたんだろ? なんでこんなに真っ暗なんだ? こんな真っ暗は中々ないだろ? 昔入ったお寺の地下くらい真っ暗だ。

自分の手を見てみる。見えない。やっぱり真っ暗だ。

『 グよ』

「ん?」

奇妙な感覚がした。まるで、頭の中に話しかけられているような… : というか、頭の中に話しかけられている。テレパシーってやつだろ? うか。

『 シグよ』

どうやら、俺の名前を呼んでるらしかった。

『 シグよ、私の声が聞こえますか?』

「ドラ Hみたいですね」

『 ……シグよ。私の声が聞こえますね』

「はい聞こえます。すいません」

どうやら[冗談の通じない人みたいだつた。

『 シグ。あなたは、ここに来る前の事を覚えていましたか?』

「いや、全然」

そういうえば、何で俺はこんなとこに? よく考えたら状況がせつぱり分からぬ。というか、

「さつきからナチュラルにテレパシィてくれるあなたは誰ですか」

『……私は、アルセウスです』

「は?」

アルセウス? アルセウスって、あの宇宙作ったとか言われてる、全スター・タス種族値120のポケモン?

「……ちょっとよく分かんないです」

『まあ、じきに分かるでしょう。それより、もう時間がありません。言わなければいけないことがあるのです』

「ちょ、ちょっと待つた。アルセウスってことはここのはポケモンの世界」

『あなたは、死にました』

「つてこと……え?」

なにか、とんでもないことを言われた気がする。死にました? 俺が?

『事実を知れば、徐々に思い出してくるはずです。どうですか?』

「ど、どうですかって……」

あ。

思い出したくないが、思い出してきた。

あの時は、適当に散歩してたんだ。そしたら向こう側の道路で、子供がリフティングしてた。嫌な予感がしたんだよ。でも残念ながらそれは当たつて、リフティングが失敗して道路にボールが転がった。そして、それを追いかけに子供も飛び出した。……そう、ちょうどその時に車が走ってたんだ。

間に合わないとつて、咄嗟に子供を突き飛ばした。でも、俺が代わりに車に当たつて吹き飛んだ。すごい痛みに襲われながらも、涙目で困惑してる、俺が助けた子供の姿だけは確認できたんだ。俺を轢いた車から人が出てきたところで、意識が途切れた。

「……そつかそつか、俺は助からなかつた訳だな」

『そういうことです』

死んでみると、意外にあつせりしたもんだな。両親にはすまないけど。

それにしても、いくら死んだからつて何だよこの真つ暗な空間。なんで俺一人？ 天使とか悪魔とかいないの？ いや、悪魔いたら困るけど。

「んじや、今の俺はただの精神体つてやつなの？」

『いえ、ちゃんと肉体もありますよ』

「ええ！？ 何で！？ は、そうか、今の俺は靈じやなくてゾンビということか！』

『……勝手に納得している所といろすみませんが、そうではあります。私の能力です』

アルセウスの能力？ ……つて、まだアルセウスだつて決まつた訳じやないけど。アルセウス……そうぞうポケモン、何も無い所から生命を生み出すことのできる力を持つ、だつけ。

「つてことはつまり、アルセウスが俺を『作り直した』つてことか？」

？

『はい。その通りです』

「そりやまた、創造神とも呼ばれるポケモンがどうしてもうすでにポケモンという存在については否定しなくなつてるのが怖い。まあ、もう何があつたつておかしくはないけどさ。実際、死んだはずの俺が生きてる訳だし。

『私は、身を呈して子供を助けるあなたの姿にとても感動しました。あなたのような人を、その若さで失うのは惜しい。ですから、命を救おうとしたのです』

「……そりやまたありがたいけど、どうしてこんなところへ？」  
さつきも言つたけど、ここはめっちゃ暗い。贅沢言つつもりはないが、もう少し照明とか点けてくれたって良いと思うんだ。

『ここは、やぶれたせかいです。暗いことについては許してください』

「あ、へー……そうなのか。って何で！？」

やぶれたせかい、って、あのギラティナのいる！？ なんでそんなとこに？

『私は見てのとおりポケモンですから、ポケモン世界の方が力を発揮できるのです。今の私では、人間世界では人一人を作るほどの力は出せない。かといって、ポケモン世界からでは力が届かない。よつて、その間、やぶれたせかいがちょうどよかつたのです』

「なるほどね。分かつたような、分からぬような……というか、見てのとおりつて姿見えないけどね」

『まあ、確かに』

「なー、すこしぐらい見せてくれよー」

『……仕方ありません、少しだけ姿を見せましょー』

おつ？ まさか人生初、生のポケモン？ なんかテンション上がってきた。なんて思つていたら、目の前にぼやっと光が浮かんできた。灯りを頼りに手を見る。……うん、ゾンビではないな。って違う！ この光が、アルセウスのものなのか……？ でも、それにしては、

やけに光が……人型のような……。

『お待たせしました』

「……いやいやいや！ 違う！ 僕の知ってるアルセウスじゃない  
こいつ！」

『？ 私は正真正銘アルセウスですが』

俺がそう言うのも無理はないと思うんだ。だって、そのアルセウス  
は、まるつきり『人』なのだ。そう、なんか、アルセウスをそのまま  
擬人化した感じの。銀髪緑目で、尻尾も付いてる。

『ポケモンは元来、人間の姿をした、人間に限りなく近い生き物で  
す。日本のポケモンというゲームは、それを子供向けにコミカルな  
動物にしただけなのです』

う……確かに、美少女同士が闘うゲームなんて作っても、ウケるのは  
はぐく一部の濃い人たちだけだろう。

つまりだ、ポケモンの擬人化は、擬人化であつて擬人化では無かつ  
た？ 公式こそが違つていたつてことなのか？ おいおい、そりや  
またすごいこと知っちゃつたな。

……いつそのこと大がかりなコスプレだと思ったかつたが、それは  
違うということくらいすぐ分かった。それくらい、ぴつたりとイメ  
ージに合っているのだ。尻尾もついてるし。

……尻尾、ね。

『どうしました？』

じーっとアルセウスの尻尾を見る。近づく。

『……？』

「ぐいっ」

『ひやつ！？』

引っ張る。

「はずれない……やっぱりコスプレじゃなグヘアツ！？」

しばらく引っ張っていた尻尾で、思いつきり引っぱたかれた。多分5メートルくらい吹っ飛んだ。

『次、やつたら……裁きます』

「は、はは。すみません、調子乗りました」

さばきのつぶてなんぞ覚えているだけに、本当に裁かれそうで恐ろしい。

しかし、尻尾触られて顔真っ赤にするなんて、なんか可愛げあるな。幻のポケモンとは思えない。……いやまあ、悲鳴まで頭の中に直接入つて来るもんだから、なんだか複雑だけど。

『そ、それでですね。今の私の力では、あなたをつれて人間世界にはいけないのです。ですから必然的にポケモンの世界へ連れて行くことになります』

「なるほど……。元の世界には戻れない、と

『いいえ、私の力が元に戻れば、あなたを人間世界まで連れていいくことができるのです』

あー、なるほどね。

「プレートがあればいいんですねよね？」

『話が早くて助かります』

つまり、世界にちりばめられる16種のプレートを集めるといつことか！ なんかロマンある冒険だな！

『ちなみに、あなたが想像してるトレジャーハンターみたいなことをしろと言っているのではないのですよ？』

『えつ！？ ジャあどうすんの！？』

『16種のプレートは、一人の人間が持っています。それが、私の

主。どうか、私の主を『

声がとぎれとぎれになつてくる。時間がないと言つていたが、もしかして今がタイムリミットなのかもしれない。

『じか　な　い』

よく聞こえない。それは、声がとぎれとぎれになつてているからというだけではない。俺の意識が、薄くなつているのだ。

アルセウスの光が消えると同時に、俺の意識もまた消えうせた。

そして冒険は始まった。

## 始まり。（後書き）

これからがりみつやく、Dead in pokémon worldになるわけですね。  
作者の妄想垂れ流しな小説にあるとは思いますが、そりはどうかご勘弁を。

おれのかぶがえたやこじゅうのまなこもさ。 (前書き)

サブタイの元ネタってなんなんでしょう?

## おれのかんがえたやつがいるのかもよ。

「…………んうえ！？」

目を覚ましたら、真上にある太陽が燐々と輝いていたので、つい素つ頓狂な声をあげてしまった。

これならさつきの真つ暗闇の方がいいわ。太陽眩しい。  
とりあえず、起きて辺りを見渡してみるか。

どうやらここは山のようだつた。周りが木で覆われてゐる。どうやら俺が寝ていた所だけポカソンとスペースが空いているようだ。  
それにしても、何も無いな。ここがポケモンの世界つてことでいいのか？ それにしては、ポケモンがいない。ゲームだといくら倒してもいくらでも出てきたが、現実はそこまで甘くないか。まあ、ポケモン世界つて時点で現実かどうかは怪しいんだけど。

…………というか、これ、どうしろってんだ？ この草むらの中に入るの？

おいおい、水も食料も無いけど、ちやんと街はあるのかよ……。といつか、まず何地方なんだ？

「分からんつ……」

とりあえず進もう！ 進まなきや何もできねえ！

長い草をかき分けながら先に進む。

…………それでも、俺が寝てたところだけやけに綺麗だつたな。草もきつちり生えそろつてたし。誰か住んでるのかな？

…………。

あつ！ あそこで待つてれば誰か来てくれたかもしれん！ なんて  
こつた戾らなきや！

あーっ、もうビリでいるのかわからんねえ！ 進むしかねえか！

……よし。

「うおおおおおおおおおおつ！！！」

といつあえず叫びながら走る。ほら、熊とかいたら怖いし。熊鈴もないしね。

ちよ、草痛え。やばいかぶれるかも。

「……ゼー、はー……」

疲れた。あかんわこれは。無駄に体力消費してる。なのに草ばっかで進んでる気がしねえ。

……山つて怖いなおい。心折れそうだわ。

サラサラ……。

「ん？」

何か聞こえる。

サラサラ……。

これは、川の音か？

「つて水じゃんつ！」

一目散に音がする方へ向かう。  
川に沿つて下つていくと、麓につくつて聞いたことがあるし、これは大きな手がかりだ！

それにしても、きれいな川つてのは本当にサラサラつて音がするんだなー。うーん、聞いてるだけでも癒される。

「よしひ、ここだな！？」

最後の草むらをかきわけ、川が見える。その川に一瞬だけ、感動した。

そう、一瞬だけ。

俺は、川なんかよりよっぽど大変なものに、視線を奪われ、硬直した。

人が、倒れていた。

しかし、人が倒れていたことに対する硬直したんじゃない。

その人の、圧倒的な美しさに、だ。

まず目に映つたのは、薄橙をベースとした、黒のラインが入つたチャイナドレス。そして、長く、しかし綺麗で整つたアイボリー・ホワイトの髪。チャイナドレスによつてより鮮明に表れている、女性としてしつかりと発育した胸元の曲線。

特に、髪に浮かぶ白磁の肢体。ドレスから見え隠れする生足は、こんな状況であるにもかかわらず、官能的な気分さえ沸かせる。

まるで自分の理想を表した一次元の中に入つてしまつたかのように、その人は美しかつた。

「…………」

ここまで来て、ようやく我に返つた。

その女性は、傷こそないものの、苦しそうにしていた。

そうだ、こんなところで倒れてるんだから、何かがあつたに違ひない！

あれ？

何だ、この犬耳……それに、尻尾も……。

「ああっ！？」

そうだ、ここはポケモンの世界！　しかも、擬人化ポケモンの世界！

つてことは、実際にここは一次元の世界だつたわけね、ある意味。

つてか、このポケモンって……

『薄橙をベースとした、黒のラインが入ったチャイナドレス。』

『そして、長く、しかし綺麗で整つたアイボリー ホワイトの髪。』

『なんだ、この犬耳……それに、尻尾も……』

あのポケモンしかいないじゃん！

擬人化されたポケモンの基準がまだよく分からぬ俺でも、はつきりと何のポケモンだかわかる。

「ウイン、ディ」

ウインディ。俺が知る中で、最も気高く、凜々しく、美しいポケモン。初代から、こいつより好きなポケモンが現れたことはない。

ウインディだと分かつた理由は、それだけではない。地に伏して苦しげに喘いでいるというのに、その姿に弱弱しさなど欠片もない。そこにははつきりとした『強さ』が、ただ凛然と在るのみ。

そんな人間が、この世にいるわけないからだ。

嘘だろ？　まさかこの世界に入つて最初に会つたポケモンが、俺の一番好きなポケモンなんて！

つて、そうだ、感動してる暇はない。早く手当てしないと…‥と、いつても、何をすればいいんだ？　息はしてるようだけど、意識はないようだし、ポケモンでいえば瀕死つてところか？

瀕死といえばげんきのかけらだけ……。そうか、ポケモンの世界なんだからオレンの実とかあるかも！

「……ん」

「だ、大丈夫！？」

ウインディが、目を開けた。綺麗な深紅の目が俺の目に映る。

「……ポーチの中」

「ポーチ？」

確かにポーチの中と言つた。よく見ると、ウインディは腰に小さなポーチを下げていた。中の物を使えといひことだらうか？

「じゃ……ちよつと失礼」

一応断つてから、ポーチの中を見る。……オボンの実だ！

「はい、オボンの実！」

オボンの実を口に近づけると、力なくかじつた。シャク、という音が聞こえる。シャク、シャクと、少しずつかじつしていくにつれ、顔色も少しづつよくなつていいくつに見えた。

それにして、オボンの実つて意外とでかいんだな。そういうやつ。  
5 cmだっただけか。

半分ほど食べたところで、ウインディはゆっくり立ち上がった。

「も、もう大丈夫なのか？」

「……ああ」

返事をしてくれた。

ああ、なんか、声だけでも顔が真っ赤になりそうだ。凜々しく、高貴で、美しいその声だけで。まったく、じこまで俺のウインディ像に合わせてくるつもりなんだろ？

「ふむ……君」

「は、はいっ……？」

「私の体に、傷は無いか？」

「あ……はい。見たところないです」

「……？」

「ふむ……。あいつは相変わらず、傷を残さないのが得意だな

ボソッと呟いたのは確かだが、何と言ったか聞き取れなかつた。

しばらくしてウインディは、もう半分のオボンの実を食べ始めた。  
そういうえば、オボンの実つて全部食べて四分の一の回復なのかな?  
つてことは、今のウインディの体力は全快の八分の一つてどこか。  
オボンの実を食べきつてから、彼女はまた口を開いた。

「誰かは知らないが、礼を言ひ。おかげで助かつた

「……なんでこんなところで倒れてたんだ？」

それが気になるところだった。よく考えたら、ウインディは野生では出ない。しかも、ウインディは強い。しかも、これは想像だが頭がよさそう。だから、そう簡単に誰かにやられるなんて、想像できない。あ、でも傷はないしなあ……。熱射病か何かか?

「いや、何……。ドサイドンのがんせきほうを受けてな

「えっ、近くにドサイドンが！？」

ドサイドンつていつたら、ワインティの天敵の一匹だらう。ワインディは物理戦が得意だし、何より炎技が効かない。ドサイドンの防御は半端じゃないし、岩も地面もワインティの弱点だ。ドサイドンは無振りでもかなりの防御力だから、よほどレベルが違わない限りインファイト使つたって一発じや落ちないし、さらにワインティの耐久は……と、まあここまでやめておこう。

しかしどサイドンがいるというのは恐ろしい。俺はドサイドンも結構好きだが、はつきり言つてポケモンとして登場したら一目散に逃げると思う。だって、あんなのに生身で勝てる気がしないもん。

「いや、ここの近くにドサイドンはないよ」「しかし、ワインティの答えは意外なものだった。

「え？ でも、ドサイドンの攻撃でやられたんだろ？」

「はは、まあそりなんだがな。……何も、ここで闘つたわけじゃない」

「え？ じゃあワインティがやられた後にここまで逃げてきたってこと？」

「お、よく私がワインティだと分かつたな」

「まあ、大好きなポケモンなので」

「そうか、ワインティが好きとは見る田があるな、お前は自分で言つなよ。

「…………」

「…………つひりんぐでくれないのか」

「シッ！」待ちだったの！？」「

な、なんだかなあ……思ったより威厳ないかも。

「まあ、その質問なんだが……私が逃げてきたんじゃない  
「じゃ、一体どうやって？」

「八十キロ先からな、ここまで、がんせきまつりで吹っ飛ばされでき  
たんだ」

「はつ…………？」

八十キロ！？ おっそろしいわ！ それじゃポケモンじゃなくてバ  
ケモンだろ！ つか、八十キロ吹っ飛ばされて生きてるウインディ  
も恐ろしい！

「いやほや、がんせきまつりを防護できたのは我ながらよく反応でき  
たと思う。まあ、そのおかげで防いだ右腕は使い物にならないが。  
ははっ」

ははっじやないよ。右腕の骨、完全に折れてんぞ。うわあふりふり  
させないで！

「というか、八十キロ飛んできたなんて吹っ飛ばされながらなんで  
分かったんだ？ 随分具体的に言つてたけど」

「ああ、吹つ飛ばされてる間暇だから距離を測つていた」

「いや余裕あるなオイ！？」

めつちや苦しむうにしてたくせに何やつてんだよ！」

「まあ、苦しかったのは事実だし、実質余裕は無かったのだがな。だから助けてもらつたことはとても感謝しているよ」

「あ、そつ……」

あんな笑顔向かわしたら、ツツコむ氣も失せるよ。

「……………」

「……………そうだ。ウインディは、誰かのポケモンなのか？」  
わつきから氣になっていたのだ。ウインディは野生では出でこない。  
なら、トレーナーバトルでここまで飛ばされたと考えるのが、自  
然、ではないけど。

「……………」

だけど、ウインディは何も答えなかつた。……………いつのまにか険しい  
顔になつていた。それは怒りじゃなくて、どつちかつていうと悲し  
みを表した顔。

ひょつとして、トレーナーバトルじゃなくて、持ち主であるトレー  
ナーといざこざがあつたのかも。

「私は、もう行くよ。『マスター』のところへ戻らねば」

「あ…………うん、分かつた」

マスター、つてことは、一応トレーナーはいるつてことでいいのか？

「あ、それと、匂いからしてここは人里からそう遠くない場所のよ  
うだ。この川を下れば、そう迷わずに麓に辿りつけるはずだよ」

それだけ言い残すと、ウインディは跳んだ。助走なしで、たつた一つの跳躍で、もうウインディは見えなくなっていた。その跳躍力は、彼女がポケモンで会つて人間ではないことを表していた。  
……仲間になつてくれるかも、なんて考えたが、それは都合が良過ぎるか。

サラサラという、川の流れが、また俺の耳に入り込んできた。

## おれのかんがえたやつのはなもん。（後書き）

名前で分かってくれたかも知れないですが、この主人公、ほぼ私です。

ええ、ほぼです。私だったらワインディに会えたなら全力で抱きつきますから。

8 / 13

今後の物語の進展で矛盾が出るかも知れなかつたので、大幅に変えました。ついでにワインディの美しさマジマジ。

縄張り。

「……さて、行きますか」

少し休憩を入れてから、歩くことにした。

まあ、ワインディも麓が近いって言ってたし、少しくらい長い休憩でも問題は無いだろ？

さ、歩こう歩こう！

約分一時間後くらい。

まだ人の気配すら見えない。

……あつれー？ おかしいぞー。もう足がガツクガクだぞー。日が暮れてるぞー。

何？ 何でこんなに遠いの？ これで麓が近いの？

……『ワインディにとって』の「麓が近い」だったのかな？ だとしたら、俺が遠く感じるのも無理はないか。いや、そもそも山ってこんなもんなのかな？ 山登ったこと無いから分からないけど。あーもう、やっぱり俺は海派だ。山なんか行きたくない。

「まつ、海にも行ったことないけどねっ！..」

シーン。

……虚しい。

「あひ、下りるか……」

再び歩き始める。なんだか一気にローテンションになつたわ。  
その時。

ガサツ、と。草の擦れる音がした。

「何だつ！？」

しかし、音の方向にはなにもない。ただの風かな？

。

……あ、空、もう真っ暗だな……。

夜は、人を不安にさせる。  
そういうことだろう、うん。

26

……そういえば、俺、一人だな。

「一人、か……」

一人じゃないよ

「つ！？」

何だ？ 今度は、風の音とかそういうレベルじゃない。  
「だ、誰だ？」

声の主は答えない。  
代わりに、

「ちらりへ、真っ直ぐ走つてきた。

「はつ！？」

かろうじて、「ちらりへものすごい勢いで走つて来る何かを避ける。

「いだつ！！」

その直後、ドォンッ！！　とものすごい音がして、何かがぶつかつた木が倒れた。

その際、女の子の声も聞こえたんだが……。

ポケモンだ、絶対。

普通の人間が走つてぶつかるだけで、木が折れて倒れるなんてありえない。

ポケモンだ。

冗談じゃないぞ、あんなのにぶつかつたら死ぬかもしれないっ！

初めて、死への恐怖を感じた。一度目……車につつこんでった時は無我夢中だったからなにも感じなかつたが。そうか、死が間近にあるつて、こんなに怖いことなんだな。  
特に、誰かから狙われてるつてのはつ……！

また、何かが走つて来る。また、避ける。

「くつそ……おい、お前誰なんだ！？」

答えてくる気配はあるでない。返つて来るのは突進のみだ。

突進？

「どうか、この技は突進か！」

だから、あの時「いだつ！！」って声が聞こえたんだ。突進は自分も少しダメージを受けるからな。

だとしたら、あんまり突進をさせたくないな……かといって、避けないと死ぬし……。

ハツ、こういう時の為にモンスター・ボールがあるんじやないか！  
よしモンスター・ボールでこいつを……

モンスター・ボール持つてねえええ！！

「ま、待て、落ちつけ！ とりあえず突進をやめろー。えーっと…

…」

誰だよこここつ。

「とにかく突進をやめろー。」

「やーー！」

「やーじゃなによまつたくもおおおつーー！」

なんとなく雰囲気から分かつてたが、このポケモンは子供のようだ。  
なんとか説得をと思ったが、無駄に終わつた。  
くそ、このままじゅじり貪だ。どうにかしてこいつを何とかしない  
と！ モンスター・ボール、どこかに落つてたりしないかな？ それ  
は都合がよすぎるか…… つて

「うわあつーー？」

何か丸いものを踏んで、すっ転んだ。そのせいで、先程からの襲撃  
者に足を踏まれた。

「いでつーー？」

つて何だこの痛み！？ 足自体は少しちゃくて、子供みたいだった  
けど、今の靴か！？ 小さなハンマーを思いつきり振り下されたみ  
たいな痛みだ！

や、やばい。痛くて、足が動かない。頭踏まれたら、確実に死ぬぞ  
！？

動かなくなつた俺を、再び狙う様子が見える。チクシヨウ、ここま  
でか……！？ そもそも、一体俺は何に転んだんだ？ あれか、ゴ  
ミか？ 「ミミをポイ捨てるなよ！ 俺のようにな、ミミのポイ捨

て一つで命を失う奴がいるんだぞ！ チクショウポイ捨てさえ無ければ！

ん？

あれ、俺を転ばせたあの球、どつかで見たことあるな……。あの、赤と白の一色のボール……。

「モンスターボールだつ！！」

誰かここに捨てたのか!? 前言撤回ポイ捨てありがとう… でもポイ捨てしちゃダメだよ！

姿は見えないが、様子を見ればレベルは低そつだし、突進で体力も減ってるはず！

……いける！

最後の力を振り絞つて、「ころんと転がる。案の定。ポケモンは突進したまま、また近くの木にぶつかった。木がなぎ倒される。わーお、ダイナミック伐採。

「きゅう～……」

お、そろそろ頭が辛くなってきたようだ。頭押えてる。まあ、あんなにぶつかってたらな。  
よし、捕まってくれよっ……！

「いっけえ、モンスターボールッ！！」

ボ

。

ポン

ポン

ポン

ポン

「ポケモン、ゲットだぜええええええっ！――！」

とつあえず、ずっと言ひてみたかつたセリフを叫んだ。

繩張り。（後書き）

ポケモンゲットだぜ  
ポケモンファンなら一回は言つたことがあるはず。あるはず。  
…ありますよね？

初ポケ。

ポケモンを無事にゲットできたのはいいけど、ぶつちやけにしつがどんなポケモンかも分からん。

一応命狙われたしなあ……あんまり出したくないけど、そつも言つてられないか。

「でてこい、えーと、何か」

あんまりな言い方だが、しょうがない。  
赤い光と共に、何かが出てくる。

「ホオオオーン！」

「元気いいなオイ」

両手を広げて伸ばしている女の子がてきた。じいつ、突進で弱まつてんじゃなかつたのかよ。

さて、まあさつきの叫びでだいたい分かつたな。出してくる技もひたすら突進だから、じいつなんじゃないかとも思つたが。

「サイホーンか？」

「そだよー」

サイホーンは短く答えた。ウインディと話した時も言つたように、ドサイドンは好きだ。もちろんその進化前であるサイドン、サイホーンだつて好きだ。ちょっと嬉しいな。

よく見てみると、頭の先には小さな角が生えていた。……うわあ、  
突進当たつたらマジでやばかったな。

「私、お兄さんに捕まつちやつたの？」

「捕まつちやつたの」

「ふーん？」

サイホーンはなんか不思議な顔で聞いている。まあ、今この瞬間から、さつきまで狙つてた奴のポケモンになつたわけだからな。混乱するのも分からなくはない。

あれ、なんかこちらへ向かつて突進の構えをし始めましたけど。

「どーん！」

「戻れサイホーン」

「あやつ？」

残念ながら、一度捕まえたらこんなこともできるんだよね。モンスター ボール内に強制送還。

「……でてこいサイホーン」

「ホオオオーン！」

「いやいちいち叫ばなくていいから…」

「こいつ、出てくるたびに叫ぶつもりか？　だとしたら、人前で出すには迷惑になるんだが……。

「あれ？　お兄さん？　どーー？」

「いや、お前の後ろにいるだろ」

さよひさよひと俺を探す姿は、可愛いと言えなくもない。馬鹿だけど。

「あはは、お兄さんいた！」

ああ、笑顔が眩しい。素晴らしい馬鹿だけど。さすが、全てのポケモン図鑑に頭の悪さを書かれることだけはある。

ひょっとしたら、さつきまでの突進も、ただ遊んでるだけだったのかな？　まあ俺はその遊びで危つく死にかけたんですけど。

で。何でまた突進の構えをするんですかサイホーンさん！？

そんなわけで、五、六回モンスター・ボールに入れたり出したりして、ようやく突進して来なくなつた。

「うー……突進できない」

「しなくていいから。君も痛いだろ？ 突進」

「ううん、私、石頭（ ）だから。ちょっと痛いけど平氣」

「……マジで？」

痛くてもダメージ量には入らないのか……痛いイコールダメージではないってことね。

「うー、お兄さんともっと遊びたいー！」

あ、やっぱただ遊んでるだけだつたんですね。「冗談じゃありません、命をかけた遊びなんてやつてられるか。

「でもそれ喰らつたらお兄さん死ぬから。お兄さんが死んだりどう責任とるつもりだつたんだよ」

「えー？ でも、私の縄張りに入るお兄さんが悪いんじゃないのー？」

う、不可抗力とはいえ、正論だ。馬鹿なのに正論だ。自然の掟は厳しいな。

「と、とにかくだなー。俺はもつお前の飼い主なんだから、突進なんてしちゃいけないのー！」

「うー……」

そのうーうー言つのをやめなさい。

でも、こいつが馬鹿じやなかつたら危なかつたな。……ポケモンを仲間にするのも、いろいろ苦勞があるんだろうか。

「うー、分かつた。よろしくね、お兄さん」

「ありがとな。それと、俺の名前はシグだ。シグって呼んでくれ」

「分かつた！ よろしくね、お兄さん！」

「…………」

うん、この子の性格は素直だな。馬鹿だけど。素直は特にどれもパラメータに影響が出ない性格だ。本当なら陽気かいじつぱりがよかつたんだが、まあひかえめじゃなくて良かつたよ。出会いがしらに突進してくるひかえめなんていないけど。

「……それで、サイホーン  
「なに？」

「……その、この山に思い残すことはないのか？」

とりあえずそれが気にかかるつていたんだ。ゲームじゃ気にしていかつたが、本来ならここはサイホーンの住処だ。山から出たくないという気持ちも少なからずあるだろ？

「あは、ないよ。私、いつもみんなに仲間外れにされてたから  
「……え？」

「この山はね、サイホーンがすこく少ない。それに、馬鹿だからつて、群れに入れてももらえないの。だから、サイホーンはサイホーンだけで頑張つて暮らしてるの。私の友達なんて、もう他のサイホーンとコイちゃんだけ」

……なんだかポケモン世界もいろいろ大変なんだな。ポケモン社会の生生しさなんて感じなくなつたよチクショウ。そして、コイちゃんつてのはコイキングだらうな……。馬鹿だつてだけで仲間外れなんだから、ポケモン図鑑に「世界で一番弱くて情けないポケモン」とまで書かれてるコイキングもそりや仲間外れだらうなあ。

「じゃ、友達に別れの挨拶でもしてきたらどうだ？ いきなりいなくなつたら、みんなだつて寂しがるだろ」

「そんなことないよ。トレーナーに捕まつちやつて会えなくなつた友達なんて、たくさんいるもん。だからね、友達に別れはいらないの」

「おい、なんだか俺が悪役みたいじゃないか。すこじく居心地悪いぞ。

「あつ、お兄さんが悪いって言つてるんじゃないよ？ 私、お兄さんと追いかけっこできてすぐ楽しかったもん！」

あれは追いかけっこですか、そうですか。俺はリアル鬼ごっこしてる感覚でしたが。

「それにね、私、いつか世界中を走り回るのが夢なんだ！ だから私も、お兄さんについていきたい！」

「ん、ああ、そうか、そりや大きい夢だな」

うーん、無理してるな。分かりやすいやつだ。これがポケモン世界つてやつなのか……いちいちこんなこと気にしてたらポケモンなんて捕まえられないし、割り切るしかないのか？

まあ、今はとりあえず。

「サイホーン」

「何？」

「麓はどこだ」

「……ひょっとして、迷つてここまで来たの？」

「まあ、似たようなもんだ」

サイホーンに呆れ顔されるのは癪だが、なにせ追いかけまわされて川沿いも何もあつたもんじゃないのだ。彼女に案内してもらつほかない。

「じゃあ麓まで案内してあげるよ。お兄さん、しっかりついてきてね！ 遅れちゃ駄目だよ」

「いやつめハハハ」

頼られていい気になつてるサイホーンだが、まあ他に頼るものもないから仕方ない。と、そこに手を握られる感触がした。ああ、走るのね。

……つてまさか、サイホーンさん？ あの突進のスピードで走るとかやめ

「どーんっ！」

「うおおおおおおっ！？　は、腹にひ、Gが！　Gがかかつてる…。」

やめりよおおつ！？  
ものすごい重力に耐えながらも、ついていく  
もとい、振り回さ  
れる。時速100キロくらい出でね？

「もうすぐだよっ！」

まあ、そんなこんなで、なんだかよく分からない内に街が見えていた。でも必死にGに耐えてるんで感動とかする暇はありません。あ、川が見える。

「あ、水飲もっと！」

ええっ！？

「急ブレーキかけんなあああ……！」

やつぱり、馬鹿だこいつっ…！　俺はサイホーンを恨みながら、水切りの要領で川を何バウンドもしながら沈んだ。

**初ボケ。（後書き）**

石頭…ダメージの反動を受けない。

別れは、いらない。

「お、お兄さん……大丈夫?」

「中学の時水泳部やつてなかつたら死んでた」

「い、ごめんね」

幸い川の流れが穏やかだったのと、俺が水泳得意だったおかげで助かつた。こいつと一緒にいると何度も命を危険にさらすことになるか分からん。

「くそう一人だけ悠々と川の水飲みやがって」

「お兄さんも飲む?」

確かに喉が渴いたな。……誰かさんに振り回されたから、思いつきり喉が渴いたわ。……少し飲むか。手ですくつて、と。

「キンキンに冷えてやがる! ……！」

「ど、どしたのお兄さん?」

「……いや。うん、川の水はおいしいな」

「そだね!」

……まあ、ポケモンにネタを分かつてもいいつもりはないけどね。

「さて、じゃあ行きますか。ありがとなサイホーン。街ももうすぐやつぱりもうすぐ山を出るとだけあって、少し寂しさを隠せないでいるよつだ。うーん、どうにかならないかな。そう思つていっても、

足は進む。ちやくちやくと街への道のりが縮まっていく。  
その時だった。

だ

「……そだね、行こうか」

やつぱりもうすぐ山を出るとだけあって、少し寂しさを隠せないでいるよつだ。うーん、どうにかならないかな。そう思つていっても、足は進む。ちやくちやくと街への道のりが縮まっていく。

その時だった。

「……ひめん」

「ん？」

誰かの声が聞こえた。

「サイホーン、何か言った？」

「いや、なんにも？」

「サイ…………ちゃん！」

「あ、この声つー！」

「ど、どうした？」

様子からしてサイホーンの友達かな？ 声の主も、ビーナスリーサイホーンを呼んでるみたいだし。

「コイちゃん！？」

「サイちゃん！」

「コイキングだつたようです。三人目のポケモンになるのかな。彼女は川の中で、小さな王冠を頭に乗せ、綺麗な金色のドレスを着ていた。たずがキング、絢爛豪華だな。

ん？

金色？ 驚いた、色違いのコイキングだつたのか！

「コイちゃん！」

サイホーンが川へ走りだす。

「おい、お前水タイプ四倍なんだから気をつけやつよ。」

「来ちや駄目だよ、サイちゃん」

「ええつ！？」

「ほり、言わんこつちやなこ。やつや止めるよ、危ないもん」

「…………ひに来たら、きっとサイちゃんはもつと寂しくなつちや

「みう

「あ、そつちか」

とこづか雰囲氣ぶぢ壊しだな俺。ちよつと黙つて見てよつ。

「でもつ……！」

「駄目だよ。あのお兄さんについてくんでしょう？ サイちゃん、いつか世界中を走り回りたいて言つてたじやない。なら、夢を叶えてきなよ」

「でもつ……そつだ、コイちゃんもついて来てよー。」

「私は駄目だよ。弱いし、色違いだからすぐ狙われちゃうし。だからね、私は人の来ないここの一番の場所なの。だけどサイちゃんは違う。サイちゃんにこの山は狭すぎるんだよ。だから、ね？ いつてらつしゃい、サイちゃん」

「…………うん」

会話だけ見ると、サイとコイが主人公の繪本を見ているようだ。それにして、本当はモンスター・ボールがあつたら一緒に連れて行きたいくらいなんだが……ないんだな、これが。それに、コイキング自身ここがいいつて言つてるんだから、連れてくことは出来ないよな。

サイホーンは、ただ黙っていた。ソレで俺が言葉をかけるのは邪推だろつ

言葉をかけるのは、あの子だけで充分、つてな。

「ね、サイちやん。やつぱり、ちよつとだけこひに来て

「う、うん」

サイホーンは、たどたどしく走つていぐ。

コイキングの田の前にサイホーンがしゃがみ込むと、彼女はそつと

サイホーンを抱きしめた。

「私は、いつでもサイちゃんと一緒に一緒にいる  
え……？」

「私は、ここにいる」

コイキングが、彼女の頼りない胸に手を置く。

「私たちは友達。会えなくとも、心はつながってる。ね、いつだつて一緒にいるよ、私たち」

サイホーンは、ただ黙つて抱きしめられていた。コイキングも、ただ黙つて抱きしめている。

「 友達に、別れはいらない」

『トレーナーに捕まっちゃって会えなくなつた友達なんて、たくさんいるもん。だからね、友達に別れはいらないの』

同じ言葉でも、こんなに違うもんなんだな。

サイホーンの言葉は、ただの強がりだった。本当は別れを言いたかつたから、こんなに別れを惜しんでいるのだ。だけど彼女の言葉は、ただの強がりなんかじゃない。きちんとした『強さ』が、彼女の 中にある。自然とこっちまで元気づけられるような、そんな雰囲気が

彼女にはある。

……将来大物になるな、このコイキング。なおさら欲しくなった。

サイホーンが一歩一歩歩いてきた。話が終わつたのだらう。

「お兄さん、行こ」

「ん」

俯きながら、彼女は歩き出した。  
肩が小刻みに震えているのが分かる。……まったく、変なところ強がりなんだからこいつは。

「あのや、サイホーン」

「……何？」

「泣きたいときは、思いつきり泣いていいんだぞ」

彼女は、俯きながら泣いていた。

俺は、サイホーンとコイキングがどれほど付き合てかは分からないが、相当仲が良いということはすぐに分かったさ。  
だけど、これからは俺がこいつのトレーナーで、こいつの仲間であり、こいつの家族だ。

まだ出会つて数時間とはいえ、さ。

「少しくらい、俺に頼れよ

「う、ひっく……っく」

嗚咽を漏らすのが聞こえる。そして、静かに俺に抱きついた。彼女は俺の胸辺りまでしかないから、自然と腰に手が回される。俺を恐怖させたポケモンの姿はどこにもなく、そこにいるのは、優しく、今にも消えてしまいそうなか弱い女の子でしかなかった。

コイキングがしたように、今度は俺が、彼女の頭をそっと撫でる。

「うあああああ……！」

それで今までの我慢が切れたのか、弱弱しく彼女は泣いた。

「……落ちついたか？ サイホーン」

「うと……ありがと」

しばらくして、ようやく彼女は泣きやんだ。

「よし、麓までもつ少しだ。街に着いたら、ポケモンセンターでゆっくり休もうな！」

「うん！」

……といっても、ポケモンセンターが実在するかどうかは分かんないんだけどな。ま、サイホーンの元気な声がまた聞けたから、いつか。

「それじゃ行こつか、シグー！」

へ？

「お、おこひなつとサイホーン。もひー回ー もひー回囃してみて

今の一。」

「えへへー。ほら早く行こうよーー！」

ちょっと意地悪に、サイホーンが笑う。

なんだ、单なる馬鹿じゃなかつたんだなあいつ。

……それにしても、誰かに認められるつてのは、こんなに嬉しいもんなんだな。

心の奥で喜びながら、今はサイホーンと一緒に走ることにした。

## 別れは、いらない。（後書き）

コイキングって、なんか優しさですよね。  
キングというより、シンデレラといいますか。  
だから、最後にはギャラドスになって、報われるわけですね。  
いやまあ、登竜門伝説が元ネタですけど。

## 初めての街

「んーっ、やつと街についた！」

「おつかれさまー」

「サイホーンもありがとな。おつと、そりだ。街に着いたから、一旦ボールの中に入つてくれ」

「はーい」

あれからじしばらくして、やつと街に着いた。ウインディめ、何が近いだよ。まあ、無事に着いたからいいけどね。それと、下りる途中で気付いたんだが、モンスター・ボールから出たり入つたりするのはポケモン自身もある程度自由がきくようだ。

「さて、どうしたもんかね……まずは、ここがどこだか聞いてみるか」

この街にはコンクリートが敷き詰めてあつたので、マサラタウンとかそういう始まりの町ではないと思う。でも、別に都会という訳じやないからトバリシティやヒュンシティとも違う。ま、聞くが早いよな。

「すいませーん」

「はー?」

俺が話しかけたのは、ピンク色の髪をした女人だった。

「えつと、ここってどこですか? ちょっと道に迷っちゃつたんですけど……」

こう言つておけば、変には思われないだらう。

「まあ、それは大変ですね。ここは三丁目ですよ」

そいじゃネハハハハ――ツ! 限定的すぎる! 限定的すぎる

よー?

「いや、あのー! 何タウン、もししくは何シティですか?」  
「え、あつ、すこません。」レジは「ビシティです」

「ビシティ。ジムリーダーのタケシがいる街か。

ふむ。でもやっぱりゲームとは違うな。道路で舗装されてるし、電信柱もある。パッと見現実世界とあまり変わらない。

「……遠いところから来たのですか?」

「ええまあ、かなり遠いところから

次元を超えてきました。

「なら、一度ポケモンセンターには寄るべきですよ。案内しましょ  
うか?」

「あ、お願ひします」

いやあ……。これはもう、いよいよポケモンの世界って感じだな。ポケモンかあ、たくさんポケモンがいるんだろうな。テンション上がつてきたぜ!

……しかしまあ。

「随分と、ポケモンが外に出てるんですね……?」

さつきから、結構明らかにポケモンの姿が見える。あれは、明らかにイワークだ。髪が灰色だし、じつじつした岩で髪を括っている。んで、あれはなんだろう。あ、ヒトデマンだ。胸に綺麗な赤い石があるし、全体的に（服とか髪とか）茶色いし。

……現実だと、ポケモンは危ないから街中では出してはいけないみたいな決まりがあるのだろうと思つていたんだがな。

「おや、都会ではポケモンが出ていないんですか？ 私はこの街から出たことが無いので分からぬのですか？」

「あ、いや、そういうわけではないんです」

「はあ……。まあ、でもそんな地域があるとしたら、ずっとボールの中でじつとしているのでしょうか？ だとしたら、私たちポケモンにひとつては酷く窮屈ですね」

「はは、まあ確かに」

え？

私たち？

「えつ！？ あなたポケモンなんですか！？」

「え、ええつ！？ ビ、ビコからビつ見ても私、プクリンじゃないですか！」

「分かり辛つ！」

でも、確かに服とかまでピンク色だから、おかしいなーとは思ったけど。それにもしても、今後はこんなことがないようにしていいやむしろ、人間に「君はなんていうポケモン？」って聞かないようにしてよし……。

「あ、ほら。ポケモンセンターはあそこです」

「どうもすいません、わざわざ案内してもらつて」

「いえいえ、私もちょうどあそこ用があつたので」

にっこりとプクリンは笑つた。……おつとりか。

その時、いきなりポケットに入れておいたモンスター・ボールからサイホーンが出てきた。

「うおっ、ビしたサイホーン」

「たいへん！」

ドーン、という効果音がつきそつなくらい堂々とサイホーンは言った。

「あらあら、可愛らしい。その子があなたのポケモンですか？」

「え、ええまあ」

「元気いっぱいですけど、ところどころ擦り傷切り傷がありますね。」

早めに治療してあげてください」

「はい、そうします……というわけで、もう一度戻れサイホーン」

「やーだー！ もつと外にいた」

はい強制送還。ちなみにこれも山の中で気付いたことだけど、どうやら自分でボールを握ってる間は出ようとしても出られないらしい。

ウイーンと、自動ドアが開く。いよいよポケモンセンターの中だ。クーラーがきいて涼しい。

「マスター、お客様を連れてきましたよ」

「『』苦労さまクリニック」

クリニックは、ジョーイさん……でいいのかな？ の、横についた。

「お願いします」

まさかリアルでポケモンセンターに来るのは思っていなかつたので、どうすればいいか全く分からなかつたが、ジョーイさんは快くモンスター・ボールを受け取ってくれた。よかつた。

治療は、ホントにゲームみたいにあつという間だった。テンテンテ

ケテン みたいな軽快な効果音が終わると同時に、

「お預かりしたポケモンは元気になりましたよ！」

これだもん。どんだけポケモンの治癒力早いんだよ。それともポケモンセンターの医学が凄い進んでるだけなのか？ まあ、いいか。これでサイホーンも元気になったことだし。

「よーし、出でこーサイホーン」

「ツホオオオオオンツ！――！」

「あつははー元気いっぴだなサイホーン。ちょっと黙りうな後でここはひやんとしつけておかないとな……。可愛らしここちゅあちゅ可愛らしいけどさ。

それで、改めてサイホーンと一緒にポケモンセンターの中を見てみると、本当にポケモンが多いんだ。

パッと見て分かるのは……ヘルガー、カクレオン、シャワーズ、あれは、ミカルゲかな？ とにかく強そう弱そうたくさんいるんで、我がサイホーンは……

「ねえねえ、一緒に遊ぼうよー」

「いやだよ。サイホーンとは相性が悪いし」

「ねえねえ、一緒に遊ぼー」

「いやよ。サイホーンなんて、私の水ちょっとかかるだけでふらふらになっちゃうじゃない」

「ねー、誰か一緒に遊ぼうよーつー！」

ああ……すじく子供だ……。田を押さえたくなるくらい純粋な子供だ。それで弱いのは田に見えてるし。たぶんあのヘルガーのかえんほうしゃだつて確一だろう。

「あんまりポケモンセンターで騒ぐなよ、サイホーン

「えー、だつて」

「だつてじやない。遊びなら俺が後で好きなだけ遊んでやるから「ホントー!? ジやあ我慢する!」

ふう……。なんとか収まってくれた。

「ふふつ」

誰かが笑つた。俺の隣に座つてゐる人だ。この人は……うん、この人はポケモンじゃない。金髪の、背が高い普通の女人の人だ。

「いや、なんかうちのサイホーンがすみません」

「いえ、いいのよ。ただ、あなたにすっごく懷いてるなって」「えつ？ そうですか？」

「私にはすっごく懷いているように見える。長年あの子と一緒に？」  
「いえ、数時間前捕まえたばかりですよ」  
「そうなの？ ジャア、あなたの才能かもね」  
「才能、ね。そんな大層なものがあるとは思えないんですけど」  
「いいえ、ポケモンに懷かれやすいのは立派な才能よ」  
ふーん？ そんなもんなのか？ でも、ただあのサイホーンが人懐っこいだけだと思うんだけど。

「……あなた、強くなりそうね。また会うかもしれないわ」「は、はあ。ありがとうございます」

「じゃ、私は行くわ。おいで、ミカルゲ」

「おおんみよおーん！」

ミカルゲが笑いながらついていった。……ふむ、あの人どうかで見たことある気が

「つて、思いつきリシロナさんじやん！」

シロナさんがいなくなつた後で叫んだ。そうだよあの金髪！ ズボンが似合つ高い身長！ おまけにミカルゲ！ シロナさんじやん！

「シグ、どうしたの？」

「ん、ああいや、なんでもないよ」

くそ、今すぐにでも勝負したかったけど、さすがにサイホーン一人じゃ無理だよな……。

つて、そうか。これから、何回もバトルしなきゃいけないんだ。サイホーンのこと、よく知つておかなきや。

「サイホーンってさ、どれくらい技使える? 突進以外で」

「えつとねー。お母さんに教えてもらったのがね、ストーンエッジと、じしんだよ!」

「地震? そうか、お前のお母さんって、結構な強さだったんだな」「そうだよ! 今はもうトレーナーさんと一緒にいるけど、すぐ強かつたんだよ! 水ポケモンにだって勝てたんだから!」

へえー。サイホーン系は特防低いし、岩・地面タイプで水技が四倍だから、水なんて正に天敵だ。それに勝てるとは凄い。

本来の目的とは違つが、ジムに挑むのも悪くないかもしねない。二ビジムのタケシなら相性もいい。

……となると。

やつぱり必要なのが、『努力値』だな。

二ビジムの近くだつたら、ポッポで素早さを上げ、二ドランで攻撃を上げるのがいいな。

「よし、やうとくれば修行だ! サイホーン、ちょっとついてこい!」

「えつ、えつ? あ、ちょっとシグ、待つてよ!」

「これぞポケモン、つて感じだな!」

これかうのじに脳を躍らせながら、俺はポケモンセンターを後にして

## 初めての街。（後書き）

ゲームだと何もありませんよね、街って。

ポケセンとフレンドリッシュヨップとポケモンジムと民家だけでどうやって生活するつもりなんでしょう、と考えた結果、あまりこじらの世界と変わらない風景になりました。

1 1 . 1 1 . 1

すみません、ストーンエッジと書くといふをロックブラストと書いていました。全然違う技です。

## 努力値（前書き）

いきなりポケモンの法則について触れていきます。説明回です。

## 努力値。

「よしひ、そこポッポ！」

「はいさつ！」

「そつちのニードラン！」

「ていやー！」

そんな感じで、今俺達はニビシティ周辺の草むらで努力値を振つてる。

でもそれだけじゃない。俺とサイホーンの修行もある。

サイホーンは、見て分かる通りまだまだレベルが低い。経験値を上げるため、そして経験を積むため。

俺も、ゲームとの違いを少しづつ見つけようとしてる。

おっと、もちろん修行三昧じゃないぞ。これはゲームじゃなく、現実なんだね。ただひたすら修行なんて愛のないことは絶対にしない。自慢じやないが、俺は某魔物の牧場ゲームでも、表記が「元気みたい」になると必ず休ませてたもんだ。

サイホーンには、次の指示を出している。

ポッポとニードラン 以外は、絶対に倒してはならない。

ポッポが出たらストーンヒッジ。ニードランがでたらじしん。

そして、両方とも『相手が倒れるギリギリの力』に調整して出す。

これは、こここのポケモン世界での発見だが、どうやらレベルが低いと操るのが難しい技もあるようだ。地震はゲームの方ではかなりポピュラーな技で、かなり強力。サイホーンなんて、本来56レベルでやつと使えるようになる技なのだ。今のレベルでうまく使えないのも自明の理。

……まあ、本当はゲームとはちょっと覚える技やレベルが違うし、曖昧なんだけどな。ほら、アニメでだつて、戦闘中に進化したりするくらい曖昧だし。まあ、それは後にしてよう。

とにかく、最初なんて地震で自分がダメージ受けたりしてたんだが、使い続けることでだいぶ精度も上がってきたみたいだ。かなり威力も範囲も調整できるようになった。

威力の調整は、相手を見極める能力を身につける為だ。これは当たり前なんだが、当然相手のレベルやパラメータなんて会つただけじゃ分からぬ。だから、この能力を早々に身につける必要があるんだ。

「つ、そこポッポ！」

「つてーい！」

「ぴあー！」

岩の雨を受けて、ど、っと倒れるポッポ。あ、当然人型。

「そこまでー！」

「だあーつ、またあんたらに負けた！」

「はは、じめんな」

「もひ、いいからほりー。早くこいつものー！」

「あーはいはい。ほり、すゞこきずぐすり」

ホント、ポケモンのアイテムって安直なネーミングだな。と思いつながら、ポッポにすゞこきずぐすりを渡した。

わて、どつこいとかといふとだ。

さすがにこいはゲームの世界じゃないから、日々ポッポヒードランを苛めるのも忍びない。

それで、ポケセン出た後に気付いたんだが、財布はどうやらポケットに入つたままだつたんだ。入つてたお金は2000円（残しておいたおとしだま）程度。そのお金を使って、フレンドリーショップですごいきずぐすりを買い、修行がひと段落ついたらポッポたちに渡していくのだ。

ここで、またゲームとは違つルールが二つ。

まず、フレンドリーショップはどこも共通で同じものを売っているらしい、きずぐすりからかいふくのくすり今まで、一ピシティでも売つてこむ。

そして次に、きずぐすりの使い方。これは、数値にすると全て使って200回復ということらしく、みんなで分け合つことができる。そして、これまた便利なことに、ガソリンスタンドよりしく体力が満タンになるとそのポケモンはそれ以上使えなくなる。だから、人が使いすぎることは無いわけだ。

さつとも言つたよつに、相手が倒れるギリギリの力でやつてゐるから、そこまで深い傷を負うことは無い。

そこまで深い傷を負うことは無い。  
まあ、最初の内は苦労したけどな……。めっちゃみんなに謝りながら、修行続けたつける。

でも、次第にポケモン達の方も火がついたようで、今では皆で戦つてサイホーンをどこまで追いつめられるか競ってるようだ。

ちなみに、一日のノルマは両方20回。少ないよつに思えるだらつけど、あんまりやりすぎると悪いからね。今日で八日目だから、あと五日くらいか。

一日一往復。それが終われば、あとは自由時間。サイホーンは二ドランやポツボたちと戯れている。

……」うすれば、俺がわざわざ命を張る必要もないからな。

「よーつし、いつくぞー！」  
「ツシャア」いやオラアアアアアツー！

西川、今もやがんばー!エリック・カサイホーンの突進を受け止めようと無謀な挑戦をしている。

「アーティスト」

弧を描き……「ドラン」は飛んだ。まあ、レベルに差も出てきてるから当たり前だろ。

ちなみに、今のサイホーンに俺が当たつたら多分確実に死ぬ。

「 ルーニー 」 ..... ひめ ..... ねこ、シグ ..... キー、ルードルフ

「呼吸困難はさすがに直せねえよ。つたぐ、お前も学習しな

いな

今じゃすっかり「シグ」なんて呼び捨てをされている。

そして、更にゲームとは違つといふ、とこうか、発見したといふ。ポケモンは、その性格によつて着ている服が違う。

例えば、おつとりとしたニードラン はやたらふわふわした服を着ているが、今のゆうかんなニードラン は妙に刺々しくて、重そうな半分鎧みたいな服を着ている。

せいかく厳選が楽だらうなあ……と思つたり。ま、せつかくのリアルポケモン世界。細かいこと……個体値とか、出会つてからは変わらないものは気にしないでおけ。

「サイホーン、ちよつといつち来て

「ん？ どうしたの？」

「いやなこ。特にどうどこいことはないよ」

サイホーンが俺の前に立つ。彼女を、俺はじつと見つめた。サイホーンと同じよう、俺も、そこそこならレベルの判定がつくようになつて来た。

……ふむ。

「……あ、ひょひ、おこー、何で目をそらすんだよー。」

「だ、だつて！ じつと見つめられたらそつやそらすよー。」

「お前は犬か！」

「サイだよー！」

仕切り直し。

再度サイホーンに向ひを向かせ、レベル判定。

「……うへん

「へへへへ

「つーん？」

「ま、まだ？」

「いや、よく考えたら、一ピシティ周辺のポケモンしか見てないから……お前のレベルまでは、分からん」

「……もーっ」

ふくつと頬を膨らませるサイホーン。

やべえ、もしゲーム世界でのポケモンだつたらとか考えたら気持ち悪くなつた。

ゲームのサイホーンが頬を膨らませて怒つたら……「うん、考えるのは毒だ。

「……なんで人の顔見て顔色を見る見る悪くせせるの?」

「いや、お前のことを見てたわけじゃないんだが」

「じゃあ誰のこと見てたつていつのせー?」

いや、まあ気持ち悪くなる直前までお前の顔見てたけど。

「ま、まあでも、今のところ15レベル以上25レベル以下ってっこかな。何となくだけど」

「そつか……。ちなみに、ポッポ達は?」

「ん? 大体五、六レベルつて感じかな」

「そつかそつか。えへへ~、いつの間にか強くなつてたんだね」

「そりゃーな」

そういうえば、この世界に経験値の概念はない。つまり、レベルというものが存在しないのだ。だけど、実際レベルはあると思う。よく見ていると、一定数戦うたびに、段階的に攻撃や素早さ、防御などが上がつているのが分かる。まあ、戦闘中にも経験値は少しづつ入っているのだから、だから戦闘中に進化つていつとがあるんだ。

「ねえシグ。その、『ジムリーダー』つていうのど戦つのはいつなの?」

サイホーンには、もう修行の目的を伝えてある。目的は向上心を生むからね。まあ、相手がサイホーンなだけに、『ジムリーダー』って

「いつも『一〇〇強』トレーナーと戦う』と云ふとしか伝えてないけど。

「ん……五日後、この修行が終わってからすぐ後だな」

「そつか。五日後か……その時には、みんなともさよならか。若干、寂しげなサイホーン。まあ、しょうがないか。

「さて、サイホーン。そろそろポケセンへ戻るぞー」

「はーい！」

今夜の寝床は、ポケセンのジヨーイさん所提供してもらっている。ビビシティには、ゲームと違つてちゃんと宿屋とかレストランとかあるのだが、いかんせん金がない。すぐこきすぐすり一つで120円だ、あと五日、つまり600円の出費がある。宿屋とか利用できる訳がない。

ホント、ジヨーイさんには感謝だ。感謝つ……圧倒的感謝つ……！  
ポケセン使わせてもらえなかつたら、今頃このニードランやポッポたちと野宿だよ……あれ？ それも結構いいかも？ いや、よくない。

「ただいまですジヨーイさん」

「あら、おかえりなさいシグさん。今日は早いですね」

「ええ、最近よく慣れてきたつて感じです。いつもすみませんね」

「シグさんのように、ポケモンとの特訓で野生のポケモンまで気にかける人は滅多にいません。だから、ポケモンセンターを秘密で提供しているんですよ」

「うなつか……。まあ、ゲームだと気にかけられない、といふか気にかけるシステムがないし、不思議ではないか。

ちなみに、どこで寝るかといふとポケモンセンターのソファの上。  
サイホーンはその下で丸まつて寝る。猫かよ、ヒツヒツ口みたくなるが、サイです。

「シグは、このあとどうするの?」「

「ん、まあ今日はすぐここに買つたら特に何もすることないかな」

「じゃ、先に寝てるねー」「

「おう、おやすみ」

……ふう。

ここでの生活も、あと五日。

それが終わったらジムリーダーへの挑戦か。上手くいくといいな。

……ポケモンを個体値厳選したり、努力値振ったりする人の事を、ひたすら強いポケモンを求める人達を、俺達は『廃人』といつ。

俺は、その廃人にはなりきれない。

もちろん俺は誰よりもポケモンが好きで、バトルはそれなりに強い。だけどあくまで、俺が使のは『強いポケモン』ではなく、『好きなポケモン』。

ポケモンってのは、強いポケモンを見つけるゲームじゃない。自分の好きなポケモンを、自分が持てる力の限り強く育てるゲームだと思ってる。

だから、いつもドサイドンやウインディイを使って戦った。

だけど、ドサイドンは得意不得意がはっきりしそぎだし、しかもウインディイをセットにしてもあまりメリットはない。だけど、使った。ポケモンが、そいつらが好きだから。

俺ほど愛情を込めてポケモンを育てる奴は、現実世界にはあまりいないだろう。現実逃避と言われば、それは、そうなのだが。

だから、俺はここに来れて本当に良かった。サイホーンを、俺が持

てる限り最大限の愛情で育てよう。

……でも、元の世界に帰つて、やらなきゃいけないことがあるのも、確かだ。

誰か一人が持つていて、16枚のプレートをアルセウスに返さなきゃいけないのも確か。

……別れの事は、出会つたときに考えるもんぢやないよな。さつさとすゞいきすぐすりを買いに行こう。

## 努力値。（後書き）

ドサイドンはやはりよつきAS極振りロッカ型もしくは鉄火バトン型ですね。シグも同じことをしているようですが、そもそもドサイドンへの進化方法ってなんでしょう。

## 「ジムリーダー。」

「そおい！」

「いだあつーー！」

「はい、そこまでー！」

「えつ、もう終わり？」

十三日四。

ニードランに地震を当じて、ついに、攻撃、素早さ、どちらも極振りにできた。

サイホーンはかなり強くなっているのだが、頭は変わらない。最後の日なのに倒した数の計算もできなかつた。

「あー、また負けちゃつたか。次こそは！」

「次はないぞー！ ポッポ。昨日言つたら、今日が最後の日になつて。はい、さこーのきずぐすり！」

「あ、ああー……そういえばそつか

若干寂しそうなポッポ。まあ、十三日間は一緒にいた仲だ、無理もない。俺も寂しいし。

「ええ……？ そ、そうなの？」

「お前は人の話を聞かないな、ホントに！」

昨日、実は全員に言つたんだぞ。今までお世話になつた、約五十五ずつのポッポとニードラン達、それからここで遊んでたニードランにも。無論、今困惑してるサイホーンにもだ。

「そつか……もう、会えないのか。寂しいな」

まあ、こいつが一番寂しそうになるよな。そりや。こいつ、やつぱりさみしがりじゃねえの？ それだと防御は下がるが攻撃が上がるし、いいかも、なんて。

「ほら、とつとと行くぞー。別れを惜しんでる暇はない」

「え、えつ？ デニヘ？」

「バカモノ。何のために今まで戦つてきたと思つてんだ？ ジムリーダーを倒すためだろうが。まずはポケセンで傷を治して、それからジム戦だ。氣い張つとけよ」

「あ、そつか

「こいつは……。

「じゃーね、みんな！」

「おひ、負けんなよ！」「頑張つて来てねーー」「応援してるよーー！」

百匹以上の野生ポケモンの声援を背に、俺達はまずポケセンへと向かつた。なんかしまらん。

そんな皆を寂しそうに見つめる、サイホーン。「こいつは……この寂しがりな性格、厄介だな。

……ふむ。

「……ジムリーダーに負けたら、またここで修行するかもな」

「えつ？」

わざと聞こえるまつり、元気と意地悪なことを言った。

ポケモンジムへ入ると、パーンパカパーンパカパーン みたいな、ゲームで聞いたことのあるポケモンジムの音楽が流れ出した。きちんとBGMはあるんですね。

「なんか、きんちょーしてきたねー」

「その言い方全然緊張してねえよ」

あたりを興味深そうにキョロキョロと見回すサイホーン。

……目の前に仁王立ちしてる人いるし、多分あれだろ。一直線に

「オッス！ 未来のチャンピオンッ！…」

「うわあびっくりしたあーーーー！」

そ、そうだ、ジムリーダーといえば、このやたら元気のいいお兄さんがいたんだつた！

「ちょ、ちょっと！ そういうのやめてくださいよ…」

「びっ、びっくりした……」

「はつはつは、まあいいじゃないか！ 頑張つて来いよ！」

あいつ……ゲーム内でも思つてたが何がしたいんだよマジで。まあ、とりあえず歩こう。殴るのは後だ。

そういえば、ゲームだとこのジム、ジムリーダーといこいつと一緒に一人いたような。

「おいそこの！」

いたよくなじやなくて、いたね。

「なんですかー？」

「お前がタケシさんに挑むなんて、百万光年早いんだよ！ いけつ、

イシツブテ！」

「よつしゃあ一かかつて二二一。」

出た、光年少年。確かにイシツブテとサンドだつけな。イシツブテはともかく、サンドは相性悪いし、やばいかも？ なーんて。

『新編』

「しまった……百万光年は時間じゃない、距離だつ……！」

一  
せ  
つ  
た  
一

十三田間修行を続けたサイホーンの敵じゃないけどね。サンドを軽々と突破。ちなみに今のは負けセリフのようです。

「...ստեղ」

いい返事だ。これなら問題なくいけるか？

「ほお、君が挑戦者か」

出たなタケシ。相変わらず偉そうだな。その仁王立ちやめろ。

「そうですが、何か？」

「いや、サイホーン一匹で挑戦するのは、いたとか無謀なんじゃないかな、と思つてね」

「余計なお世話です」

なんでジムリーダーなのに小物役なんだよ」といつ。その仁王立ちや  
めろ。

「俺の使うポケモンは、俺のこの硬い意志のような  
「ポケモンバトルに、御託はいらない。さあ始めましょうか」

「俺の使うホケモノは、俺のこの硬い意志のようないる。ポケモンバトルに、御託はいらない。さあ始めましょー！」

こいつはあんまり好きじゃないからセツフを飛ばす。やや残念そうだけど関係無い。

「……いけつ、イシツブテ！」

「よつしゃじこやあー！」

「サイホーン、じしんで落とせー！」

「はいさつ！」

ニビジム、タケシ。持っているポケモンは、確かにイシツブテとイワーク。イワークは確かに、70族（素早さの種族値70のポケモンのこと）。イシツブテは問題にならないが、イワークがやつぱりきついかな。サイホーンは攻撃型。しかしイワークの防御は並大抵じゃない。それに加えて、あの地味な素早さ……普通のサイホーンなら、イワークを抜くことはできない。だが。

こいつは、性格補正は無くても素早さ極振りしてんだ。それにレベルならこいつの方が上のはず。これなら、いけるはずっ！

「……何やら、先ばかり見てるようだな？」

え？

「イシツブテ、耐えるー！」

「う、ううう～、なんとか」

んなつ！？

耐えただと！？

「言つただろ。俺のポケモンは俺の意志のよつて硬いんだ  
言わせてないけどねー……なんて言つてゐる場合ぢやない！ 反撃  
される！」

「イシツブテ、地ならしだつ！」

「ほいれつ！ くらいな！」

地ならしつ……？ 地面タイプだから効果抜群、いやそれはこの際  
関係無い、レベル差はある。

問題は、素早さが一段階下がるつてことだ！

「サイホーン、避けろつ！」

「ふええつ！？ 避けろつたつて、どうもつてえ！ むぎやあ一つ  
！？」

結局、地ならしさクリーンヒットした。サイホーンの素早さが下が  
る。

くうつ……悔しいが、タケシの言つており、俺はイシツブテの先、  
イワークしか見ていなかつた。その結果がこれ。俺もまだまだ新米  
トレーナーつてことか。

イシツブテによつてダメージを受け、素早さも下がり、おそらくは  
イワークに先手を取られ、今度こそサイホーンが耐えられない一撃  
を受けるだろ。

「……っ

しかし、俺はあえて、ここで何も言わなかつた。

『サイホーン。……今のお前が負けることはないかも知れないが、  
万が一ということもある』

『万が一の時つていうのは?』

『地ならしとか、素早さを下げられたらまずい。そういうときせ  
あの技を使え』

『分かつた!』

こうこう時、やるべきことはサイホーンに教えた。それを、実行す  
るかどうか。

あいつも、それを分かつてる。顔を見れば分かる。あの顔は、どう  
すればいいか迷つてるんじやなくて、あれを実行するかどうかで悩  
んでいる顔だ。

何故、そんなことをしたか? 何故、サイホーンが実行するのをた  
めらつているか?

『……ジムリーダーに負けたら、またここで修行するかもな』

俺が、そう言つたからだ。

だが、実際は違う。

俺は、ここでサイホーンが迷つてイシツブテに倒されたりしたら…

俺は、ここにサイホーンを置いて行く。

そんな言葉に惑わされるようなら、この先々で旅なんてできないからな。

「シ、シグッ……」

助けを求められるが、俺は何も言わない。彼女自身が決めることがだから。

「おいおい、思考停止か？」

タケシの挑発にも乗らない。

俺は、サイホーンを信じてるからな。

『……ジムリーダーに負けたら、またここで修行するかもな』

シグは、そう言った。

ここで負ければ、またみんなに会えるのかな。  
でも、この修行はそもそもこの人たちに勝つためにやったことだし  
……。でも、皆には、会いたいし。

シグの考へてることは分かる。

それは、この前修行してた時。

『うりやあ、喰らえー一度蹴り!』

『むぎやつ!』

ある程度レベルが上がった二ドランに、一度蹴りをされた時だ。危  
ないと思つた。

『よつしゃぢうよー 初ダウン? サイホーン初KO!?』

『うく……そんなにうまく、いくもんかっ!』

『おい、大丈夫かサイホーン!? .....って、ええつ!?』

シグは私のこと心配してくれた。でも、その時に、すごい技を覚え  
たんだ。

シグは、その技をすぐ便利な技だと説明してくれた。万が一の時  
の為に、ジム戦で使えるように特訓しておこうとも言つてて、しば  
らくその技の練習をしたつけ。

シグは、今その技を使えって言つてるんだ。  
でも、この技を使つたら、多分勝つ。  
でも勝てばみんなには会えない。

私……どうすれば

『おひへ、負けんなよー。』『頑張つて来てねー。』『応援してるよー  
ー。』

あつ、

なんだ、

簡単なことじゃないか！

そのみんなが、応援してくれたんだもん！ 修行に付き合ってくれたんだもん！

勝たなきや、会えたとしてもみんなに会わせる顔がないよ…

勝つんだ！ 負けるなら、それは私の力を全部出し切った時しかない！

「う……ううう……」

「ん？ どうした、君のサイホーン、様子が変だぞ」

「…………いや」

様子がおかしいなんてこと、一言も無い。

「ほこつは、俺が信じてる最つ高のサイホーンだよ」

覚悟の咆哮が、びりびりと腹に響く。

サイホーンの足や肩、腕や胸をまとう霜がみるみる内に削っていく。

「なんだこれは！？」

「んー、見てのとおりだよ。君のジムリーダーであるタケシさんなら知ってるだろ?」

「……まさか、ロツクカツト!?」

そのとく

技

ゲーム内でのロックカットのイメージならば、そこまで大げさな技術では無いと思うだろう。しかし、この世界でのロックカットは、サインホールにとつて強烈なアドバンテージを得られる。

「しかし、ロックカットしたからなんだ。素早さが上がつたつ

「そつじゅねえんだなー

「な、なんだか分からぬけど、もう一回かかるべきなよ！ また耐えて、今度こそどどめさしてやる!!」

サイホーンの咆哮に気圧されながらも、イシツブテは声を上げた。  
まあ、気圧された時点で……負けてるんだけどね。

びゅんっ、と風の通る音が聞こえたかと思つと、

その瞬間、イシツブテがサイホーンと共に消えた。

「げっほお……っー？」

そして、思いつきり場外、壁の中心辺りに激突していた。むしろ、よく壊れなかつたあの壁。

戦闘不能なのは言つまでも無い。

「い、イシツブテ！？　お、おいなんだあの技は！？」

「何つて、ただの突進じやないですか」

「あれが突進つて……そんな威力じやないだろ！」

……あの時は、二ドラン死んだんじやないかつてくらい凄い威力だつた。あの突進は、ノーマル技にもなるし、格技にもなるし、格闘技にもなる。

突進。

サイホーンという、突進に向いた種族。

石頭という特性。

そこに、ロックカットが加わることで、ゲームではありえない、凄まじい威力が生まれる。

「くそっ……戻れ、イシツブテ。そして、出て来いイワーク！」

「……今の試合見てただけでめちゃくちゃ心配なんんですけど  
やれるだけやってくれ、頼んだイワーク」

「はい、はい」

イワークは、どっかでみたな。髪をどうにか原理が岩で括つてて、  
全体的にじつじつしてる。

「サイホーンッ、最後のポケモンだ！ 油断せず頑張れ！」

「分かった！」

「イワーク！ 岩石落として、なんとかしてスピードを下げる！  
もちろん、避けるのが最優先だ！」

「了解！」

そこからは、多分実際の時間だと30秒も無かつただろう。  
だが、それは体感して見ると実に長い時間のように感じた。

サイホーンのこの突進攻撃。威力は今このこいつにしたらあり得ない  
くらいの破壊力なんだが、直線運動だからいかんせん読まれやすい  
のが弱点。気をつければ、割と当たらない。だが、あの速さで岩石  
落としが当たるはずもなく、しばらくは避け合いが続いた。

「イワーク、頑張れ！ なんとか当てる！」

「む、無茶言うなあまつたくつ……」

「サイホーン、岩石落としをよけようとするな！ 岩石落とし  
じゃ決定的なダメージは与えられないから、恐れることない！」

「頑張るっ！」

イワークを守りつつ、サイホーンを潰そつと、一十の岩石落としが展開される。

だが、それを敢えて無視し　イワークへ、必殺の一撃を当てることにのみ集中させ、

「やーだあつー！」

「しまつ…！」

サイホーンの一撃が、ついにイワークにヒットした。

「戻れ、イワーク」

赤い光に包まれ、イワークがモンスター・ボールの中に戻っていく。

「……参ったな。まさか同じ岩ポケモンとの戦いで負けるなんて」タケシは細目なので表情の変化が分かりにくいけど、まあ多分悔しいのだろう。

「そのサイホーン、一体何年間育ててきたんだ？　そして、君は何年間ポケモントレーナーをやってくる？」

「へ？　いや、出会つてたつた十三日ですけど。それにこいつが俺の初ポケモンです」

タケシが驚く。シロナさんといい、よく分かんないな……俺がそんなベテランに見えるか？

「でも、君の顔は……なんといつか、幼いながらベテラントレーナーのような顔をしている」

……どういう顔？

まあ、ゲームでのポケモン歴は十年超えますからね。この世界だったら世界一のブリーダーになれる自信があるよ。

「それは、君がすごいのか、君のサイホーンがすごいのか……」

「どうちもすごいんだよ！」

サイホーンが割って入つて来る。

「あー、まあ、そんな感じですね。ほらサイホーン、疲れた？ ボールの中に入つてな」

「やだ！ シグと一緒にいる！」

「ははは、随分懐かれてるね」

「あ、あはは……」

「よく恥ずかしげもなくそんなこと言える子は……まあ、子供だし仕方ないか。」

「おっと、話しあげたようだ。ジムリーダーとしての仕事をしなきやね」

「お、待つてました。」

ジムリーダーとしての仕事、つまりバッジ授与だらう。

「これが、グレーバッジだ。受け取ってくれ」

バッジを受け取る。ちなみに、この世界ではバッジに特別な力があるわけではないそうです。アニメと同じだね。

まずは、一つか。

次の相手は、恐らくハナダジムリーダーのカスミだらう。となると、さすがのサイホーンでもあのデスマスターに勝てるかは分からない。いや、それ以前に、ジムのトレーナーに勝てるかどうか怪しい。

……次のジム戦までに、新しいポケモンが仲間に出来るといいけど。

まあどうあえずは、

「おめでとうサイホーン！　さすがだな！」

「えへへ、ありがと！」

サイホーンをお祝いだな！

## 「ジムリーダー。（後書き）

せいかくは、長い間一緒にいないとそりや分かりませんよね。  
それにも、ゲームのタケシって何か嫌なキャラしてますよね。

「あのね、シグ」  
ポケセンで休んでいると、サイホーンが話しかけてきた。なにやらとてもむずむずしている。ちなみに、俺は新聞を見てこの世界についての勉強中です。あ、『ニビタイムズ』にはジムリーダーに勝つ人が載るんだな。じゃあ明日は俺も新聞に載るのかな?『ポケモン新聞』……3番道路に危険なポケモンが逃げこんだ、ねえ。伝説のポケモンか何かか?いや、

もしかして、あのウインティイか?

何か思いつめた様子だつたけど……あの賢そうなウインティイが、『危険なポケモン』と呼ばれるような騒ぎを起こすとも思えない。違うよな、うん。違うと、信じたい。

でもどちらにしろ、ここがないトレーナーがポケモンを捨てたという可能性が高いな。三番道路つて、ちょうどビービーシティを出たらすぐじゃないか。出る時は、充分注意しないとな……。

「ねえ、ちよつとシグ聞いてる！？」

「ん、あ、ああすまん。新聞見てた。んで、何だ？」

「ちよつとお願いがあるの」

「ふーん。言つてみ？」

そう言つと、サイホーンは思いつきり息を吸つて

「お風呂入りたいっ！…！」

「おおそうか、俺も入りたい！」

「じゃあ入ろうつー！」

「だが断るつー！」

「ええええええつー？！」

「シグさん、もひちよつと静かにお願いします

「はいすこません」

……俺も、実ははずつと考へてたことなんだよ。

この十二日間、一切お風呂入りず。体がかゆいし、髪なんて言わずもがなぼりぼりだ。このままじゃ衛生面とか精神面とかいろんな意味でやばい。

金銭面では何の問題も無い。ジムリーダーを倒すと、ゲームと違つて副賞が貰えるとのことで、副賞の50000円を貰つた。5000円なんて持つたことないぜつえへへ。

ま、まあこの街は銭湯もあるんだが……いかんせん、『サイホーン』と別々に入る』というのが心配でならない。このつとはたつた十三

日間のつきあいで、人間社会の常識はあまりない。だから、あんまりそういう公共の場にいきなり放りだすなんてこと、できないんだが……。

「ねえ、シグだつて入りたいでしょ？」

「できないんだが……。」

「ねえー、きちんと大人しくしてるから！　ね、ね！」

「できないんだが……。」

「もう十三日間も入つてないんだよ？　この先進んだらまたいつになるか分かんないし……」「何事もチャレンジだよな……。」

そんなわけで、今はポケセンを出て銭湯へ向かっている。

「そういえば、サイホーンは野生だつた時もお風呂に入つていたのか？」

「そうだよー。人間さんがたまにドラム缶を捨てたりしてたからね、いつの間にかお風呂スペースができちゃって」

「ドラム缶風呂かよ！？」

「うん。基本早い者勝ちでね、ドラム缶を見つけたら持つて帰つて、使う時だけお風呂スペースで使うの。お母さんは強かつたから、すぐ早い内からドラム缶を手に入れたんだよー。」

「結局のところドラム缶風呂じゃねえか」

ひょつとして、あの誰かが住んでいたような整つたスペース、あれがお風呂スペースだつたのか？　そういえば、ミステリーサークルみたいなのがあちこちにあつたけど……あれドラム缶？

「ドラム缶風呂しか入ってないんじゃ、銭湯なんて天国に感じるかもな」

「へえー、そんなにす〝この〟?」

「おひ、すいじぞー」

「ドラム缶風呂よりはな。」

数分くらい歩いて、銭湯についた。この銭湯、別にぼろくもないが、立派でもない。だが広さは充分なので、サイホーンにとつては充分すぎるお風呂だろう。俺はもう何でもいいからお湯の中に入りたい。銭湯には、まあ当たり前だが『男』、『女』ののれんが垂れている。

「なあ、サイホーン」

「なに?」

「一応聞くけどさ、お前、女だよな?」

「……シグには、私が男に見えるの?」

「いや見えない」

いやー、ここまで一緒にいて、「実は男の娘でした」なんて展開、あるかなーなんて……ないか。

俺が気にしてるのは……やっぱリサイホーンが面倒事起こさないかどうかだ。どうにかして、サイホーンを監視できないものか……。

「もう、時々シグって変だよね。じゃあ、私先に入るよ。こいつの『女』って書いてある方に入ればいいんでしょ? シグとは一旦別れちゃうけど、大丈夫だよ!」

大丈夫じゃないから心配なんだよ。

「サイホーン」  
「何？」  
「俺実は女なんだ」  
「……嘘でしょ」  
「ああ嘘だ」  
駄目だった。いやまあ、信じてもらひたといひだつて話だけ  
ど。

「サイホーン」  
「今度は何？」  
「多分タオルまけば、男の娘つて」と許されると思つんだ  
「シグ、私の胸を馬鹿にしないで」  
「すいません」

馬鹿にするな、ねえ……胸があるよ!」には見えないけど  
「シグツ!!」  
「すいません!」  
つい謝つてしまつた……。だって、一瞬だけすごいドスのきいた声  
になつたんだもん……これが、母の面影なのか?

……結局、別れることにになった。心配でならん。

まあ、信じてみるか、うん。

なんていって、銭湯の中に入った瞬間壁に耳を当てて女風呂の様子をチェック。

「…………」「…………」「…………」「…………」

ものすごい量の白い目が突き刺さるが、人命優先だ。

……何も起きてないな。おかしい。いや、起きない方がいいんだけどね。

ま、まあ、普通にお風呂を楽しむか。おつと、まずはシャワーを浴びてから、と。

いやあー、シャワーのお湯だけでも身にしみる……さて、お風呂に入るか。

ちなみに、お風呂に入つてゐるからつて『いやーん び太さんのエッチ!』みたいな展開があるわけじゃないのであしからず。

「こんな白い田線の中で、更にそんな変態行為できたら勇者です。

「んーつ、すつきりした！ シグはまだつた？」

「……まあ、体はすつきりした」

ちくしょう、普通にお風呂満喫してんじゃねえか。

「……暴れたりしなかつたのか？」

「だからー、心配いらないって言つたでしょ？ 昔ね、お母さんに『お風呂の中で騒いじゃいけないよ』って教えてもらつたのー。だから大人しく入つてたよ！」

そりや、ドラム缶風呂の中で騒いだらドラム缶倒れるからなー……まあ、そのおかげで騒ぎがおこらなかつたんだから、お母さんに感謝だな。

「まあ、それだつたらこれから行く先々でも大丈夫だな」

「うん！」

ハナダシティ……完全な想像だけど、プール施設があると思ううんだ。あ、ちなみに現実世界とポケモン世界の季節は同じらしく、今の季節は夏。プールもこの調子なら大丈夫かな？ あ、でも水ポケモンがいたら駄目かな……。

ちなみに、この世界での基準、普通の水とポケモンの水技について。

ポケモンが繰り出す技は、普通の水とは違つちい。例えばつちのサイホーンは、お風呂もプールも平氣だけど、ポケモンのなみのりはもちろん、みずでつぽつも駄目。このところは俺はもちろん、科学的にもよくわかつてないらしい。

ふむ、ハナダシティか……。ジム挑戦までに、もう一匹くらい捕まえておきたいな。

「じゃあ、明日は指せハナダシティ、だな！」

「そうだね！」

とりあえず今日は、最後のニビシティポケセンを噛みしめながら寝るかな、なんて！

……『危険なポケモン』の記事。

それだけが、気がかりだった。

お風呂（後書き）

読者サービスなんて初心な私には書けませんでした。

## 危険なポケモン。

俺達は今、お月見山前のポケセンにいる。

しかし地震はさすがに強いな。道中のポケモンを軽く捻つて来てやりましたよ。ポッポやオニスズメはストーンエッジで倒せるしね。まあ、やつたのはサイホーンだけさ。

……しかし、だ。一応、モンスター・ボールを買つてきたんだけど、どうもポケモンを捕まえる気になれない。人の姿だからさ、どうもボールを投げつけるのを躊躇つて。

それにしても気になるのが、

しばらく新聞の記事に載つている『危険なポケモン』のこと、

それと、『ロケット団』。

この記事に載つてるのはハナダシティの民家が荒らされたことについてだけだが、お月見山にもロケット団はいたはず。ゲームじゃないんだ、捕まつたらどんなことされるか分からぬ。殺されるかもしれない。

……はつきりって、こっちの方がよっぽど怖い。

この世界に、都合よくレッド君はいないらしいしな……。俺がロケット団とぶつかったのかもしれない。

「ねえシグ。難しい顔して何見てるの？」

「ん？　あー、特に何も」

そう、何にしてもこいつを守つてやらなきゃな。ポケモン一人救え  
ない奴が、ポケモントレーナーなんて言ってられるかつての。

「さてと、サイホーン。そろそろ　」

「うわあああああつ！？」

「何だ！？」

お月見山に行こうと思ったのだが、外から男の人の声が聞こえた。

「だ、大丈夫ですか？」

「う、腕がつ！」

男性が腕を押されて苦しんでいる。

……といつても、そんなに大したことは無い。猫に引っかかれたよ  
うな傷だ。まあ、あれくらいならポケセンも近いし、大丈夫だろう。  
まったく情けないな、あんな傷で。……じゃないか。一体誰に？

「新聞に載つてた、『危険なポケモン』が……」

「危険な、ポケモン……気になつてたんですけど、その危険なポケ  
モンというのは一体どんなポケモンなんですか？」

「そんなの知らないよ！　見たこと無いんだ、あんなポケモン！」  
「見たこと無い……カントー地方のポケモンじゃないってことか。

「ほ、ほらあそこだ！」

「え、どこー？」

男の人が指をさす。……いた。そのポケモンは、数人の男に囲まれていた。

「き、危険なポケモンがいたから、殺そうとして……そしたら引っかかれたんだ！」

「……切り裂かれなかつただけ、よかつたでしょ？ ほら早くポケセンに行つたらどうですか」

「あ、ああ……。くそ、畜生が」

とりあえず、情けない男を退場させてポケモンのいる方へ向かう。『殺す』というのは穏やかじやない。助けられるなら、助けないと。

もう、あのポケモンが何なのか、俺には分かつたんだよ。

「シグー、あのポケモン、悪いポケモンなの？」

「さあな。それをこれから確かめに行くんだ。サイホーンはそこにいな」

「…………」

「くそ、よくも人間様を引っかけてくれたな！」

「…………」

「こつちには、銃があるんだぞ！ 銃がなんなかくらい分かるだろー。大人しく捕まれ！」

「…………いやだ」

「チツ、だつたら撃つてやるよー」

「はい、そこまでにしどきな」

銃を持った男の腕を掴む。

囲んでいるのは、3、4人の男たち。その全員が銃を持っていた。  
この世界に銃刀法違反はないのな。まあポケモンが危険なのは否定  
できないし、しょうがないか。

……怖くないかって？ 怖いに決まつてんだろ銃なんて物騒なもん  
持つてる奴ら。

だけど、怖がつてちやポケモン助けられないしな。

「誰だ、お前！？」

「誰だと聞かれてもな。ポケモントレーナーだよ」

「今からな、危険なポケモンの処分をするんだ！ 邪魔すんじゃね  
えよ！」

「そろはいかないな。トレーナーはポケモンを守るもんだ」

「ああ？ そりや逆だろ！ ポケモンがトレーナーを守るんだ！  
だから、人に危害を加えるこのポケモンを、今から射殺してやるん  
だよ！」

「お前の価値観なんて知ったこっちゃない。……あの男の傷、ちや  
んと見たか？」

「見たから、今こうやって射殺しようとしてるんだろ！」

「そうじやねえだろ。あの男の傷、本当に浅かった。飼い猫どじや  
れあつてる内にできたような傷だ。あの男が大げさに騒きたててい  
ただけだ」

「……おいおい、力が弱けりや、問題ないとでも思つてんのか？」

「お前、頭悪いな」

「ああ！？」

あまりの小物臭に、敬語を使う氣すら失せた。最初から使ってない  
？ 気にするな。

「あの子、ちゃんと人が傷つかないように手加減してるんだよ」

「……なんだと？」

そのポケモンは、自分が殺されそうになりながらも、自分は人が傷つかないように手加減してたんだ。たいしたポケモンだと思つ。

「お前らが勝手に騒ぎたてるから……すっかり怯えてる。おおかたあいつがいきなり近づいたから、びっくりしてすこし引っかいてしまった、って感じだる」

「……しかしだな」

「お前らの、『危険なポケモンだから処分する』なんていう大義名分、もう使えねえよ」

まだ大上際の悪い言い訳を続けようとするが、バッサリ切り捨てる。こいつら、多分このポケモンを撃ちたいだけだ。最初に銃を構えた時、顔が笑つてたしな。

「だつて、こいつは危険なんかじゃない。すうじく優しい子だよ。  
なあ、アブソル」

彼女に近づきながら、そつと言った。白い髪、黒い角と尻尾。アブソルしかいない。

最初は構えていたアブソルも、名前を言ひとすこし構えを緩めた。怖かつたんだろう、人間が。わざわいポケモンとして、何度も理不尽な目に遭ってきたんだろう。

「もう、安心だ。俺がお前の誤解を解いたからな」

「……あん、しん」

よつやく、少ししゃべってくれた。アブソルの警戒も、徐々に解けていくのがいくのが分かる。

なんてことはない、優しい普通のポケモンだ。誰が、こんな優しいポケモンを危険なんて言ったんだよ。

アブソルとの距離が縮まっていく。アブソルは、サイホーンより少し背が高いくらいだった。自然と、俺はアブソルの頭を撫でようとした。近づいた。そのとき。

パン。

「 ッ！！」

「アブソルツ！？」

何か、乾いた音が聞こえた。

アブソルが、苦痛に顔をゆがめる。赤い水が、血が、彼女の腕から流れ出した。ちょうど、あの男が引っかかれた箇所

「まさかっ……！」

「へつ……俺を引っかいた仕返しだ、屑め」

「テツメエツ……！」

やつぱり、あのビビリも銃を持ってたんだ！　あの乾いた音は発砲音か！

「どんな御託を並べようがなあ！　人間様に害を及ぼすのは悪なん

だ」

「はい、ビーンツー！」

「 はつ？」

台詞の途中で、ビビリが吹っ飛んだ。  
いいきみだ。

「ナイス、サイホーン！」

「えつへへ、大丈夫！ 手加減はできるようになったからー！」

手加減なしでやっても良かつた気がするけどな。

「畜生、何しやがるー！」

パン、パン、と続けざまに、鉛の玉がサイホーンへ向かって飛んでいく。

一瞬ヤバいと思ったが サイホーンは、まったくの無傷。むしろ、余裕の表情だ。

「あはは、何やつてるの？ バカだなあ」「

「な、なつ……！？」

「私は、『岩』ポケモンだよ？ 本格的な猟銃ならともかく、そんな拳銃で私を狙うなんて……なめてるとしか思えないね」

……銃で撃たれても無傷とか、ポケモンってすごいな。

なんか、サイホーンがすごく賢く見えるぞ。猟銃と拳銃って、そんなに違うもんなんだ。……って、俺が馬鹿なのか？

やつぱり野生つてのは、いろいろ狙われたりするんだろうかな。

「シグ、こいつら完全に素人。持ってる銃も狩猟用かと思ったら、ただの護身用で売っているような普通の拳銃。狩猟 자체には慣れてないみたいだし、これなら大丈夫だよ。早くその子をポケモンセンターまで連れてってあげて」

「お、おう！ ……アブソル、ボールの中に入ってくれるか」

ポケモンセンターに行つたとしても、ボールの中に入つてなければ深刻な傷までは治せないんだ。だけど、ここまで怯えているアブソルを説得できるかどうか……。

「…………うん」

「よし、じゃあ中に入つてくれ

だけど、アブソルは素直に受け入れてくれた。

モンスター・ボールを投げる、といふか、アブソルにそつと当てる。お馴染みのピコーンという音と共に、アブソルは無事にボールの中に入った。

「に、逃がすか！」

「それは、」

サイホーンが、身を低くかがめる。

……あ、せばこ、いのす。

殺る気だ。

「いじのせりふでしょ！がつーー！」

「げえつーー？」

さつきの突進と比べてかなり強力な突進が、再びビビリの腹にクリーンヒット。今度こそ、持っていた拳銃がビビリの手から落ちる。

「そ、早く行つて！　こいつらの相手は私に任せとこー。」

俺のサイホーンがこんなにかっこいいわけがない。

なんて言つてる場合では無く、急いでポケセンへ直行。

「すいませんー。」こいつの治療お願いできますか！

「あ、はい！　さつきの発砲音と何か関係が？」

「そうこいつです！　できれば警察呼んで頂けるとありがたいです！」

「それはもう、発砲音が聞こえたので、とっくのとうに呼びました。ありがとうございます、さすがジョーライさんほどこのジャーイさんも頼りになる。

「……ほら、もう来たようですよ」

お前たちそこで何してるんだ!  
外からそんな声が聞こえてきた。

「しかし、災難でしたね」

「無事、警察はあいつらをお縄につかせたそ�で。」

「まあ、誰も死ななくて良かつたです」

「あはは、まつたくだね!」

「言つとくけど、お前が半殺しにしてたあいつらのことを言つてん  
だぞ」

「あ、あはは……」

あの男たち、タチの悪い狩猟グループだつたらしい。全員、許可なし、免許なしで勝手にポケモンを殺すものだから、問題になつてい  
たとか。

まあ、俺は様子を見てなかつたんだが、本当にサイホーン無双だつ  
たとか。警察が来た時には、全員ボコボコで拳銃も全部取り上げら

れていたらしい。

卷之三

「本当によかつたです」

おとそへたアソン川ででこ

三

うーん、無口なのは、元からだつたんだな。  
今は全く警戒してない  
し、怯えてもいなからいいけどね。

「ふむ、確かに、騒ぎになつてゐたあのポケモンと同じだが、本当に大人しくなつてゐるな。君といふことで落ちつてゐるよつだ」「はあ……」

警察官にじつと見られると、アフソルは無言でキヨヒと俺の服を掴んできた。うーん、ポケモンに懐かれやすいつてのは、意外と間違いではない、のか……？

「まあこちらとしても、できるだけ野生のポケモンを傷つけたくない。君がそのポケモンを捕まえてくれて、本当によかつたよ」

にはまあ無我夢中だったもので……でも捕まえたからには責任を持つてこいつを育てますよ！　ってなわけで、よろしくなア

二〇

やつぱり、  
懐かれてるわけじやないかあ……。

「…………よろしく  
……」

どこか明後日の向こうを向きながら、アブソルが呟いた。  
可愛いな、ここにつけー！

「…………むー」

ついつい抱きしめてしまひ。とくに拒絶されてる様子もなく、アブソルは抱きしめられ続けている。

ただ、

「…………私でも、シグから抱きしめてもらつたことなんてないのに」

何て言つてるかいまいち聞こえないけど、サイホーンがすこく面白くない顔をしているのは……なんでだらう……。

## 危険なポケモン。（後書き）

アブソルって伝説のポケモンみたいな雰囲気出してますよね。  
でもかっこよさだけでなく可愛さも備えてますよね。  
そんなアブソルが大好きです時雨豊です。

## アブソル。

「…………ううー」

「み、みんな……いや、なんか、本当ゴメン」

「…………心折れそうだよー」

ニードラン ヒポッポの言葉に耳が痛くなる。

今、俺はサイホーンと同じくアブソルの努力値を振りに、再びニビシティ前の草むらに来た。

条件はサイホーンの時と同じだ。相手にするのはニードラン ヒポップのみ、両方とも、倒せるギリギリの力で倒す。しかし使う技は自由だ。

しかし、なにしろアブソルは無言で延々とバッタバッタ倒していくし……それに

「つてかさ、何で一回も攻撃できないワケ！？」

「なーんか納得いかない！ 攻撃できないんじや勝てる訳ないじゃん！」

「だ、だからさ、そういう技なんだって……」

「…………不意打ち」

問題が、このアブソルの「ふいつか」。何しろ威力が高い上に、攻撃技を当てようとした瞬間に発動する先制技だから、一切の攻撃を許さない。

サイホーンの時は、まだ攻撃を仕掛けられたり、サイホーンも何度か倒れそうになつた。しかし、アブソルは先制技があるので今までで攻撃されたことすらない。

「じゃ、じゃあアブソル。次は不意打ち以外の技を使ってみて。何でもいいから」

「……分かった」

「よーし、じゃあ行くぞー！」

そうして、今日のノルマ『50匹』を倒すことができた。50匹も倒したもんだから、もうすでに辺りは暗い。

本当は20匹ずつにしておいたのだが……ニドラン達から言われたんだ。

『俺達は全員でだいたい50匹ずつこなして、一気にかかつてこよー』

……まあ、アブソルの相手を何日もするのは辛かつたんだが。一日50匹ずつなら三日だ。

初日の結果。

アブソルの覚えている技は、『ふいうち』『サイコカッター』『かまいたち』『しつぺ返し』『追い打ち』『ちょぼつか』。いまのところ分かったのはこれくらいだ。さすがに豊富なレパートリー。

……特に、挑発した時はびっくりした。

『ああっ、もうー。少しくらい攻撃せりひてのー。』

「ドランが、アブソルにらみつけたときだ。

『……………ふつ』

『な、なななつ！？ わ、笑うなコノヤローツーー。』

その後見事に不意打ちでKOされたのは言つまでも無い。

「それにしても、いつも『めんな、二ドラン も、ポッポも「いいよいよ。シグみたいにわざわざきずぐすりをくれるお人よしも中々いないからね。最後までつきあつたげるよ』

良い奴だなあ……。

「……………疲れた」

「お、アブソルもお疲れ様。あと一日、頑張つてな」

「……………うん」

「ニードーラーンツー！」

「おお？ 何だ俺の名前を呼ぶ奴は？」

「ウビーん！」

「ウボアーッ！…？」

サイホーンの声と共に、ニードランは吹き飛んだ。

「ニードラン（ゆうかん）よ……お前はホントに不運な奴だな……。

「『』ほつ……おまつ、突進の威力、また、上がったな……」

「えへへー、そう？ そうかな？」

「サイホーン。お前が笑ってる間にニードランは死にそうだぞ」

サイホーンも、久々（といつても実は一、二日しかたっていない）の再会を喜んでいる。

「それより、お前ジムリーダーに勝つたんだってなー、す『』こじやん！」

「でしょ？ これもみんなのおかげだよー！」

「……ジムリーダー」

「ん？ アブソルはジムリーダー知ってるのか？」

「私、ハナダのジムリーダーに捕まりそうになつた

つ！

ハナダのジムリーダー……カスミか。

「だから、山のこっち側まで逃げてきた」

「そう、なのか」

……アブソル。そういうば氣になつていた。何故アブソルがこんなところにいたのか。

「なあ、教えてくれないか？ なんでアブソルがこんなところに来たのか」

「……うん」

山のぬしさまがトレーナーに捕まつたの。

ぬしさまのお世継ぎもまだいなかつたから、当然山のポケモンたちはバラバラになつた。

まとめる人がいなくなつたから、山の「ちあん」が悪くなつた。

ぬしさまの側近だつたお母さんも、立場を追わされて、

さらに、みんなの怒りの矛先は、私たちアブソル族に向けられた。

アブソルが災いを呼んだんだつて。みんなみんな、アブソルのせいだつて。

みんながみんな、アブソルのせいにして、私たちは山を追い出された。

私たちには行くばしょがなかつた。だつて、私たちはわざわいポケモン。

にんげんは、私たちを見るとすぐこわくなる。災いをよぶと思いつ込んでるから。

だから、にんげんが知らないばしょを探そつとがんばつた。

だけど、同じアブソルが、にんげんに捕まつて危ない目にあつてたから。

わたしは、にんげんたちをやつけて、アブソルを助けた。

そのせいで、あづけばアブソルは危険なポケモンになつてた。

みんなが私をさがした。

みんなが私たちをこころした。

みんな、私のせいだ。

わたしは、とんでもないことをしつやつたの。

でも、しにたくなかつた。だから逃げた。

ジムリーダーが、私を捕まえようと追いかけてきたから、

このそれちやうど思つて、おつきみやまにかくれた。

でも私は『危険なポケモン』になつてたから。にんげんがたくさんいる、山のなかにはいられなかつた。

だから、外かじりうちがわへ逃げた。

そしたら、銃をもつたにんげんがこっちに来て

「あとは、シグも知っているとおり。私のこと、シグが助けてくれた」

「なるほど……」

ポケモン社会も、難しいんだな。気楽なもんじゃないんだ。

「ありがとな、アブソル。話してくれて」

「んーん。……シグは、命のおんじん。これくらい、あたりまえ」

命の恩人、か。

その言葉は、今後も重くのしかかつてくるんだろうか。

命を救つたことを、「気にするな」なんて、言えないよな。

「……そつか。これからもよろしくな、アブソル」

「ん」

頭を撫でると、少し安心するみたいだ。顔が少しだけ綻ぶ。……アブソルの母親も、こんな風に彼女の頭を撫でてたのかな。

「……少し、話しそぎてつかれた。……むね、借りていいい?」

「おお、大歓迎だ。少し眠つてな

トン、と、胸の横にアブソルの頭が当たる。

周りの喧騒がまだ続く中　彼女の頭に手を置きながら、俺自身も眠くなってきて。

結局、一人寄り添う形で寝ることになった。

## アブソル。（後書き）

『危険』というのは、結局人間のエゴなんでしょうか。  
それにも、シグくんがどんどん一人歩きしてしまいます。

## ロケシト団 前編（前書き）

長くなつたので前編後編に分けました、

## ロケジト団 前編

「よし……みんな準備はいいか?」

「ばんたん!」

「……うん」

「じゃあレッジゴー お月見山!」

俺達はアブソルの努力値を振り終え、再びお月見山に来ていた。

「さて、と……お月見山に入るのは初めてだな」

「そうだねえ。山の中だから、やっぱりポケモンもたくさんかな?」

「だらうな。まあ、気をつけてな」

お月見山の中……まあ、分かつてたけど、ゲームと違つて暗い。

「これじゃ、ちょっと厳しいな……」

「……私、フラッシュを使えるよ」

「お、本当か? 助かるよ」

アブソルが手をかざすと、辺りが明るくなる。

……まあ、ゲームと違つて、ポケモンとか集まつてくるかもだけど。

「あ、ちょっとそここの君！」

そしてトレーナーも集まつて来るわけだな。

「よし、勝負だ！」

これまでで、数人のトレーナーに出くわした。

サイホーンの強さは健在だ。アブソルもそれなりに強いが、やっぱ  
りサイホーンの方が一枚上手。

まあ、出会つて数日のアブソルに負けたら、サイホーンの立つ瀬が  
なくなるつてな。

「みんな大丈夫か？ どうか怪我したんなら遠慮なく言えよ」

「大丈夫だよー」「だいじょうぶ」

「本当かよ？」

こいつら、怪我したつて自分で気付かないもんな……特に、サイ  
ホーン。

まあ、この辺のポケモンぐらうこいつらだったら充分勝てるし、問  
題ないかな。

……この辺の、ポケモン？

待てよ？ この辺のポケモンって……よく考えたら、山に入つてから野生のポケモンに遭つたか？

『この辺のポケモンくらい』と思つたのは、あくまでゲーム内の話、だよな？

実際のところ、野生のポケモンなんか見てない。……どうしてだ？

「なあ……アブソル。お前、この山の中にしばらくなんだよな？」

「こちおり」

「……そのころ、野生のポケモンついていた？」

「たくさんいた。でも、にんげんがたくさん入つてきてから、いなくなつた」

「つー！」

ロケット団……。それしか考えられない。

やっぱり、いるんだ。この山に。そして、まだいる可能性が充分にある。

だって、入口付近でしかトレーナーを見かけていないんだ。つまり、ロケット団がまだ占拠してゐることだらう。……となると、これらへんもロケット団の活動範囲つてことか？

「…………！」

「…………隠れて！ アブソルはフラッシュを消してくれ！」

人の声が聞こえる。大人の声だ。  
ロケット団と決まつたわけではないが、そのことを考えていたため、一応。

「…………おかしいな。こっちに子供の声が聞こえたと思つたんだが」「ほつとけほつとけ。ボスが言つてたろ？ 来るもの拒んで去る者追わず、ってな。ここはボスの言うとおりに仕事してようぜ」「つつてもよ、『野生のポケモンを見つけ次第捕まえる』だぜ？ もうどこにも野生のポケモンなんていやしねえよ。ボスはボスで、一心不乱に月の石を探してゐるしさ」「いいから黙つて仕事だ。実験対象は多いに越したことないしな。

ボスの言つことはよく分からんが、それで失敗したことは無いしな

「それもやうだ」

無駄話をしてくれたおかげで、いろいろ分かつたな。

やっぱりロケット団である可能性が非常に高い。そして、違つたとしても野生のポケモンが見当たらないのは奴らの仕業だ。

そして、奴らの言つ『ボス』が、このお月見山にいるといつて。ボスってことは、サカキか？ おいおいマジかよ。お月見山にサカキが来るなんてイベントはないぞ？

ゲームの世界どおりに物事は進まないってことか……。

……これは、危険だ。

「戻ろ、二人共」

「えつ？ 何で？」

「今は危険だ。ほとぼりが冷めるまで、お月見山には入らないでお

こづ」

「……危険って、どういうこと？」

「ロケット団がまだ中に入いる可能性が高い。……あー、ロケット団

つてのは、要するに悪い奴らだ

「悪い奴らが、まだ中にいるの?」

「そう。ポケモンに酷いことをする、いつも悪いことを考えている人間だ」

「そ、そーなの? それなら、あいつらみたいに私が

「駄目。悪い奴はあんな素人ばっかじやない。岩ポケモンの対処くらいできてる」

あくまで、推測だが。推測だからと、ロケット団に突っ込むのはいささか危険すぎる。

ポケモンの漫画では、主人公がロケット団に何度も殺されかけたしな。

「さ、戻るぞ。今来た道を引き返そう」

「うん、そうだね」

「……ポケモンは

「え？」

「あの、ひどこ！」とされたポケモンはどうなつたやうに？

「つー

アブソルが、ほそりと言つた一言。

いつものように、明後田の方向を回ったまま呟いた小さな一言にす  
ぎない。

「……そんなの、決まつてんだろ」

だが、その一言は、大きな力で俺を突き動かした。

「今から、俺に助けられるんだよ」

俺は何をびびつてたんだ？

言つてたじやないか、『野生のポケモンを見つけ次第捕まえる』つ  
て！

そして、悪用されるのは田に見えてるんだ。ポケモントレーナーと  
して見過ぎすわけにはいかない！

「いぐぞ、アブソル、サイホーン！」

ロケット団と思われる奴らが引き返した道を走る。

見つかるとかそういうことをまったく考えずに走る。あえてフラッシュコをつけないまま、とにかく走る。

いた。

「お、おこー やっぱ誰かいるだー!？」

「まあ落ちつけよ。子供の声が聞こえるって言ったのはお前だろ。子供だ、子供。ちよっと脅してやつや あ逃げなつて」

「こつけええええええええつーーー！」

「……は?」

「つどーん!」

「ぐべえつー?」

「な、なんだなんだー!？」

「アブソル!」

「……えいや」

「ぐべつー?」

「……セントブル、フラッシュコつけたへくれ  
「はー」

……状況がよく分からなかつたけど。

多分、サイホーンは突進したんだろうな。それはもう分かる。  
アブソルは……殴ったのか？ 『いつの顔、めっちゃ腫れてるんだ  
が。

さて、まあどうやつて倒したかはいい。

こいつらの服には、でっかく『R』と書いてある。ロケット団で決  
定だ。

そして、こいつらが持つてた袋。中にモンスター・ボールが大量に入  
つていて。

おそらく、これに入つてるのが野生ポケモンたちなんだろう。袋に  
入つているから、中から出て来れないんだ。

よし、

「でてきてくれ、みんな！」

袋を逆さにして、ボールを全部ドサドサ出す。

ポポポポポポボボボボボボボボボーネン。ポポボボボボーネン。ポボ  
ボボーン。

とにかく、イシップテ、パラス、ズバット、大量にいた。全員で2  
〇〇匹程いた。乱獲にも程がある。

「あ、あれれ？」 「あれ？ ここはお月見山？」 「戻ってきたの？」  
「ここどこ？」 「一時はどうなるかと思った！」 「怖いよーー！」

「どうやら戻ってきたみたいだ」「お月見山でいいの？」「どうか他の山じゃないの？」「ここは間違いなくお月見山だね！」「ふう、どうやら安心だ」「うわ、口ケット団が倒れてる…」「わ、本当にだ…」「ほにゅとく？」「いや、もうほにゅられてるよ」「それにしても誰が助けてくれたんだ？」「とにかくみんな無事みたいだね！」「他の奴らに捕まつたポケモンたちが心配だな…」「あれ？どうなったの？」「あーもう」ちや」ちやしてて分かり辛いよ！」「しょうがないでしょ？」「まあ口ケット団の実験体になるよりよかつたじゃない」「ピッピ達は？」「そつにえれば月の石も探してるって言ってたね」「眠い…」「月の石と深くかかわってるピッピが心配だな」「月の石が取りつくされてないといいけど」「ちよつとズバット！あんまり押さないでよ！」「だつてえー」「こいつらはボスじゃないのかな？」「まだまだたくさんいそうだね」「じゃあ早めに逃げちゃおうよー」「待つて、混雑してて何がなんだか分かんない！」

「わあ……たくさんだね」  
「……よかつた」  
「ああ、そうだな。よかつた」

「みんな、みんなが入つてたボール、壊していいよな？」  
「もちろん…」「粉々にしきやつて…」

「これもこの世界のルールだが、持ち主のボールが壊れると、ポケモンは自由になり、再び野生に戻る。

……だが、これは口ケット団にも利用されていることだ。持ち主のボールを破壊し、その人のポケモンを無理やり捕まえる、という使

い方もできるから。」こは、充分に注意しないと危険だ。ボールは相手に見せないようにしよう。

だから、袋に入っていたボールを全部踏みつぶした。そして、ポケモンたちはそれを合図に散り散りに逃げていった。

「……さて、次だな」

こいつらは一人で行動していたから、アブソルとサイホーンで何とかなった。けど、3人以上の場合、すぐには倒しきれないから危ない。

……どうするかな。さすがに、いきなりロケット団のボスとやらにぶち当たつたら一旦引くしかない。  
とりあえず、進むしかないか。

「……」つから先は、走っちゃだめだ。慎重に行くぞ

サイホーンが「えー」とか言つてたけど、聞こえなかつたふりをしておく。こいつが暴走したら、きちんと止めてやらないとな。サイホーンを見ながら、地下へのはしごを下つていぐ。

そしてはしごを下りきつた時、変化は起きた。

「……アブソル、大丈夫？ 顔色、悪いよ」

「……サイホーンこそ」

「え？ ……本当だ。アブソル、サイホーンも。どうしたんだ？」

「アブソル、もしかして」

「サイホーンも、もしかして？」

「お、おいおい。なんなんだ？」

「とつても、嫌なかんじがする」

「そう、そんな感じ。なんか……吐きそうなくらい、嫌な感じ。なんかね……体験したことあるんだよ。そんな昔じゃない、1年か、2年前に」

「……私も、それくらい」

嫌な、感じ？

俺は感じないけどな。ポケモンだけが感じる何か？

「ボスが放つ邪悪なオーラを感じる……みたいな？」

「シグ、冗談なんか言つてる場合じや……いや、あながち間違つて

ないかも

「え？ つまりボスが近くに」

「静かに」

アブソルの指が、口を押さえる。ちょっとビデキッとした  
言つてる場合じゃないな。俺も聞こえる。  
なんて

「……出雲様、そろそろ出ませんか？ いい加減怪しまれますよ」

「いいんだよ。月の石、今何個か覚えてるか？」

「えっと……5個ですね」

「だろ？ 最低条件の六個すら取れてねえんだぞ。ほら黙つて仕事

しろ」

「は、はい」

……出雲様？ サカキじゃないのか？ ジャア、幹部か？ いや、

でも月の石を探しているのはボスって言つてたしな……。

それに、フラッシュで辺りを照らしているポケモン。

あれは、ジバコイル……かなり強力なポケモンだ。そいつのトレーナーが持つてるとは思えない。

何か、この世界でイレギュラーが起きてるのか？ 何こじらもつ少し聞いてみる価値はありそうだ。

「……つたくよお、やつぱゲームとは少しづつ出現確率も違うんだよなー。ピッピを捕まえたって連絡も入つて来ないし？見かけたポケモンも個体値低いし？ここで帰つたら何のためにこの山に入ってきたんだって話だよ。せめてどれか1~くらいいてもいいんだがな。なあ？」

「は、はい？」

「あ、スマン。お前に話しても分からんよなー。はあ……」

……出現確率？ ゲーム？ 個体値つ！？

まさか、この出雲つて奴……俺と同じ、ポケモン世界に紛れこんできた人間世界の人間？ しかも、こいつは俗に言う廃人じゃないか

……？

というか、見かけたポケモンの個体値つて……どうやって調べてんだ？ スペクタクルズでも持つてんのかあいつは。

「月の石が、もしかしてこれ以上無いとか言わないよな？ ま、ピッピが見つからないなら5個でも足りるけど……。実際、一ドリーナと二ドリーノの一匹分あれば一応問題ないし」

「じゃあ、これで帰るんですか？」

「バーカ、ぎりぎりまで粘れよ。あ、あの実験体のイーブイ出してくれ

「あ、はい」

イーブイ……実験体？ どうこうことだ？

ポン、と音がして、イーブイが出てくる。

傷だらけの状態で。

「…………う」

よく見たら、手足も縄で縛られている。

……酷い。自分でボールの出入りが出来ないようになってしまっているんだ。

「よお、お前さあ。月の石で進化とかできぬい？」

「……出雲様、イーブイには、月の石で進化するところトータはあります」

「分かってるよ、んなこと。だが、イーブイはしんかポケモンだ。ゲームでも、この世界でも知られていない未知の可能性があるんじやないかってさあ。ほら、懐き度が最低の時だけ進化できるー、とかさ。で、どうよ?」

「…………」

「まだだんまりかよ。つたく、お前、本当にどうこう状況が分かってる? お前の代わりはまだいるんだよ。いいか、お前は『どの石で進化するか』を研究する係だ。炎の石、雷の石、水の石でイーブイが進化するのは分かってる。だからお前は、『太陽の石』『月の石』『目覚め石』『光の石』『闇の石』『リーフの石』で進化しないかどうか調べる係だ。言つこと聞かないなら殺すよ?」

「…………」

「『』めん、嘘。実際のところイーブイなんて數十匹しかいないんだよ。貴重な被検体なんだよ。だから大人しく言つこと聞いてくれないかな? 石で進化するかどうかは、ポケモン自身の意思で決まる。サトシのピカチュウとかがいい例だ。だからさあ、お前が言つこと聞いてくれないと実験結果が分からぬんだよ」

「…………」

「はあ……っ」

ガスッ！　と鈍い音がした。

あいつが、イーブイを、蹴り飛ばす音。

「～～～つ！」

「そんなに我慢してもさあ、別に拷問してるわけじゃねえんだぞ？　泣き声出すことも出来ねえのか？　お前は俺を苛立たせる機械か？　ああ？　円の石が見つからない、下つ端の役立たず共は。ピッピもろくに探し出せねえ。イライラしてんだよ。さらにお前が俺を無視するからやれりにイラつくんだよ。無視されんのが一番イラつくんだよ。」

「～～！　～～～つ！」

何度も蹴られる音が響く。イーブイが必死に耐えて漏れた声が響く。  
洞窟に響く。

そして、俺にも響く。

サイホーン、アブソル、ごめん。

「ちよ、シグフ……！？」

「はあ、なあ何でずっと黙つてるわけ？　俺がお前を捕まえてからさあ、お前の声なんて、俺がお前を蹴った時の喘ぎ声でしか聞いたことないんだけど」

「……っ」

「なあ、死んでみる？　一応数十匹はいるからで、お前が死んでも別にそこまで困らないんだよ。なあ死んでみる？」

「出雲様っ！」

「あ？　何だよ？」

「後ろ、後ろ……！」

「ああ？　後ろがどうか」「

ガスッ。

全力で頬を殴つた確かな感触が、腕から伝わってくる。  
俺は、見てられなかつた。イーブイが、無抵抗のポケモンが蹴られてる姿を。

いつの間にか、足と手が出て。  
そして、気付いたらこいつを殴つていた。

……しかし、件の出雲は微動だにしていなかつた。

殴られながらも、何もしない。ただ、こちらを睨みつけてくる。

こいつは近くで見ると、そんなに歳は離れていない。20歳くらいだ。  
しかし、今まで俺が見てきたどんな人間よりも、こいつは迫力があつた。

「……痛えな、ガキ」

殺氣の対象が、イーブイから俺に移る。

怖い。

けど、怖がつてちゃイーブイを守れない、よな。

「イーブイより、痛いか？」

「あ？」

「お前がイーブイに与えた痛みより、痛いかつて聞いてんだよー。」

「……ハツ」

ガシッ、と、俺の手が掴まれて、出雲の頬を離れる。不敵に笑つてやがるが、とんでもなく力が強い。……おいおい。こいつ、本当に人間か？

「 そりゃ、イーブイじゃねえから分かんねえわ  
「 セウカよ」

言しながら、出雲の腹にひざ蹴つを当てる。

「 ..... っー?」

が、やはり微動だにしない。

「 なつてねえなあ。ひざ蹴つってのは  
」

ぐいっと、掴まれた腕を引っ張られる。

ヤバツ、

ドスッ! と、鋭い一撃が腹に響く。

「 げほつ ..... ー!」

「 ハハこのひだり!」

出雲が何か言つてゐるが、そんなの氣にしている暇は無い。気持ち悪い。内臓がぐちやぐちやに潰されたかのような、受けたことのないひざ蹴り。

「つだああああああつーーー！」

「ん？」

「ば……バカ、サイホーン！ 出てくんな！」

「あ、お前の手持ちか」

パシ、と音がする。

それは、サイホーンがぶつかつた音なんかじゃない。

サイホーンの突進が、手で受け止められた音。

ギリギリ、とサイホーンの頭を握る音がする。

「サイホーンつーーー！」

「なつ、なつ……ーーー？」

「俺をそちらの人間と同じと思つてんのか？」

お前のサイホーンは

「……お前、本当に人間じゃないみたいだな」「鍛えてんだよ、ポケモンにも負けないようにな

出雲は、サイホーンの頭を掴んだまま、じわらへ寄せる。そして彼女を舐めるように見ると、

「ふーん……H30・A31・B30・C17・D28・S31…  
…2V2Uか、へえー、まあなかなか良个体じゃないか?」  
「はつ……！」

「こいつ、一瞬で個体値を調べた? どうやって?」

「あ、分かんねえよな個体値なんて。スマンスマン」「なん……で」

「なんで、個体値を、一瞬で見抜けたんだ……?」

その言葉で、出雲が目を丸くして、サイホーンを落とした。

「サイホーンっ! 大丈夫か! ?」「う、うん……ちょっとクラクラするけど、だいじょぶ……」

「……仲間」

「出雲様、どうしたんですか?」

「どうしたって、仲間だよ仲間! 僕と同じ! 人間世界の住人だつ! 二人目だよ二人目! 」「…………?」

「なあ、そうだろ？ 人間世界の住人なんだろ？ アハハツ、俺の仲間だ！」

「……黙れよ」

「そういうなよー、ひざ蹴りしたのは悪かつたからさあ、な、俺と同じ、人間世界から迷い込んだ仲間だうつ？」

「ポケモンを平氣で傷つけのお前と、俺と一緒にすんじゃねえって言つてんだよー！」

「…………ハツ。本当に、やつぱり仲間じゃねえな」  
また、出雲は鼻で笑う。

「ポケモンのゲームやつてんなら、ポケモンの都合なんて考えないもんなあ。だから俺はロケット団に入つて、ザコのサカキをぶつ潰して、ロケット団の新たなボスになつたんだ」

「ここの世界のポケモンは、生きてんだろうがっ！ ゲームに組み込まれたコンピューターじゃない、この世界でしつかりと生きてる生きものだらうが！ ゲームで厳選作業とかタブンネ狩りとかそんなことは言わねえよ、だけどな、ここはポケモンが生きてる世界だ！ それをゲーム感覚でやつてんじゃねえよー！」

「ハツ、分かんねえなあ。ゲーム感覚でやるな？ 生きてるか、生きてないか、それだけの違いだろ。あ、まあついでに擬人化されるけどやー。つかさあ、そういうお前もそのサイホーンの個体値、

厳選したんだろ?」「

「はあつ!? お前と一緒にすんな! 偶然だよ偶然!」「

「ふん、偶然、ね……」「

俺は、こいつの考えとは一生相容れないだろう。

こんな奴と一緒にいたくない。

なら、早めに終わらせるべきだよな。

「アブソルツ!」

「……つ!」「

「お、もう一匹いたのか。だが何匹来ようと、そこらへんのポケモンに負けは」「

「誰がお前を狙うって言った?」

「……え、じつち? え、ちょっと待つて無理無理助けて出靈を

」「

「えいっ!」「

「ま、っ」

アブソルの空中かかと落としが、ロケット団下つ端の脳天に直撃。  
……死んで、ないよな？

「アブソル、袋の中の物出せつー」

「しまつ」

「サザササササ、と音がして、袋からボールが溢れる。

そして、凄まじい量のボールからポケモンが飛び出した。

「くっそ、してやられた！」

「アブソル、分かつてると思つけどー。」

「うん、イーブイのボールは、ちゃんと持つてね  
「ナイス！」

「イーブイ、ボールのなかに、入つて」

その一言で、イーブイが赤い光になつて、ボールの中に入つていつた。……ポケモンでもボールの中の出し入れを命令できるんだな。

「アブソルはそのまま先へ進んでくれー！」

「わかった」

「ハツ、逃がすと思つて……？ 何だ？」

今さつきまで獲物を狙つ田をしていたのに、何故か今は困惑している。

よく分からぬが、これはチャンスだ。

「サイホーン！」

「はいっ！」

サイホーンに手を引っ張つてもらい、走る。

言動からして、あいつもかなり強力なポケモンを持っているしそうだが……出してこないな。

まあ、追っこないに越したことはない。今は、逃げる」とだけを考えよう！

「行こう、一人とも！」

それについても、あいつは一体何を考えて

「……ドサイデン。バンギラス。出て来いよ」

振り向くと、ポケモンが一人、出雲の前にいた。

ドサイデンは、硬そうなプロテクターで身を包んだ二十代後半くらいの女性。

バンギラスは、緑色の硬そうな鎧を纏った四十代くらいの本身の男。

哀しそうな、顔をして。

そして、その瞬間、

「お母さんっ！？」

「ぬしだまーー？」

「え、何だつて！？」

サイホーンだけでなくアブソルまで声を荒げ、急ブレーキをかけた。

「なるほどねえ。だから『逃がしてやれ』なんて言つたんだ?」

「……はい、そうです」

「お前ら一人は優しいからなあ。ま、この程度のわがままなら許してもいいけどさ。可愛いお前たちの言ひこと、だからな?」

明らかに面倒くさがり言ひ。

……せつきから、ここは謎が多い。個体値を見抜いたのもそうだ  
が、何でボールの中のポケモンの言葉が分かるんだ?

いや、そんなことよりだ。

ここつのドサイドンがサイホーンの『お母さん』『ぬしだま』?

ここつのバンギラスがアブソルの『ぬしだま』?

どうこう云々あわせだよ……。よつによつて、こんなトレーナーに使われてるなんて……。

「そ、そんな、お母さん……？」

「……行きなさい。今の私では、あなたに何も言えないから」

「……ぬし、さま」

「あの時の、アブソル一家か……すまないこととした」

言葉を交わすも、四人は近づかない。近づけない。

それは、イーブイという命、そして俺という命を預かっているからだろう。

四人とも分かつていて。

今は、感動の再会を喜ぶ状況では、ない。

サイホーンの、実の母親。そして、あのアブソルが声を荒げるほど大事な山の主。

本当は、四人とも抱き合って喜びたいだらう。

だけどそれは許されない。

「ほら、早く行きな。俺の気が変わらない内にな」

「……が、邪魔をするから。」

「……アブソル、サイホーン。走るぞ」

二人は、無言で走る。

微かに一つの嗚咽が聞こえたけど、何も言わずに俺も走った。

## ロケット団 後編（後書き）

出雲は、最初はシグのライバルで熱血なキャラでした。  
いつの間にか黒幕みたいになっちゃいましたねえ…（他人事

## ハナダシティ。

あれから走り続け、何とかお月見山を抜けた。

「ふう、やつと出でられたね……」

「おいおい、まだ安心するとこじゃないぞ」

「え？」

「……イーブイ」

「あ、そっか！ ジャあもつちよつと急がないと！ も、シグ、手をとつて！」

はっきり言つて、もうスピードが速すぎて内臓辺りが限界なんだが……そんなこと言つてられない。今はイーブイを何とかしないとな。

「つ、ついた！ ハナダシティだハナダシティ！ 止まつて止まつて！」

「あ、はい！」

ズザザザザザザザザ、と、凄い量の砂煙が上がる。

……今度からは、少しずつスピードを落としていくよひさせないとな。

「ポケモンセンターはこっちだ、急ごう！ あー……つと、アブソル、イーブイが入っているボール渡してくれ。それで、アブソルもサイホーンもボールの中に入ってくれ！」

「分かった！」「…………いや

「よし、じゃあ入つて、えええつ！？」  
アブソルの、予想外すぎる拒否。

「な、何で！？」

「……この子のこと、心配。見てみたい」

……抱えて走っている内に、母性みたいなのが目覚めた、のか？  
イーブイが心配になるのは分かるけど。

「大丈夫だつて。お前を治してくれたのも、ポケモンセンターなん  
だからさ。お前も連戦で疲れたろ？ イーブイと一緒に休みな」  
「……うー」

どうじう反応なのかいまいち分からなかつたが、ボールの中に入つ  
てくれた。まあ納得してくれたつてことだろう、うん。

タンタンタララン  
「はい！ お預かりしたポケモンはみんな元気になりましたよ！」  
「ありがとうございましたー」

相変わらず回復が早い。

「さて、でてこいみんなー」

ボールを放つて、外に出す。

出てきたポケモンは、当たり前だが、サイホーン、アブソル、手足  
を縛られたイーブイ。

……つて。

「イーブイー」めんー、せめて繩を解いてからこすればよかつたなー！」

慌てて繩を解く。

「…………

繩を解いても、何の反応もない。……よっぽど酷こじりとされたんだろう。怯えている。

「…………

「あ、あのさ、イーブイ。もひロケット団はこない。安心していいんだぞ？」

「つー…………ー。」

俺が声をかけると、怯えて無言で後ずさった。……なんか、キツいよ今の。

「…………

そして。アブソルが、それを無言で抱きしめた。ちょっと驚いたようだが、別に拒絶するでもない。

「シグに抱きしめられた時、すくへつわしへ、わいく安心した。だから、だいじょうぶ」

「アブソル……

そうか、うれしかったんだなお前。だから、イーブイに同じことをしてあげよう、と。アブソルは本当に優しいな。なんか軽く泣きそう。

「わ、私は修行の時にシグと一緒に寝れてす」「くうれしかったよー」

サイホーン、いや、うれしいけど、張り合つ必要は無いんだぞ？

「……」「……」「……」「……」「……」「……」「……」「……」

二人は、抱き合つて無言で動かない。

俺が何かするとイーブイが怯えるから無言で動かない。

サイホーンは、何かノリで無言で動かない。

四人が無言で固まっているという状況です。周りからの奇異の目が刺されます。ポケモンセンターのど真中です。

……いつまでもこうしてゐる訳にはいかないな。イーブイに本意を聞かないと。」そのまま俺達についてくるか、それとも野生に戻るか。

「イーブイ。ちょっとといいかな？」

「……！」

今度は、目をつぶつてキュッとアブソルを強く抱きしめた。  
あ、あはは……イーブイも、すっかりアブソルに懐いちゃつたな。  
別に羨ましくなんかないぞ？ イーブイズ大好きだけど、別に羨ましくなんかないぞ？

「……イーブイ。シグは聞きたいことがあるの。」そのまま私たちと一緒に行くか、それとも、野生に戻るか

アブソル……ありがと。ホントにお前は優しいな。最近は慣れてくれて、ちょっとずつ饒舌になってきてるし。  
それを聞いたイーブイは……俺ではなくアブソルを見つめ、口を開いた。

「……アブソルお姉ちゃんと一緒なら、行つてもいい  
「お、お、お姉ちゃんっ？」

お、珍しい。アブソルが照れてる。可愛い。

「だめ？」  
「だめなんかじゃない。……むしろ呼んで」

「ふつ……おま、口には出さないけど、「むしろ呼んで」って！ なんか、セリフのあとに「キリッ」とかつきそうだよその顔！  
……なんか、イーブイのおかげでアブソルの面白いところが次々と見られて面白いな。

「……じゃ、じゃあ、私がお姉ちゃんだから、イーブイは妹?」「うん」

「～～～っ!」

イーブイをひしと抱きしめるアブソル。何を感じまっているんだろう。妹キャラが好きなの?……と言つたら、なんかアブソルが変なキャラになってしまつからやめておいた。

「……よろしくね、イーブイ」

「よろしく、お姉ちゃん」

「～～～っ!」

いちいち感極まつてたらきりないぞー、アブソル。

「あはは、よろしくねイーブイ」

「……よろしく、えっと、サイホーン」

「……私はお姉ちゃんじゃないのか…………」

一応アブソルよりお姉ちゃんだと思うんだけどなー、とか呟いてる。お前もお姉ちゃんつて呼んでほしかったんかい。でもまあ、確かに妹キャラって感じは分かる。ちなみに俺はパソコンではありませんしロコ「ン」でもあります。

「よろしくな、イーブイ」

「…………」

「あ、あはは…………はあ」

そろそろ心が折れますよイーブイさん。まあ、人間が怖いのは分かることじね。

でも、同じポケモンのみんなには怯えてなくて、助かつたよ。これ

なら少ししずつ人間に慣れさせていけばいいし……。それにしても、アブソルとイーブイは出会ってまだもないのに、本当に仲良くなつたな。しばらくは、イーブイはアブソルに任せるか。……羨ましくなんかないよ？

そう思つていたら、アブソルがこいつを見てきた。

「……ひょっとして、シグも抱きしめてもらいたいの？」

「ちげえよー、俺に構わずにイーブイをちゃんと抱きしめてやつてくれ！」

イはアブソルを御所望だよ！

はあ……どうにかして、イーブイに懐いてもらいたいもんだけど……。ま、言ってても仕方ないか。旅をしていれば、その内慣れてくれるよな。

「さて、この街にもポケモンジムがある。だから今日から、打倒ハナダジムリーダーを掲げて頑張つてこいっど……あ」

つい、アブソルの方を見る。

そうだ、アブソルはハナダジムリーダーに追われてたんだ。今は問題が解決したから問題はないと思うけど、それでも、彼女の恐怖は拭いきれてないだろう。心ないこと言つちゃったかな……。

「心配してくれて、ありがと。でも、だいじょうぶ

「あ、そ、そうか」

「あ、なんだかなあ……俺つて顔に出やすいタイプなのかな。

「 むしろ、お礼を言いたい。あなたのおかげでシグに出会えた、  
ありがとう、って」

「アブソル……」

いかん、俺は涙腺緩いんだ。なんか泣きたい。

「うわあもうアブソルーツ！」

感極まって、ギュッとアブソルを抱きしめる。なんかアブソルのこと  
言えないな俺。アブソルは微動だにしないけど、やっぱりちょっとと  
嬉しそうなのが感じ取れる。

「……うわーもうシグーッ！」

ノリでサイホーンも俺に抱きついてくる。いやつめハハハ。

……えーと、つまり。

イーブイ アブソル 僕 サイホーン

電車じっこかい！

再び奇異の田が集まるポケモンセンター。

「……えっと、とつあえず出よつかみんな

ひょいひょいひょい。

ひょいひょいひょいひょいひょい。

ひょいひょいひょいひょいひょいひょいひょいひょい。

「どうあえず抱きしめながら华东のはやめよつーなつ！」

そんな感じで、若干変人扱いされながらもポケセンから出てきた。

…… わて、いつからどうするか、だよな。

改めて方針をまとめておこう。

俺は、元の世界に戻る必要がある。そしてそのためには、16種のプレートを集める必要がある。そして、それはアルセウスの主が全て持っているという。要するに、俺はそのアルセウスを持つトローナーを倒せばいいわけだ。

そして、プレートを集めついでに、せつかくこの世界に来たのだからリーグには挑戦しておきたい。だから、ジムを回ってバッジを集めたい。

こんなもんだわつ。

常識的に考えて、秘伝マシンの「いあいぎり」をとる必要はない。道が通れないほどの木とか、普通すぐに伐採するだろ。だから、サントアンヌ号イベントは不要だ。

そうなると、ハナダジムが先か、この先のクチバジムが先か。現実的に考えてそうだらうなあとは思っていたけど、この世界では、バッジ数に合わせてジムリーダーの使うポケモンも変わってくるらしい。

クチバジムは……サイホーンもいるし、攻略は幾分楽だろう。となると、やっぱり先にハナダジムかな……。

となると、一転サイホーンは活躍できない。なんたって水タイプ技四倍だ。

でも実際のゲームとは都合が違つし、頑張つてもらおうかな。

次に、アブソル。スターミーを使つてくるとすれば、スターミーはフルアタッカー。ふいうちを使えばアブソルが圧倒的に有利だ。あ、でも、確か道具も使ってきたな。相手が人間なら、読みあいは得意だ。アブソルとの連携を大事にしないとな。

イーブイは……まだ、バトルは早いかな。でも、ある程度能力を知つておかないと。

ところが、まずはイーブイと仲良くなることから始めなきゃな……トレーナーとポケモンの息が合つてないと、到底バトルなんかできないし。

……うーん。

「よしみんな！ 出で出かけよつ！ 修行といつがいのキャンプだあーつ！」

声高らかに、宣言した。

## ハナダシティ。（後書き）

アブソルトイーブイは、波長でも合つたんでしょうか。  
とっても田舎田舎して…ゲフングエフン、とっても仲が良いですね。

ハイキング キャンプ  
どうこう間違え方だと。

## キャンプ。

水よし、タオルよし、テントよし、バーべキュー用食材よし。うん、何かいろいろ抜かしてると氣がするけど、ポケモンいるから大丈夫だろ。特にサイホーンとアブソルは山育ちだし、まあなんとかなると思つんだ。

……驚くほど見切り発車。

「さて… やつやく登山を始めようがー！」

「はーい」「…………」「…………」

朝早く起きたから、みんなテンションが低いな。  
まあ、登山するならこれくらい朝早くないと。

とつあえずハナダシティの人間に聞いて、「イワヤマ」にやつてきた。イワヤマトンネルがある山だね。この山は標高2052メートルで、危険も少ないからハイキングに来る人も結構いるらしい。ちなみに、この山の向こう側はシオンタウンらしいな。

……といつことは、別にどこのポケモンジムからでも行けるつてことかな？ まあ、当面は打倒ハナダジムで進めていこうか。

まー、とつあえずはこのキャンプ！ 親交を深めあうのが一番の目的だ！ わー、なんかワクワクしてきた！ みんなはポケモンと言つても子供だし、かるく先生気分だね！

「はーい、何か質問ある人ー！」

「シグ」

「はー」「アブソルさん」

「イーブイを抱えながら歩いてもいい？」

「ダメ」

「うううのは自分で歩かなきゃつまんないんだよ。

「……だめ？」

「上田遣いしてもダメなものはダメ」

「むー」

まったく、どこでそんなテクニック学んだんだか……。動搖を隠すのもやつとだわ。

「……て、つな」

「つさ」

いつつもテンション低いアブソルだが、一段とテンションが下がったな……。

ま、手を繋ぐくらいなら問題ないな。……いや待てよ？　むしろ親交を深めるにはちょうどいいじゃないか！

「よし、みんなで手を繋げばー 手を繋いで歩けー。」

「おお、いいね！」

そうして、俺がイーブイと、サイホーンがアブソルと手をつないだ。

うふ、やっぱりサイホーンとアブソルは仲良くなつてたので嬉しい。少しずつ会話するし、一人とも嬉しそうだ。

んで、俺とイーブイ。

最悪手を握ってくれないかと思つたけど、それは問題なかつた。素直に手を握つてくれたよ。

小指だけ。

つて、俺は嫌われる男子かああああああっ！－！

叫びたいけど、叫んだらまたイーブイが怯えちゃうしやめる。

いや、何だよコレ。何で小指だけ？ 悪意すり感じぬよ。手をつなぐのを拒否されるよりある意味傷つくよ。

……これは、慣れるのが思つた以上に大変そつだな。

「一時間ほど歩いたるうか。

「わー、見て見てみんな！ 大きい滝だよー。」

「……きれいだね」

「は、はは。そうだなー、綺麗だな」

サイホーンは元気だなあ……。って、元々山に住んでたんだから、これくらいはなんともないか。

俺は、山道なんて久々だからそろそろ足が痛いよ……。

「……つかれた」

「だいじょうぶ？」

「もうすぐ目的地に着くから、あとちょっとの我慢だぞー」

確かに俺達が目指している目的地は、キャンプ場だ。今日は、そこでみんなとキャンプする。

「あ、ほらー あそこだー」

「え、ビバビバー。」

もつすでに何個かのテントが張つてあったので、すぐに分かつた。

「お～……三角のがたくさんあるね」

「まあな。俺達もあれの中に入るんだぞー」

「へえーー！」

まさか三角テントしか売つてないとは思つてなかつたよ……。文明が遅れるのか進んでるのか分かんねえ。あ、価格は4000円くらいで済んだ。テントもピンからキリまであるんだね。

サイホーンの住む山には、あんまりキャンプに来る人とかはいなかつたのかな。さつきから興味深そうにテントを見回している。

「じゃあ早速中に入らうよー！」

「ねうそうだな……って待て待て待ていつ！」

「キャーー！ 誰あなた！？」

「うわっ、ポケモン！？ しつし、入つてくんな！」

「わわわっ、ご、ごめんなさいこいつ！」

ああ、手遅れだった……。

「……中に入つたら、怒られた」「いや、俺の説明が悪かつた」

あれの中に入る、つてのは言い方が悪かつたな、うん。

「……中に誰かいたのなら、追いだせばいい」「アブソルさーんっ！」  
「おお、そういうもんだつたんだね！」「違うっ！ それは違う！」  
アブソルが壊れた！？ 何、疲れ！？ 暑さ！？

「キヤーッ！ またあなた！？」  
「いい加減にしろコノヤロウ！」  
「わわっ、じめんなさいー」「……もう何も言つまい。こまづづき

「……つい、謝つて出てきちゃつた」「うん、それでいい。……アブソルー」「じめんなさい。信じじるとはおもつてなかつた」「サイホーンはバカなんだから、すぐ信じちゃうんだよ」「そつか。たしかに」

「そんな本人の前で堂々とー!？」

「そーて、俺達も自分のテント張るぞー」

「……おー」

「ちよつー? 流さないでよー。おーい! 悪いのアブソルでしょー!?」

「うこうこう三角テントだと、だいたい30分くらいかな。  
ここから手伝つてもひらのは若干心配だけど、ペグを打つでもう  
うぐりこはしてもらおうかな。

「みんな、テントの設置手伝つてもうつていいか?」

「……はーい」「こことよ

「イーブイも、いいか?」

「……うん」

やつぱりこいつこいつのは、一人だけ慣れてないから、つてのは駄目だ  
よな。でも、イーブイが手伝えること、か……うーん、下にレジヤ  
ーシートを敷いてもらおうかな。

「よし、できたな！」

「おー、周りにあるのと一緒に作れたね！」

「つられた」

30分くらいでなんとか作れた。まあ、ここで時間食つてちゃ何にもならないしな。

先に、中に荷物を入れておくか。バーベキューの荷物、かさばるしそう！ ここからがキャンプの始まり！ ザ・キャンプ・ワズ・スター・テッド！

「さ、みんなそろそろ疲れたろ？ 川に行こうぜ」

川の場所とかも、もう調べてある。魚獲りもキャンプの楽しみだしね。

「……つられたし、ここにいる」

「そういうなよ。川は気持ちいいぞ。疲れが吹っ飛ぶぞ」

「……うーん」

「私、行きたい」

「えっ？」 「お？」

「……イーブイ？」

イーブイはいつもアブソルの後ろにくついてしゃべるから聞きとり辛いんだけど、その声だけはよく聞こえた。イーブイが自ら意思表示するとは……初めてじゃないかな。

……人間に怯えてるだけで、本当にこの子、明るいポケモンなのかもな。

「ほりほら、イーブイも行きたいって言つてゐる。や、行くひがせ」

「う、うん」  
ずっとイーブイに付かつせりだつたからだらつたな、アブソルは驚きを隠せない。

といつても、イーブイを除いた全員を驚かせたんだ。ビのくらい彼女が無口だつたのかは分かるだろつ。

……もう口を開じているけど。しっかりと聞いたぜ、お前の言葉。

「ふわー、久しぶりの川だー！」

川に着いた途端、元気いっぽいのサイホーンが開口一番に感想を漏らした。

おー、魚もたくさんいる。じつや今夜は、うれしだな。……俺が獲れれば、の話だが。

「わふー、冷たいー！ 爽やかー！」

「……ひんやり」

「来てよかつただろ？」

「うん」

とつあえず、アブソルも満足そつで何よりだ。イーブイも楽しそう。

「いーぶーーー！」

「なに？」

「それっ!」

「ひあっ!？」

「にははは、かかつたかかつた!」

サイホーンなんかはしゃいで水かけてる。はしゃぎやすめ。

「……む

「うわわわわっ!？ な、なんでアブソルが水かけてくるの? -  
不意打ちするいよ!」

「ていい!」

「うわわっ、イーブイまで! うー、一体一は卑怯だよ! セウ  
でなくとも私水をかけられると弱いんだから!」

「……じゃあ水かけるなよ!」

思いつきつ皿業自得だなあ。むつサイホーン涙田だし。

「くつそー、だつたらひつちだつて本氣出してやるー。山出身の私  
を舐めないでよ!」

「ていいていいていいていいていいていい「それそれそれそれそれ  
れ」

「こゆわーっ!？ なんでそんなムキになるの? -」

「あつはつは、魚が逃げていいく~」

みんなテンション高いな、おい。まあこことだけどね。  
だけどまあ、魚がみるみる内になくなつちやつたし……上流に行

きますか。

「シーグー、ビー」行ー／＼のー。私を一人にしないでよーー。二対二！二対二でしようよおー！」

「上流に魚獲り行くんだよ」

「おー、それなら私も行く！」

「お前が来たら魚が逃げるだろ……。ここで遊んでな」

「ちよ、これでも私は山出身だからねー？ 魚獲りなんかお手のも

のよー！」

「へえー……そういうやうだつたな」

「そーだから……ひうつ！？ もう、話してる途中なんだから水かけないでよ！ ほらさつわと上流行ー！」

アブソルとイーブイから逃げたかっただけじゃねえの……？ つか、お前ら少しくらい攻撃の手を緩めるよ。

まあ、何にしても山育ちなら期待できるな。水苦手だけビ。

「……行つちやつたね」

「二人で水かけする？」

「…………ていつ」

「…………それつ！」

「ていていていていていてい」「それそれそれそれそれ」「あいつら…………」「てい」「それ」しか言ってないけど、あれは楽しんでるのか？ なんだろう……女の子同士の水かけ合いつっこつて、もうちょっと見てて楽しいもんじやなかつたかなあ……。

「お、ソレひへんがいいね。魚いつぱい！」

「おお、ほんとだ」

少し移動するだけで、だいぶ違つもんだな。結構上の方まで行くと思つてたが。ここからなら、まだアブソルトイーブイも見えてるし、安心だな。あいつら、まだ水かけ合つてゐるよ。よく飽きないな。

「じゃあ、もう獲つていよいよね？」

「おお、獲るぶんには全く構わないけど、具体的にどうやるんだ？」

「それはもちろん……えーと」

サイホーンがキョロキョロと何かを探し始める。なんだろう、木の枝で簡単な釣り竿でも作るつもりなのか？

「あ、こんくらいならちゅうどいいね」と、高さも幅もサイホーンの身長くらいにある竿を持ち出してくれた。  
すげえ、あんなもん持てるのか。  
……つて、サイホーン、さん？

その大きな声で何をするつもりですか？

「そおいやつさあーつ……」

バツシャーン！

「おお、すげー。瓶を落としたら、氣絶した魚がたくさん浮いてきた

……つて

「ガツチン漁おーつ！？」

「ふうー、たつくさん魚が浮いてきたねえ。大量大量

「お、おまつ……ガツチン漁て！ それ禁止されて……いや、この世界つてどうなの？ 禁止されてないのか？」

「え？ どゆこと？」

「ですよねーつ！」

よく考えたらそんなことサイホーンの知つたこいつじゃないよー 最近まで野生だったんだもん！

……まあ。

誰も見てないし、いいか、うん。

「じゃ、じゃあ四匹持つてくれか」

「え？ 全部持つていかないの？」

「ふざけんな。誰が食べるんだこんな大量の魚  
一人一匹として四匹が妥当だろつ……。バーベキューもあるし。

「むへ、燻製とか氷締めとか、いろいろ方法はあると思うけどなー」「お持ち帰りして食べるわけじゃないしな……。ほら、アブソルとイーブイも待ってるし、早く行こ……あいつらまだ水かけ合つてるよ」

水のかけ合いつこは結局俺が止めるまで続いた。

「なあ、水かけ合つて楽しかったのか?」

「うん」「うん」

なら、もう何も言わないけどね……。

「ま、そろそろ帰るか。キャンプの醍醐味といつたら何と言つても

バーべキュー! ほら見てみ、魚!」

「……おなかへった」

あはは、まあ結構歩いたしな。

「今、食べていい?」

「生で!? いやいや、これからキャンプ場に戻つて、焼いて食べ  
るんだよ!」

「ふーん」

ポケモンは凄まじいな……。生魚なんて食べたら腹壊すぞ! ひの騒  
ぎじゃなくなるって。

「私、この魚がいい」

「ん? この一番大きいのか? はは、意外に食い意地はつてんな、

アブソル」

「……はつてないもん。その魚、私に持たせて」

奪う様にして俺の手から魚を取る。

つて、

「その魚、咥えながら歩くのか……？」

「もふ

返事なのそれ？ というか、歯を使わないで生魚咥えるとか器用だな。

咥えるってのも少々心配だけど、言ひ方からして生魚も食べたことあるんだろう。咥えるくらいで病気にはならないか。

……それに、魚を咥えて歩いてるの、なんといつか、可憐にしつか。

「四回しか持つてきてないんだから、勢い余つて食べるなよー？」

「もふ

お前の体をもふつてもうつかコノヤロー。もふじや分かんねーよ。

お、あのテントの群れは、キャンプ場だな。よく見ると、すでにバーベキューをして楽しんでる連中もいる。いかん、俺まで腹が減ってきた。まだ4時くらいなんだけどな。

……どうしようかな。アソルもおなかへつたつて言つてるし、早めにバーベキューしちゃつか？

キャンプ。（後書き）

アブソルの声がいつのまにか花澤香菜さんで再生される…

シゲのこなごじる。(前書き)

アブソル視点です。

## シグのいなことじる。

私たちには今、テントの中で休憩してゐる。外からシグの鼻歌が聞こえてくる。バーベキューのじゅんびだそうだ。

「よおーしみんな！ レツツ・バーベキューウツ！」

「うおうつ、びっくりさせないでよシグ！」

相変わらず、シグは唐突にテンションがおかしくなる。バーベキュー。聞いたことは、なんかいかある。お肉を焼いたり、私が今咥えている魚を焼いたりして食べるイベントだ。野菜も食べるらしいけど、きらいだから食べたくない。

でも私もこの魚を咥えているのに飽きてきたところだし、ちょうどいい。だつてこの魚、もつピピチしてないし。垂れてるし。

「もう火の準備はバツチリだからな。思い思ひに肉やら野菜やら焼いてけー」

「もふ」

ベツ、と魚を金網に移す。

「……アブソルはずつと口に咥えてたもんな。」

「ほしいの？」

「いらねえよ！？」

「これは私のだから、いくらシグでもあげないよ

「だからいらねえって！？」

シグはからかうと面白いって、最近きづいた。だから最近はよくからかってみる。シグは怒るかなって思つたら、「よくしゃべるよつになつてくれて嬉しいよ俺は」つて褒めてくれた。でも、田をそら

していったのはなぜだ？

「つか、魚なら串に通した方がいいんじゃないかな？」串もこのバッグの中に入ってるし。……あ、お前が串扱うのはちと不安だし、俺がさしてやるよ」

「つー！」

「ん？ どうした？」

それ、私がいまさつきまで咥えてたんだけどな……。その、唾液とか、ついてると想つんだけど、わざわざいつの？ シグはほんとうに、やうこつのに鈍感。へびーきゅー。

「あ、もしかしてアブソル、意外と潔癖だった？ そつかー、年頃だもんな」

違つよ。「年頃だから」 まだいつの肝心などいふが合つてないよ。

「……違つのか？ あ、あれか？ 元々野生のポケモンだから、串は駆使できません……なんつって」

「すいませんでした」

なんだろう、田のまえで魚のいい匂いがするのに、いまのひとりで完全にわくわくしたかんじがなくなっちゃった。なんでだらう。シグはまほうつかいなのかな。

「さ、さあさあさあ！ 魚焼けてきたぜ！ あ、そうだそうだ！ 塩！ 塩が必要だつたな！ 今持つてくるよ！」

もういつかい、シグはテントのなかへ入つていった。

「……なんか、じこりなしか火が弱まつてきたね」

「ほんとだね」

「お姉ちゃん。お肉焼いていいかな」

「いいよ」

分かんないけど。

「じゃあ私はこのピーマンでも焼いてよつかなー」

「？ 野菜を先に食べるの？」

「ふつふつふー。私は意外とベジタリアンなのですよ」

自分で意外とつて言つてる。でも、サイだし意外でも何でもないようだ。

「そついえば、お肉の焼き加減つてどんなかんじだろ  
「五秒くらいでいいかな」

「……んじやないかな」「じゃあ、いただきます」

「待て待て待て！何食べようとしてんの…？ 生肉…？ 豚の生

肉はまずいよお前…！」

「あ……！」「めんなさい」

「いや、あの……謝ることないんだけどな……。豚肉はさ、ほら、ちゃんとピンク色が無くなつたら、食べていいんだよ」

「わ、わかりました。ありがとうございます」

「はは、敬語なんか使わなくていいって」

「え、えと、でも、あの、私、あなたのポケモンですか？」

ん？

イーブイとシグが、会話してる。はじめてだ。~~そこ~~ちうないけど。よかつた……ちょっとずつだけど、イーブイもなれてきてくれてる。

「……うん、これくらいだる」と言って、シグが焼き肉を、たれが入ったお皿にうつした。みてみると、たしかにお肉はきれいなきつね色になつている。あ、私の魚、そろそろかな。

「はー、畳じ上がれ

「あ、あつがとう」「やこめす」

イーブイは、うれしそうに焼き肉をつかむ。ふーっ、ふーっ、と息を吹きかけて、でもさうと熱さうにしながら、お肉を口のなかにおぼった。

「……おいしい」

「そつか、それはよかつた」

イーブイは、シグはもちろん私も見たことがないくらいに顔をほころばせていた。いつかい噛むたびに、今にも泣きそうな、それでいてとっても幸せそうな顔をした。

……今まで、きっとまともな「はんなんて食べさせてくれなかつたんだ。すぐ幸せそうな顔を見ながら、それでもシグと私は、この子の境遇を思つとすなおに喜べなかつた。

……魚、すこししげちゃつたな。パリパリとした、しげたところの苦い味が、今日は特に苦くかんじる。

「アブソル、ずっとお前が咥えてた魚はどうだ?」

「……ん。おいしいよ」

「そつかそつか」

「ひーはんほほいひーよー」

うわっ、サイホーン、こつのかべーべー食べてたんだ。しかも、まるごとおぼつてある。……べつと、『ペーマンもおこじーかー』  
かな?

「それはよかつたな。でもお前、普通ペーマンをまるいりと口に呑む  
ばるか？」

「ふつふつふー、はんぱくはまひまこさはまく。ほりひょくま  
うふふほひく、せくふまこはまくはくひまえはま」

「うそ、とりあえずペーマン食べたりから話そつな  
「はははー」

もわもわと、サイホーンペーマンを食べはじめた。

「あ、あの……」

「ん？ どうした、イーブイ？」

「あの、も、もう一枚、お肉、食べていですか？」

「……へ？」

「いや、あの、とっても、おいしかったので」

「あ……ああ、ああ！ ジヤんじヤん焼いていこー。まだまだ肉  
はたくさんあるからな！」

「ありがと、『やじます……』

イーブイは、また顔をほほえませた。あの焼き肉の味を、おもいだ  
したんだとおもつ。

イーブイは怯えているだけで、もとから無口なわけじゃない  
それは、イーブイがいちばん心を許してくれる、私がいちばん知つ  
ている。

だから、シグと会ったときの態度のかわりよつが、ぎやくに不安だ  
った。イーブイが、ずっとにんげんに怯えたまま、シグにも心をひ

らけないままなんじやないかつて。

私は、イーブイが大好き。だけど、シグも大好き。ついでに、サイホーンも大好きだから。

「……どうした、サイホーン？」

「いや、なんか……誰かにおまけ扱いされた気がして」

「へ？」

だから、私はイーブイがすこしじつ慣れてうれしい。  
きっとこの子は、ロケット団に捕まるまえ、とっても明るい、だれ  
にでも心をひらく子だつたんだと思う。あくまで、勘だけど。  
だから、いつかこの子が、そんな心にもどつてくれたら、私はそれ  
がいちばんうれしい。

私は、この子のお姉ちゃんといつより……むしろ、お母さんかな。  
そう思いながら、おいしいお魚をまたかじった。  
イーブイの、幸せそうな顔を見ながら。

お肉も野菜も、ぜんぶなくなつて、バーベキューはお開きになつた。とつてもおいしかつた。私も、あんなにたくさん食べたのは久しぶりかも。……シグが、野菜も食べなきやダメつて言つたから、ちょっとだけ食べた。もう野菜は食べたくない。

今は、テントの下でみんな寝てる。

シグは、「早めに寝る」つて言つてたけど……。

「シグ」

「…………すー」

シグがいちばん早く寝たみたい。

「…………イーブイー」

「なに? お姉ちゃん」

イーブイは起きてるみたい。

「サイホーンー?」

「…………もー、たべれない……」

幸せそうに寝てる。よしよし、やつとふたつきつ。

「ねえ、イーブイ。今日は楽しかつた?」  
「…………うん。とっても」

「……ねえ、イーブイ。シグの」と、ビリビリ細々てる。

「……えーと

やつぱり、イーブイは迷つてゐる。シグが、すこく優しくて、私たちのことを想つてくれるのにんげんだってことば、イーブイもわかつてゐる。

……ぬしさまからきいたことだけど、一度にんげんのおそろしさを知つてしまつたポケモンは、もうよほどのことがないかぎりはにんげんに心を許すことがない、らしい。だから、迷うのもむづはない。

「優しい人だと思う。だけど……やつぱり、人間が怖くて」

「シグは、いいひと?」

「……? うん、とってもいい人だと思ひ」

「じゃあ、迷うことないよ。シグは、いいひとで、わるいひとじやないんだから」

「……そういう問題かなあ?」

「そういうもんだいだよ。私たちのトレーナーは、他のだれでもない、シグだもん。」んげんが怖いとか怖くないなんて、かんけいない。シグは優しくて、いいひとだから

「まあ、そうだけど……つーん」

やつぱり、ぬしさまが言つてたことよほんとうみたいだ。どう思つても、体がきょせつしてしまつんだ。トカウマ、つていつたかな。でも、私が言つべきことはみんな言つた。あとは、イーブイしだいだ。

「じゃあ、おやすみイーブイ

「……うん。おやすみ、お姉ちゃん」

そう、私は、イーブイのトラウマを治すことなんてできない。あくまで、治せるのはイーブイ。私は、この子を信じて、見守ることじ

かできない。

でも、なんだか。……シグトイーブイが仲よくなれる田中、やつとおぐじやない気が

「皆の者ー、朝だーー。起きるーー。」

「ふおおっ、もう朝か！」

パンパン、ヒ、軽く手を叩く音が聞こえる。……シグだ。いちばん早く寝て、いちばん早く起きたみたい。あいかわらず早起きでもシグは元気だ。

「いやー、清々しいね！ 久しぶりに、朝の山の空氣を吸つたよー。」

「サイホーンも元気だ。

でも、私は元気じゃない。

「……ねむい」

「はは、なら川で顔洗つてこい。場所は覚えてるか？」

「……わかんない」

「まあ、そんな眠氣眼で川まで行つて溺れられたら困るしな……俺

もついてくよ」

「……ありがと」

「おお、私も行くよー。朝の冷たい川の水って、気持ちいいよねー。」

「……あ、私も行きます」

「イーブイも行くのか？ じゃあ四人でまた川へ行くとするか

「そうですね」

朝によわいのは、私だけがあ……。

「 そうと決まつたら早く行きまじょー、マスター」

「おう、そうだな……あれ？」

「ん？」 「え？」

「ほ、ほら、ねぼけてないで、川に行きましょう？　早くしないと、一人で行っちゃいますよ！」

そう言って、イーブイは、恥ずかしさを隠すようにトントの外に出てしまつた。

「……？」

のこる三人は、交互に顔をみあわせて、

そして、三人で笑いあつた。

シグのいなことじる。（後書き）

三田田でイーブイも慣れてくれました。  
次はハナダジムですね。

「ん~つ……どうとうハナダシティに戻ってきたか  
特に何事もなく俺達はキャンプから戻ってきた。

でも、このキャンプで得られたものは大きいな。

何があつたのかは知らないけど、イーブイが自然に俺と接してくれ  
るようになった。夜、何かやつたのかな？ まったく、保護者は俺  
だつてのに、情けなくも一番先に寝てしまつたらしい。

いやでも、そのおかげで、イーブイの特性や技、いろいろわかつた。  
……思わぬ収穫もあつたし。

それと、やつぱりゲームみたいにわんさか野生のポケモンがいると  
いうわけではないらしい。キャンプを通して、見かけたポケモンは  
數十匹といったところ。戦つたのはその中でも十数匹。……ニビシ  
ティのくさむらと変わんないってのは、あんまり納得がいかない。

「マスター、このままポケモンジムまで行くんですか？」

「ん、いやとりあえずは回復しないと。お前らも疲れたり？」

「ふむ……そうですね」

「つでか、その口ぶりだと、お前も戦つ気満々なわけか」

「えっ？ 何か戦わない道理が？」

ははは……。お前さん、もう別人みたいだな。こんなに闘争心強い  
やつだったかなあ。あれか、適応力があるから、こんなすぐに切り  
替えられるのか？

「サイホーンはどうする？」

「へ？ なんで？」

「こここのジムは水タイプ使い。サイホーンとは超絶相性の悪い奴ば

かりだ」

「ふつふーん、そんなの避けられは問題ないよー。心配ない心配ない！」

言つてることはまあ正しいが、こいつが避けるなんて大層なことで  
きるのか甚だ疑問だ。

「さて、アブソル。お前が今回の戦いの要となりそうだ。頑張つて  
くれ」

「わかつた」

「よくきたわね」

しばらくして、ここはポケモンジムのカスミ前。いや、まさかアブ  
ソルの不意打ちだけでカスミまでたどり着くとは思わなかつたよ。

「わかつてると思つけど、私は他のみんなみたいに簡単には倒せないわよ　でてきて、ヒトデマン！」

「わざわざかな！　でてこいサイホーン！」

出てきたのは、赤くてくじつとした目が印象的な女の子。まちがいなくヒトデマンだ。

「あら、アブソルじゃないの？」  
「すぐに試合を終わらせちゃ、つまんないでしょ？」  
「……言つわね」  
「あーっ、シグ！　その言い方、まるで私がかませ役みたいじゃん！」  
「あ、はは、悪い悪い！」

もちろんサイホーンを信頼してないわけではないが、おそらくデスター……スター＝ミーは倒せない。だが、ヒトデマンなら、あるいは。

軽口を言つてはいるが、実際のところアブソルに負担をかけたくないだけだ。アブソルは、高い攻撃力を持つ反面、デリケートという特徴もある。俗に言う紙耐久だ。不意打ちを読まれ、ヒトデマンにもやられかねない。そうなると、スター＝ミーを倒しづらくなる。ハイリスク・ハイリターン。これがアブソルの特徴だ。

スター＝ミーの特徴は、素早さと特攻。サイホーンにとつては、何よりの天敵だ。そして、イーブイでもスター＝ミー攻略は難しい。……それは、あとで説明する。

だから、扱いの難しいアブソルが戦いの要を握つている、ってこと。

しかし、だ。

忘れてるかもしれないが、俺は元の世界でもポケモン大好き人間だった。当然、知識も戦略も、この世界の住人の誰よりもある。もちろん、トレーナー同士の読みあいなんてお手の物。タケシのときは油断したけど……そもそも、この知識と戦略を思う存分使わせてもらいますか。

「サイホーン、ロックカットしたあとに突進だ！」

「わかった！ この技、難しいんだよね……」

そうは言うが、サイホーンはけつこう技をものにしてる。成功率はかなり高い。

「ロックカット……？ 意図はわからないけど、ヒトデマン、避けて

「反応が遅いね！ サイホーン、そのままストーンエッジ！」

「はーいっ！」

「げふうつー？」

「ひ、ヒトデマンー？」

悲鳴はすれど、姿は見えず。それも当然、場外まで吹っ飛ばす威力だからな。

ロックカットからの、突進からの、ストーンエッジ。もちろん、その威力は突進とは比較にならない。

「ふつ、所詮私は、かませ役つ……！」

「おいおい……」

なんともいたたまれないセリフを残して、ヒトデマン戦闘不能。

「くつ、だつたらでできなきこ、ギャラドスー！」

「え、ギャラドス？」

そしてでてきたのは、人魚みたいに下半身が魚みたいで、気が強そ  
うな女の子。……あの長さは、人魚といつよりラミアって気がする  
けど。

いやそんなことより、俺の記憶では、初代のカスミはヒトデマンと  
スター・ミーしか出してこなかつたような……？ でも、ロミックス  
のカスミはギャラドスを使つし、確かにギャラドスがいるイメージ  
はあるな。

……やることは同じだな。サイホーンはロックカット状態の時、直  
線でどこにだつて跳べる。弾丸みたいにな。相手が飛行タイプだろ  
うと、関係無い。

「サイホーン、もう一度今の攻撃！ ただし突進に集中するな、ス  
トーンエッジに集中しろ！ 攻撃は一つ一つが強力なんだから、な  
るべく拡散して使え！」

「う、うんっ！」

突進するサイホーン。ストーンエッジは、ギャラドスに効果抜群だ。

「これはサイホーン2タテできるか？」

「まあ、そういうまくいくとは思えないけど。

「ふわっ、と、ギャラドスが空を舞つた。

「ふん、モンスター・ボールから試合を見てたよ。一度も同じ攻撃が聞くと思わないでよね！」

ギャラドスが空中で誇りしげに胸を張る。やっぱり、一度は逃げられないか……。さて、一度避けられたと、一転サイホーンは圧倒的不利な状況に陥つたな……。

「サイホーン、一旦退いて」  
「くつそ、もいつかい！」  
「おい」「ハー！」

つて、聞こひやいねえ！　おい、突進するなつて！　一旦退けつて！

「　甘い」  
「えつ？」

また、ふわりとギャラドスが舞つ。当然、熱くなつてのサイホーンの突進なんて当たるはずがない。

「ギャラドス、ヒトデマンの分までやつひやつて！」

「言わねなくても…」

ギャラドスがいきなりサイホーンに近づき、その尾を思いつきり振りあげる。近くで見るギャラドスの尾は、筋肉で引き締まっている。……要は、かなり危険な武器になり得るということだ。

「……………」

「はひい！？」

バッシャーン！！

水みたいなものがぶつかる轟音が響く。同時に、サイホーンの悲鳴も響く。

199

「…………アクアテールか」

「そのとおり。ギャラドスの攻撃から生まれる威力はすごいわよー。」

「ふつ…………」

当然、サイホーンは戦闘不能。そのまま前に倒れた。

「戻れ、サイホーン。次からはもうひとつ落ちついてな」

「さあ、次のポケモンはアブソルかしら？」

「まあそう急ぎなさんな。次は……イーブイ、君に決めた！」

「頑張ります…………！」

やつぱりイーブイは緊張気味だ。サイホーンのように熱くなりすぎることは無いだろうが……心配だな。まあ、イーブイとは事前に打ち合わせもあるし、大丈夫だろう。俺は信じる。

「ギャラドス、もう一度アクアテールをお見舞いしてやりなさい…」

「つょうかい…」

「……………つ」

ギャラドスがイーブイの眼前に迫る。……が、イーブイは動かない。「ちよつ……避けようともしないのか？ カウンターをしてくる様子もないし……」

「……来てください。受け止めてあげます」

「ふん、生意氣言つじゃん！ 受け止めるもんなら受け止めてみなつー！」

イーブイは、全く動かない。ただ、ギャラドスの攻撃を待つ。

「……まあ当然、指示通りだ。」

イーブイのセオリーな戦いかた……ある程度ポケモンに詳しい人なら、誰でも知っている型。

この世界で実践するのは初めてだが……いや、できる。できるはず！

バッシュян、と、ギャラドスのアクアテールが振り下ろされた。

「……なつ、耐えた、だつて！？」  
「受け止めると言つたじやないですか……」

よつし、耐えた！

「ナイス、イーブイ！」

「な、何で……あつ、こらえるか！」

「そのとーつ」

わてさて……もつ、何をするか分かつたよね。

「くつ……だけど、じらえてからすぐの攻撃は無理でしょ？ イーブイはギャラドスより遅いし、ギャラドスを倒せるだけの攻撃力もない！ イーブイなんかじや、つけのギャラドスは倒せないわよ！」

甘い。

甘いなあ、ジムリーダー。

まさか、イーブイの真骨頂がその程度だと想つてるのか？

「くつ、しぶといな、もつ一回アクアテール……何食つてんだアンタ？」

「んむ、んむ……つわつ、甘苦つ、それに酸っぱいし、硬いし……美味しくないなあ」

「……？」

「地味に大きいなあ、これ……ん、なんとか食べられた」

「……ハツ、ちょ、何食べてんのやー。よく分かんないけど、もういつかいアクアテールくらえ！」

バツシャーン、とまた凄まじい音がする。

今度は凄まじい音だけだ。

「あれれ？ ギヤラドスさん、動きが鈍いですよ？」

「な、なあつ！？」

いつの間にか、イーブイはギヤラドスの後ろに立っていた。素早く

なったからって、粋なことするなあ、あいつ。

『そういえばイーブイ。そのポーチの中には、何が入ってるんだ？』  
『え、これですか？……えーっと、確か、カムラの実、つていいましたかね』

『力、カムラの実！？ そんな貴重なものどこで？』

『わかりません……あの、出雲とかいう人が持たせたものですから

……』

ハナダに戻る途中で、イーブイがカムラの実持っていることに気付いたんだ。

そう、察しのとおり、イーブイが食べたのはカムラの実。  
ゲームでは、HPが4分の1以下になった時に発動する、素早さを一段階上げる道具。この世界で調べてみたところ、ある程度傷ついた時に食べると、一時的に素早くなれる食べ物、らしい。

仮にもあの出雲の力を借りるというのは、癪だ。  
だが、使えるものは使つとかないとね。

「くつそ、もういっかい！」

バシャーン、と音がする。今のアクアテールは、狙いも定まってな

いし、威力も落ちている。

「ぐくそつ……！」

「ギャラドス、落ちついて攻撃するのよー。」

「まったく、こうえていたとはいえ、痛かったことには変わりない  
んですよ、ギャラドスさん」

「……？」

「私、ちょっと怒りました。  
マスター、いいですよね？」

もちろんだ。

「イーブイ、『じたばた』」

「あはっ」

「も、もう……ダメ」

「あれ、もう戦闘不能ですか？」

「……」

「……」

ギャラドス、涙田で戦闘不能。

正直、圧巻……というか、絶対的、というか。

とにかくその威力は、カスミはもちろん、俺も絶句するほどだった。

つかアレは、『じたばた』じゃねえよ、『フルボッ』っていうんだよ！

そ、さて、ここでイーブイの型について説明しておこう。イーブイは、いわゆる『じらじた型』という戦い方をした。

『じらじた』は、瀕死になる攻撃を受けても体力を1だけ残して耐える技。そして、『じたばた』は体力が低ければ低いほど威力が高

くなる技。そして、イーブイの特性は『適応力』は、タイプ一致の技が2倍になる。数値にしてみれば、最高威力400。

さらに、カムラの実は素早さを上げる。イーブイは、実は努力値ぶりはしないんだ。どれに進化するか分からんし、放置してた。だけど、ギャラドスも同じく努力値なんて振つてないだろうから、種族値で考えてみる。そうすると、ギャラドスの素早さ種族値は81、カムラの実を含めたイーブイの素早さ種族値はおよそ82。ギリギリ超える計算だつたんだが……どうも、圧倒的な差がついてしまった。

「まつ……まだ、まだよ……スター＝ミーがまだいるわ！ でてきてスター＝ミー！」

「攻撃は強いようだけど、私の素早さなら先に攻撃できるもんね！」「マスター、疲れたからお姉ちゃんと交代してください」

「あいよー」

「覚悟しなさい、ギャラドスの仇をつて、あれえええつー？」

「……勝手に殺さないでよ」

勝手に驚いてる女の子は、ヒトデマンの双子みたいにそつくりな顔をしていた。あ、でも服は紫色だ。

さて、スター＝ミーとギャラドスがコントしている間にアブソルに交代。

「後一体、油断しないで頑張れよー」

「わかつた」

「く、くつ……いいもん！ アブソルちゃんつちやと倒して、イーブイも倒すもんね！」

「イーブイにはゆびいつけん触れさせない」

……アブソルは、若干お怒りのようだ。だが、熱くなつてはこの試合、絶対に勝てない。

「アブソルー、まずは……」

「わかつてゐる」

「ふ、ふん、アブソルなんてどうせ不意打ちしかできないんでしょ？　スター＝ミー、まずはスペシャルアップで威力をあげるわよ！」

「わかつた！…………ん？」

「…………ふつ…………くく」

アブソルが、ひたすら笑いをこらえるように、だけど確かに笑つてゐるつて分かるようにこらえている。

「な、なによあんた！　なにがそんなおかしいの！？」

「……道具を使うの？　それに、威力を上げる道具？　私のような耐久力の無いポケモンも道具なしじゃ倒せないってことでしょ？　どうなの？　それってどうなの？　そんなに自信ない？　道具なしじゃ私を倒せないの？　真つ直ぐ戦えないの？　野生同士の戦いだったら、私には絶対勝てないってことでしょ？　所詮トレーナーの力を借りてでしか力を発揮できなってことでしょ？　あ、でも道具を使つても私に勝てなかつたら余計に恥ずかしいね。すごく恥ずかしくなるより、正々堂々戦つてみたら？　まあどうやつても私は勝てないだろうけど。ま、悪いけど早くポケモンセンターに行つてイーブイを治してあげたいから、さつと勝つちやうね」

「あああああつー！ ウザつー ウザつー ウザつー！ なんかわかんないけど、なんだこの感情！？ すつじこいつを殴りたい！ ああもう絶対こいつ倒す倒す殴る殴るぶつとばすー！」

「あ、ちょっとスター＝ミーー！」んなやつの挑発に乗っちゃダメー！  
「わあ……すげえ挑発だな……」

正直、俺もうやかつた。

挑発の間、口調も変わつてなかつたか？

さて、アブソル得意技（？）の一つ、挑発。相手を補助技を使わせなくなる技。……しかしこの技、この世界ではなんと、道具を使うことすら許さない技になつてるんだ。

……つまり。

「つねおぐりえハイドロポンつ

「つてー」

「ふえつ

不意打ちが、必ず当たるってことだね。

「負けたわ……はい、ブルーバッジ」

こうして、ジムリーダーカスミとの戦いは勝利に終わった。

「……大丈夫ですか。なんか顔色悪いですけど」

「そりゃそうよ。まったく、ポケモン一匹一匹は映えないポケモン達だけど、その全員が確固とした個性を持つてて、見事な戦略もある……。サイホーンはともかく、他の二匹のトリックキーな戦術は見たこと無かった。こんなこと初めてだわ」

「まあ、力押しだけがポケモンじゃないですね」

「あ、それと！」

「な、なんですか？」

「あのアブソル、『危険なポケモン』のアブソルでしょ？」

「…………ええ」

そういえば、この人はアブソルを追つてたんだよな……。まさか、まだ処分する気でいるんじゃ

「助かったわ！ 私としても、野生のポケモンをむやみに処分するなんてこと避けたかったの。でも、リーグの命令には逆らえなかつたからさ……。アンタが捕まえてくれて、ホントによかった！」

「え、あ、ああ……いえいえ」

……よかつた。まあ、この人がそんな人じゃないとは思つてたよ。

「アブソル、あの時はゴメンね」

「…………うう。そのおかげでシグに会えたから、もういいよ」

「そう、ならよかつた。あなた、シグつていうのね。……覚えておくわ」

「は、はあ……」

「なんかね、また会える気がするのよー 大物になりそうな気がするー」

「そこですか……」

「そのときには、本気で戦いましょう、シグ！」  
よくわかんないけど、ジムリーダーが大物になりそつとまでいうの  
だ。信じてみよう。

「さーて、アブソル。ポケモンセンターに戻るか！」

「うん」

一枚目のジムバッジ　俺も、それなりに強いトレーナーとしてみ  
なされるってことだ。  
これからは、もっと氣を引き締めないとな。

## カスミ (後書き)

今回はちょっと戦略的になつてみました。  
といっても、基本的な戦法ですが…。

## お風呂スポット。

何事も、相性がある。

例えば、悪タイプはエスパーに強いし、エスパーは格闘タイプに強い、格闘タイプは悪タイプに強い。

それはジャンケンのようなものかもしれない。だが、それは似て非なるものだ。

悪タイプだつて格闘タイプに対応できる。エスパー技であるサイコキネシスだつて覚えられる。

それに、耐久を鍛えれば格闘タイプの一撃に耐えられるし、先にさいみんじゅつ等で眠らせてしまえばこっちのものだ。

だから、ポケモンは奥深い。ただの力押しではないのだ。

「くつ……!!」の負けテース

「「えつー？ もづー？」」

ただ、もちろん相性も非常に重要なのだ。

「……まさか、オレンジバッジがこんなに簡単に手に入るとはな」「自分に自信が無いわけじゃないけど、まさかここまで簡単に倒せるとは……」

「おつかれさま」「おつかれさまです」

「困ったことに、私全然疲れてないんだよねー……」

港町、クチバシティ。

クチバはオレンジ、夕焼けの色……というフレーズがあるが、確かに

にこのポケモンジム前から見える夕焼けは、海も相まって綺麗だ。……だが、そのポケモンジムでのバトルがあまりにアツサリだったの……あんまり爽やかな気分じゃない。

クチバのジムリーダー、マチスは、電気タイプの使い手。地面タイプを持つサイホーンにとって、最も相性のいい敵だ。

だが、相手はジムリーダー。サイホーンがいても一筋縄ではいかないだろう……と思っていた時期が私にもありました。

「まさか、サイホーンだけで完封できてしまつとは……」

「拍子抜けだよ、モー」

「私も戦いたかったです……」

「いやいや、あんな戦い方、一度もできるもんじゃないからな？」  
イーブイはすっかり好戦的になつたな……。ポケモントレーナーとして喜ぶところなのか？

さて、次は……タマムシジム、か。草タイプのジムリーダーだ。一転してサイホーンは不利だ。まあ、岩・地面タイプは相手によって有利不利がはつきり分かれる癖のあるポケモンが多いからな。そこはしようがない。

それと、ゲームだとカビゴンに塞がれている道。あそこは、「塞がれている道」じゃなくて、「カビゴンのお昼寝スポット」という觀光スポットになつてているらしい。カビゴンの寝ている姿を見たいのために、クチバシティに来る人もいるんだとか。

……正規ルートは、イワヤマトンネルだよな。あの、暗くて面倒な

洞窟だ。

よし。

「みんな！ カビゴンのお昼寝スポットに行へー！」

「くー……すぴー……」

程なくして、カビゴンのお昼寝スポットについた。そこには、ちよ  
つとほつちやりした女の子が気持ちよさそうに眠ってる。まあ、力  
ビゴンだらう。みんなも（特にサイホーン）目を輝かせている。

「わあ……可愛いねえ」

「おひるねしてる」

「ぐー……むにゃ……」

うん、確かに結構可愛い。……でも、観光スポットにもなってるん  
だから、ゲットできないよな。

「可愛いなあ……」

そんな中、うつとつした目でカビゴンを見つめる女性がいた。

紅い目、蒼髪、しなやかな肢体。それに、体のあちこちに入つた黒いライン。

……きつとポケモンだ。

「可愛いなあ、あのカビゴン……。あー、抱きしめたい！　ぎゅっと抱きしめて、この猛毒の爪で刺してあげたいっ！」

……大変だ、ポケモンな上に変人だこの人。変人ってか、危険思想だ。どうしよう。他の観光人に奇異の目で見られてるのに、まったく気にしてない。

「あ、あのー……」

「ん？　なになに？　あなたもあのカビゴンが可愛いって見に来たの？」

「いやそりなんですかね？　あの、猛毒の爪で刺すとか言つと、追いかれますよ？」

「え？　ああ、あははー。やだなー比喩表現だよう！　私の中指にはね、猛毒の爪が仕込んであって、人間なんかだとかすり傷で致死量の毒が」

「いいからー！　説明はいいから！」

「「「……」「」」

な、なんなんだこの人……。

この人が猛毒とかなんとかいうから、三人共怯えてるし。

まで、落ちつけ。青くて、黒いラインが入って、猛毒の爪をもつポケモン……。

あ。

「……あんた、ドクロッグか」

「おお、よく分かったね！ そのとおり、私はドクロッグ！ いやー、この地方だと中々知ってる人とめぐり合えなくてさー！」  
まあ、シンオウ地方のポケモンだしな……。

「なんでドクロッグがこんなところにいるんだ？」

「あ、まあそう思うよね。いやー、私もよくわかんないんだよね。何かの飛行ポケモンに連れ去られたかと思つたら、アヤシゲな人たちに囮まれててさー。もう訳わからぬうちに逃げてきたんだよ」

「……怪しげな人たち？」

この人もロケット団に酷い目にあつたのか？ それにしては、やけに軽いような。

「何か酷いこととかされなかつたのか？」

「されかけたけど、逃げてきたよ？ 私は昔から危険を察知するのが得意だからね！」

危険予知、か。ゲームだと、相手のポケモンが効果抜群の技を持っていると発動する特性なんだが、この世界だとさまざま使い道がありそうだ。

「……でもさー、シンオウ地方まで戻る方法が分かんないし、私を知ってる人もいないし、困つてたところなんだよ」

「カビゴンをうつとり見入つてた人とは思えない言葉だな」

「いやー、まあついでだから観光しようかなー、なんて  
すいぶんと余裕だな、おい。」

「ヤレ」でだつー。」

「うおお、な、なんだ？」

ドクロッグが、急にズイッと顔を寄せてきた。

「私と一緒に、この地方を見て回らない？　一人で観光するのは寂しいからさ」

「……は、はあ」

「見たところ、キミも観光中って感じだし……うんうん、これも何かの縁だね！　これからよろしく！」

……せいおい。

「つえつーー？　この人と一緒に旅するの？」

「まあ、やうごうことになるねー。きみ、サイホーンでしょ？　少しの間よろしくねー！」

「…………シグ、う」

いや俺に助けを求められても。

「きみはー、アブソルかな？　それにイーブイも、よろしくねー。」

「…………」「…………」

「ちょつ、ガン無視ーー？　傷つくなよやつこいつのおー。」

テンション高いなこいつはー！

……ていうか、

「なんでドクロッギはそんなにポケモンの名前を知ってるんだ？」  
「ふふん、よくぞ聞いてくれたつ！ 私は、可愛いものが大好きなの！ ほら、ポケモンも可愛いでしょ？ 可愛いポケモンはあらかた網羅してるんだよ！」

……このテンションに慣れるには時間がかかりそうだ。  
といつか、あんたもポケモンだろうが。

「じゃ、決定だね！ よーしれつついぢー！」  
「待て待て待て！ 勝手に決めるな！」  
「えつ！？」

もうすでにアシ承を得た気になつてたのか、すぐ驚かれた。驚いたいのはこっちだよ。

「ええー……仲間に入れてくれないの？」  
「いや、そういうわけじゃないけどさ。一応みんなの意見も聞こいつぜ。んで、みんなはどうなんだ？」

「毒はヤだ」「ぞくこわい」「なんか怖いです」

「うーん……毒が怖いかあ。まあそういうポケモンは珍しくないよね。でも大丈夫！ 毒ポケモンっていうのは、ちゃんと毒の制御ができるもんの！ 出す出さないはもちろん、毒の殺傷力だって一滴で人間を殺せるようなものからお腹が痛くなる程度のものまで変えられるんだから！ 大丈夫だよ、怖くないよーう！」

「いや毒とかじゃなくて、なんか怖いです」

「そこ強調しなくていいんじゃないイーブイちゃん！？」

お前赦ねえな。いつからお前はそんな性格になっちゃったんだ。あれか、ギャラドスをフルボッコにした時か。俺が覚醒させちゃったのか！」

「ま、まあまあ。毒も安全だつて言つて、いいんじゃないかな？」

「……シグ。私たちが反対しても、どうせ連れてく気でしょ

「うつ」

「シグは、そういうせいがく

「うぐつ……」

確かに、まあ、その通りだ。トレーナーとして、みんなの意見くらいきかなきやとは思つたが、どっちみち協力する気でいた。アルセウスのトレーナーを探すにあたつてシンオウだつて行くと思つしな。何より、困つてるポケモンを見捨てるなんて俺のポケモントレーナーとしての魂が許さない。

「シグ　きみはシグつていうんだね。ありがと、シグはいい人だね！」

「いや、別に礼なんていいよ。困つてるポケモンを助けるのはトレーナーの義務だからな」

「ふーん？　……ふーん？」

「な、何だ？」

「……ふふ、近くで見るとシグも可愛いねえ」

一瞬ドキッとしてしまった自分が情けねえ。  
そうだよな、このリトルポケモントリオみたいに、みんながみんな  
子供なわけじゃない。俺は大人の女性が好みだから、今まで女の子  
と一緒に寝るなんて素敵なシチュエーションでも全くドキドキしな  
かつたわけだ。だが……ぶつちやけ、このドクロッギみたいなのは  
タイプなんだ（一番はウインディだがな！）。いかん、意識するな。  
意識したら顔が赤くなる！

「あはは、照れちゃつてもー可愛いんだからシグはー！」  
「て、照れてねえよ別に！」

何？ この親戚のお姉さんと久しぶりに会ったみたいな感じ？ す  
ごじゅうじゅう。  
ついにかんいかん！ レーナーは俺なのに、完全にドクロッギの  
ペースだ！ ああもう頭を撫でるな！

「……シグう！ 何照れてんのさー。」  
「だから照れてないって！」

「あらり、サイホーンはシグのことが好きなんだねー」

「なつ、ななななななつ！ や、そりや好きだけど、なんと  
いうか、その、好きだけど、そういうんじゃなくて…」  
「あつはは、いいねえ若いってー」  
「お前は何歳のつもりだー？」

「お姉ちゃんは入らないの？」  
「……くちはわざわいのもとだよ、イーブイ」  
「それもそうだね」

……うじへ。

これまた、一際濃いポケモンが仲間になつた。

お晩寝スポット。（後書き）

ドクロッグは絶対擬人化したら可憐だと思います。  
でも猛毒は勘弁してください。

## シオンタウン。前編（前書き）

お待たせしました。遅めの更新です。

## シオンタウン。前編

シオンタウン。

フジ老人が個人資産で建てたと言われているポケモンタワーは、この世界でも高くそびえている。

俺にとっては懐かしの町だ。

……トラウマ的な意味で。

ほら、シオンタウン通る時だけミュートにしてた奴は俺だけじゃないだろうきっと。ゲームボーイでしか伝わらないよな、あの恐怖は……。ファイアレッドだからリーフグリーンだか知らんが、その程度じやあの怖さは云わらんって何歳だよ俺は。

「へえ～、ここがシオンタウンかー」

ドクロッグが辺りを見回す。

「ドクロッグは、クチバの方から来たのか？」

「うん。最初の方は訳も分からずに走ってきたから、気づいたらクチバに居たって感じかなあ」

うーん、ロケット団のアジトまではわからないか……まあ、わかつたところで、今の俺にあいつ 出雲は、倒せないだろうけど。

「……といひでお前。いつまでそんな遠くにいるつもりだよ、  
ドクロッグが仲間に入つてから、ずっとこの調子だ。ドクロッグから半径5m以上近づこうとしない。

「だつてじゃないだろ。」これからじまじま旅する仲間なんだから、仲良くしやつて」

「まひ、怖くないよつじょー」

ドクロッギが両手を上げると、やれり、とサイホーンたちが隠れる。

「つー、なんだる……」

「……お前両手を上げて怖くなこいつて言つてるけどさ、そもそもいつもお前の指から出る毒を怖がつてるんだからな。」

「ハジ、ナシカー！」

田からひひじとこつたように驚くドクロッギ。

「じゃあ頭に両手を回せば問題ないよねー。」

やれり。やつぱり隠れる。

「ふええー、何でえー？」

「俺に泣きつかれてもな……」

「うん……そうだよね、掛けちゃいけないー。この日の日があの子たちが振り向いてくれるまでガンバるよ私ー。」

「お前は恋でもじんのか」

結局すぐに慣れてくれるというわけにはいかず、離れる半径が6mになつただけだつた。

落ち込んだドクロッギと並んで歩く。

「はあ……それにしても静かな町だね。人つ子ひとりいないよ  
「やつだな。まあ、シオンタウンは元々人も少ないし……」

あれ？ でも待てよ。

この地方最大のポケモンの墓があるんだ、静かなのは普通としても、もう少し人がいてもおかしくはない。ましてや今は、最も人が動く昼夜がりだ。

いくらなんでも、人の姿が一切ないのは、おかしくないか？

「……感じる」

「アブソル？」

アブソルが、何かを感じ取つたようだつた。わざわいポケモンの本能か？

「……自然ではなく、人為的にひきおこされた、異変、不調和」  
そう言うとアブソルは、ポケモンタワーを指差した。

「ちょうど、あそこに念があつまつてゐる」

「……念？」

よくわからんが、ポケモンタワーで何かが起こつてゐるらしい。

「……だとしたら、放つておけないな。みんな、行こう」  
「うえつ……あんな、見るからに『ゴーストタイプ』がうようよいそ  
な場所？」

あ、そういうえばドクロッギは格闘タイプだから『ゴーストタイプ』は苦  
手か。これも危険予知のなせる業か。ほんと万能だな。

……つて！

よく考えたら、うちのパーティみんなドクロッギに弱いじゃないか  
！ イーブイもアブソルもサイホーンもみんな格闘技に弱い！ だ  
からあの三人はドクロッギに距離を置いているのか？

……まあ、それはおいとこう。今はポケモンタワーに行つてみないと。ポケモンタワーはここからでも見えるから、行つたことはなくとも迷いはしないだろ？  
それにして、寒いな。なんだろう、危険予知じやないけど、かすかに嫌な感じがする。

歩いても、歩いても、人の姿は見えない。でも、気配はする。みんな家に隠れているんだ。ポケモンタワーにいる何かを怖がつて。  
……アブソルが言つてたな。人為的な異変だつて。とすると、ポケモンタワー内部にいるのは……。

いろんなことを考へて、ポケモンタワーについていた。外からでも、中にあるたくさんの墓が見える。そこからは、ただ一人、墓の前で祈つてているのが見えた。

知つてゐる顔だつた。

「……ウイングティー！？」

「つー…………ああ、誰かと思えば、山で会つた子か。いつの間にか、ポケモントレーナーになつていたのか」  
「まあ、成り行きで。それで、ウイングティはここで何を？」  
「ここに来る目的といつたら一つだけ……と言いたいんだが、実はお参りだけではない

「……？」

「上」「下」、ロケット団がいるんだ

「……そう、か。やつぱり

だと思つたんだ。この地方で、あくびこ事をするやつらとこえばロケット団くらい。おのずと答えは出でくる。

それにも、ワインティに怪我がないよつでよかつた。折れてた右腕も治つてゐし、さすがポケモンだな。

「あれ？ でも、それとワインティがここにいることに何の関係が

？」

「……私は、奴らを止めなければならぬ」

そうこうと、おもむろにワインティは立ち上がつた。

「だけど、結局私には止められなかつた」

「……？」

「どうごうことだ？ …… ウインティだけでは、ロケット団に勝てなかつたつてことか？」

「お前も、ロケット団を止めに來たのだうへ……頼んだよ

「わ、わかった！」

ついオウム返しに答へてしまつた……まあ、言わねなくとも止めに行くけどさー

「よし、上にいぐれみんなー！」

「……あんた、何しに行つてたの？」

「ドクロッグ？……どういう意味だ？」

「あーの一ねーシグ。なんで悪い奴らを止めよつとして、無傷で帰つてこれるのや」

「…………あ、やうこえば。

「…………」

「ふふつ。どこの誰さんだか知らないけど、なあーんか隠してゐる田をしてるよ？ 怪しいな～」

「別に怪しい」とはないよ。……君が思つてゐるほどね

「じうだかねー。どつちみち、私たちが素直につつこむには危険すがれるとと思つげど」

「お、おこドクロッグ。俺には何が何だかわからないんだが

「簡単に言つと、ワインティガロケット団とグルかもしけないってことかな？」

「え、ええつ！？」

「……まあ、疑われるのも無理はない

「お、おこおこ、頑張りやー。」

無理はなこつて、違うなら違つつて言えぱいにだろー

「私りがロケット団と一生懸命戦つてゐる間にこいつそつ後ろからへもしくは、ロケット団の田を盗んで何かくすねたり？」

「お、おこドクロッグ！」

「どつちみちー。」

止めゆうとしたといふを、手で遮られる。

「あんたが口ケット団と戦つてなんかない、ってことは確定だね」  
ビシッ、と逆転裁判よりじく指をさすドクロッグ。

「……あははは」「は

ワインディが、ここにきて初めて笑った。いやでも、正体がバレたから、とかそんな黒い笑みじゃなくて、普通に今のドクロッグのポーズが面白かったから笑った、って感じ。

「いや、間違つてはいないよ。間違つてはいない。確かに私は口ケット団と戦つてなんかない」

「……およ？　なんか意外な反応だね」

「でも嘘はついてなによ。止めようとしたのも事実だ」

「それって、どういう意味だ？」

「怖かつたんだ。口ケット団と……いや、あの出雲と対峙する」と  
が

「なつ、出雲が来てるのか！？」

「ふみゅ？　なんか急に話にひいていけなくなっちゃったんだけど」

「え、出雲ー？」「……出雲？」「つ、出雲、ですか」

「ええちよつ、何？　何でやつて今までタワーの中にすり入つてなかつたのにさも当然のように会話の中に入り込んでるの？　いや君たちの声を久しぶりに聴けたのはうれしいけどさ」

「出雲……またあいつらと戦つことになるか」とか

「なんだ、お前たちもすでに出雲に会っていたのか？ それなのに生きているなんて、運がいいな」

「ああ、まあ出雲とはいろいろあってな」

「おこてけぼりしょぼーん……」

あ、ついに体育座りしちゃったよ。出雲を連呼しきめた。

「えーっと、簡単に言ひたい、出雲ひでこののはロケット団……悪い奴らの親玉だ。あいつは、サイホーンの母親、アブソルの主のトレーナーで、イーブイに酷いことをした奴だ。どうにつけか、すごい因縁がある」

「なるほどねえ。ビートでみんな食いつくわけだ。……それにしても、イーブイに酷いことするなんて、許せないね！ イーブイー体何されたの！？ キズモノにされたとか！？」

「き、キズ……もの？」

「おい、イーブイに変なこと吹き込むんじゃねえ変態。それとその妄想で生成されたよだれを隠せ変態。『変態』

「ひどい！？」

ドクロッグ涙田。……だつてハアハアしながらそんな質問してたらセクハラだろ。

「……口ホン。まあ、だいたい状況は分かつたと思う。出雲は最近、明らかに乱獲を始めている。どうやら今回は、ゴーストを乱獲をしているようだ。……出雲はどういうわけかポケモンの知識が豊富で、学会にも莫大な影響を及ぼしている。だから、ロケット団のボスも、そしてポケモンの乱獲すらも黙認されているんだ」

ゲームで培つた知識を生かし、学会の権力を握つている、ってとか。

「世は味方になつてなどくれない。だから出雲を止められるのは個人の力のみ。……とはいっても、私はこの様だ。一度やられたからといって、怖氣づいて近づけない」

よく見ると、ワインディは震えていた。それほどまでに、出雲が怖いんだ。……俺も、その恐怖は身にしみているから、分かる。あのワインディでさえも恐れる理由が、分かる。

……待てよ？ 山までワインディを吹つ飛ばしたのはドサイドン、つて言つたよな。

「ひょっとしてワインディは、出雲のせいで山まで飛ばされたのか！？」

「クン、とワインディが頷く。

「奴のポケモン達は、尋常じゃなく強い。他とは明らかに実力が違うんだ。なんというか、出雲は、他と比べて群を抜いている……天才を見つける、天才のよつだ」

そういうえば、サイホーンの個体値も一瞬で見抜いたな。一体どうやつたらあんなことが……？

「気をつけてくれ。そして、最も恐ろしいのは出雲血脉……それを、くれぐれも頭に留めておいてくれ」

「分かった。それじゃ、いくぞみんな！」

やつぱりみんな乗り気ではないけど……でもその反面、今度こそ出雲を止めたいという気持ちもあるのだろう。だから、サイホーン、アブソル、イーブイの三人は、再び出雲と戦うことを決意できただ。

……でも、なんでドクロッグが来ないんだ？ ウインディの何か話してるようだけど、いつたい何を？

「さっきの会話であんたが一個嘘ついたの発見したんだけど、言つてもいいかな？」

「……できることなら、言わないでほしいな。士気が下がつたら出

雲との戦いにも支障を来す

「またつまご」と口実つくつちやつて。ま、そのヒーリだけじゃ

「おい、何話してんだー？ 早く行くぞ！」

「はいはーい」

何を話してるかは分からなかつたが……今大事なのは、出雲をどうつにかすることだよな。急がないと！

## シオンタウン。中編

「……『ゴースト、ゴースト、ゴーストオー。さすが『もつ』ねえかな」

「出雲様、ゴースだつて『ゴースト』に進化しますし、捕まえてみては？」

「進化せらるなんてめんどくせえよ」

「お月見山じやイシツブテ捕まえてたじやないですか」「『ローン捕まえるためにわざわざチャンピオンロードまで行くとか、めんどくせえよ。あー、お月見山行くついでにハナダの洞窟でユングラーも捕まえときやよかつたな。……あ、よく考えたらゴーリキーもチャンピオンロードか。めんどくせ』けど行つた方が早いかなー」

「……そのポケモン達に、いつたいどんな関係があるんですか」「お前にや関係無いよ」

「……いるな」「いるね」

お墓で身を隠しながら、様子をつかがう。ドクロッグは格闘タイプだしいざという時に対応できるから出しているけど、他の三人は久しぶりにボールの中で待機してもらつていて。三人を危険にさらすわけにはいかないし……それに、三人も本心では出雲に会いたくないだろうから。とはいっても、ボールの中から様子は見えるし、サイホーンあたりが興奮して出てこなきゃいいけど……。

「どうする？ 突つ込む？」

「馬鹿言つな、普通のトレーナーならまだしも、出雲はあいつ自身も規格外の強さだ。そんな無謀なことはできない」

「ふーん……まあ、確かに相手にとつて不足なし、って感じかなあ」「相手にとるな馬鹿者」

今もなおニヤニヤ笑つているが、相変わらずドクロッギの考へてることはない。今考へてみると、格闘・毒つて、正反対なタイプだよな。格闘は、「陽」つて感じするけど、毒は「陰」つて感じがする。なるほどね、だからこんな清々しいくらいの変態が誕生するわけか。

「シグー、なんか失礼なこと考へてない?」

……しまつた、顔に出でいたか。

つと、そんなことはどうでもいい。今はあいつらの様子を田を離さないようにはしなければ。

「お、お兄さんっ! ゴーストお姉ちゃんたちを助けてっ!..」

「んなつ……! ?」「おおつゴースちゃん可愛い!」

突然、背後から声がした。ゴーストだ。身長は30㌢くらいで、妖精みたいな感じ。

「……あ? 誰かいいるのか? ポケモンタワーは今立ち入り禁止なんだがな」

「しまつた……!」

「頑張ったねー! ゴースちゃん。もう大丈夫だよー、あのお兄さんが

なんとかしてくれるからねー」「

「ホ、ホント……？」

馬鹿は放つておくとして、これはまずい状況だ。隙を突くつもりが、出雲に見つかってしまった。

「お前ら隠れる気ないのか、隠れてるつもりなのか、どうちなんだ？　声が丸聞こえなんだがよ」

「……ひょっとして、ゴース、余計なことしちゃった？」

「いや、大丈夫だ。どうせ突っ込むつもりだったんだから。踏ん切りつけてくれて、ありがとな」

まあもちろん嘘だけさ。ここでゴースを傷つけても、何も解決しないし。ここには、素直に姿を見せるのが得策かね。

「隠れる気なんてねえよ、ゴースト達を放せ！」

「おー、お月見山であつたあちら側の世界の住人か」

出雲は笑いながら言った。今のところ敵意は無い。まあ、出雲の様子だと俺と出雲以外には、人間世界の住人はいないのだろう。だから、わざわざ敵同士になることは無い、と。

だが何度も言うが、俺はポケモンを平氣で傷つけるような奴と仲間になる気はない。

「出雲様、追い払いますか？」

「いや、いいよ。それに、お前」ときが敵う相手でもないし、下がつてろ」

そう言うと、ロケット団の幹部っぽい人（この前アブソルに踵落とされた奴）は奥へ去っていった。

「……ゴースト、コングラー、ゴローン、ゴーリキー。通信交換で進化するポケモンが、この世界だとどうのよひに進化するのか、つてか？」

「ああ、まあ氣付くよな。さつきべらべら独りでしゃべっちゃったからなあ。そのとおりだ、この世界には通信交換って概念がないんでな。だけど、ゲンガーやフーティン、ゴロー二ヤカイリキーは、きつちり野生で出てくるんだよな」

「……お前も、ドサイドンを持つてるしな」

「いや、それはちと違う。あいつはプロテクターを持たせた瞬間に進化したんだ。同様に、エレキブル・ブーバーンとかもな。そんなわけで、道具が条件に入らない奴はどうなるか、という研究だ。ポケモンの研究の邪魔はしてくれるな」

「乱獲する必要はどこにあるんだよ。それに、イーブイみたいに酷い目に遭わせるわけにはいかない！」

「はあー……ホント、どうして同じ世界の住人なのに、ここまで考えが違うかね。お前は、お人よしというか、偽善者というか、潔さがないというか」

「ポケモンの愛し方がお前とは違うんでね」

「ゴースちゃん、待ってよーう！」

「だつ、だから、早く、ゴーストお姉ちゃんを助けてってば！ 私はいいからあ！ ……ひつ！？ ふ、服を脱がさないでえ！」

「うえへへ～捕まえたっ！」

「んで、その愛した結果があのフリーダムつぶりか」

「…………おじこらド変態つ！」

「ふあつ！？ い、いけないいけない、危うく本能のままに」「ゴースちゃんを襲つとこりだつた」

「お前帰れよもづ」

「俺ももう帰つていいのか？」

「ま、待て！ ゴースト達を放せ！」

くつそ、ドクロッギのせいでの調子が狂つ……。

「放せと言われてもな。確かに同じ世界の住人であるお前とは仲よくしていきたいが、何事にも限度がある。お月見山の時は結局イシツブテを数匹捕まるだけで我慢してやつたんだ。これ以上は譲れねえな」

「お前がポケモンに酷いことをするつもりなら、こいつらでも邪魔してやるよ」

「…………おーおい、力の差をわきまえろよ」

「とつこのとうにわきまえてるさ。懲りないけどね。 ほら、出

番だドクロッギ！」

「あ、うんつ！」

「ドクロッギか、また厄介なポケモンを。……俺じやちと危ないな、出て來い、グライオン！」

「あいよつ！」

出できたのは、マントを羽織い、赤色スースに青色のプロテクターを身に付けた男。目つきが悪い。

何故かドクロッグは、グライオンと聞いた瞬間嫌な顔をした。  
「ドクロッグか……ちと嫌な思い出があるが、しづがない」  
「グライオンか……いろいろ恨みはあるけど、しづがないか」

「え？」 「ん？」

お互にが、目を合わせて固まつた。

「ああつ！？ お前口ケツト団アジトを脱走したドクロッグ！」

「あああつ！ あんたは私を誘拐したグライオン！」

「え、えええええつ？」

「……」「……

「おいお前！ お前が強引にアジトを脱走するから、俺の監督不行届つてことで叱られたんだからな！」

「ちょっととちょっと自分で誘拐した癖に何怒つてんのぞ！ 私はあなたにシンオウからつれてかれたおかげで、家族も友達も可愛い子たちにも、全員会えないままなんだからね！」

「……ついでに観光させてくれなんて言つてた奴が、よく言つたよ

「それとこれとは別なのつ！」

「ううか、お前のおかげでポケモン研究科がズタボロなんだよ！」

何人もうちの研究員をフルボッコにしやがって！」

「正当防衛だよ！ どうせ無抵抗だつたら捕まつてたんだろうしー。」

「ぐつ……まあ、いい。好都合と考えよ。」  
「で捕まえたら、俺の手柄だし」

「馬鹿野郎。俺が見つけたんだから、お前の手柄でも何でもねえよ  
出雲の言葉で、グライオンは少し黙る。

「……それでもお前は、俺に因縁のある奴らばかり集めてるのか？」

「それだけロケット団が悪事を働いているつてことだろ」

「おいおい、ドサイドンやバンギラスはただ捕まえただけだし、当然の行為だろ」

「……『山海等のリーダー的ポケモンを私的理屈で捕獲してはならない』、ってのは、この世界では先輩のお前が知らないはずはないだろ？」

「私的理屈じゃない、ロケット団の意思だ」

「ロケット団は公的じやねえよ。同人サークルみたいなもんだろ」

「……長いことロケット団のボスやつてるけど、同人サークルに例えられたことは初めてだわ」

呆れたような顔されたが、まあ半分的を射ているんじゃないかな。

「とにかく、いけドクロッグ！ お前がただの変態じゃないってことを教えてやれ！」

「変態はもう確定しちゃったのー？」

「はあー……いけ、グライオン。強そつだから油断せずにな  
「何言つてんだよ出雲！俺はシンオウからここまでドクロッグを  
運んできたんだぜ？ 倒すくらいとも簡単だつての！」

「あー、お前のやういう性格好きだぞ。だが、直した方がいいな…  
…まあ、好きなようにやつてくれ  
…？ 命令は出さないのか？」

「とこづわけで、先制行くぜ！ 俺のアクロバットを見せてやるよ  
！」

途端に、グライオンが宙を舞つた。……あれ、マントで飛んでるの  
か。ムササビみたいだな……つと、見てる場合ぢゃない。相手の言  
葉をそのまま考えるなら、この攻撃はアクロバット。となると、こ  
いつのばあい飛行ジュエル持ちの可能性が高いな。かわすこととに専  
念した方がいい。

「ドクロッグ、敵の動きに注意してかわせー！」

「おつけー」

そつ言つて、ドクロッグは

動かなかつた。

「えつ、ちょ、ドクロッグっ」

「は～い？」

奮気に返事してる場合ぢゃない……つて！ もうグライオン間近に  
迫つてゐる！ やばい、このままじゅモロに激突 つ！

「いやア」「するかと思つてたら、

「あ つ?」

パシッと受け止めて、流した。  
グライオンが、床に叩きつけられる。

「……ドクロッグ、今のは?」

「対ポケモン用合氣道、つてどとかな。飛行ポケモンにも対応できるよアレンジ。んでそのまま空手の応用で」

セツヒツと、ドクロッグは倒れたグライオンの近くに寄り、

「 セツヒツ……」

思いつきつ顔面を殴打。

……悲鳴を上げる間も『くえない。

「中高一本拳」

えげつねえ。しかもお前の中指、猛毒の爪だし。硬いし。グライオン、『』愁傷様です。

「だから言つたろグライオン。気をつけろって。お前はもう少し油断する癖を直しな。……つて、聞いてないか。戻れ、グライオン」

グライオンが赤い光に包まれ、ボールの中に入った。

「それにしても、何でドクロッギは連れて来られたときに抵抗しなかつたんだよ？」

「いやー、何か、空を飛ぶ感覚が楽しくてさ」

本当に大丈夫かこいつ。

「……それにしても、参つたな。格闘ポケモンが格闘技使うとは

「いやー、知り合いに格闘技の達人がいてさー」

「おまけに、毒タイプ。マンツーマンにおいて人間が最も戦いにく

いポケモンだな。まあ、あくまで擬人化においてだけど

「まあ、その気になればほんの一滴でも人殺せるからね。危ないから出さないけどッ！」

「お、おいでドクロッギ！」

ドクロッギが、出雲に急接近した。そして、そのまま出雲の腹に向かつて、突きの姿勢を見せた。……毒づきか。が、出雲はそれを手で掴み、そのまま手刀で持つた手を碎こうとするが、その前にドクロッギが強引に手を振りほどいた。

出雲が顔へ追撃を加えるが、それを手で受け流し、反撃。しかしその隙に足をすくわれ、バランスを崩した。彼女は当然のように一瞬で立ち上がり、お互に間合いを取る。

……何の漫画だよこれは。

とこうか、格闘タイプのドクロッギ相手に互角の人間って、一体ど

んなスペックしてんだ。

「ちょっとひょっと！ 躊躇なく女の子の顔に突き入れようとする  
つて、どうこう神経してんのさー！」

「戦場で男も女も関係ないだろ？？」

「…………ふーん」

その言葉を聞いた瞬間、ドクロッグの目が細まった。でも、不機嫌  
とかではなく、むしろすこぐ上機嫌そつだ。ニヤニヤと笑って、ゴ  
ロゴロ喉を鳴らしている。

……猫かよ。

「…………んふふっ」

「なんだ？ かかつてこないのか？ それならポケモン出しちまう  
ぞ？」

「ククッ…………クククッ」

出雲の質問にも答えず、ドクロッグは笑い続ける。

ところで、これ、多分「悪だくみ」だよね……？ 一体、何する気  
なんだ？

それと、氣のせいがドクロッグの笑い声と、中指の猛毒の爪が、シ  
ンクロして脈打つてるような……。

「…………まさか」

「ぱっくだーんっーー！」

猛毒の爪から生成された毒々しい紫色の塊が、出雲くと飛んでいった。

## シオンタウン。中編（後書き）

ポケモンリトルトリオ空氣。  
一人称だと全員を困だたせるのはちょっときついな……。

## シオンタウン。後編

ヘドロばくだん。

その名のとおり、ヘドロを爆弾のように投げつける技。ドクロッギにとつてはタイプ一致技。そして、先程までしていたのは恐らく悪だくみ。特殊攻撃を2段階上げる技だ。そして放つた一撃、その威力は凄まじいものだろう。だが、この前のマチス戦を思い出してもいい。

無効化されたら、それまでなのだ。

「つだあー！！ 僕を盾に使うんじゃねえってのー！」  
「そういうなよ。どうせ効かないだろ？ ボスゴドラ」  
「効かなくても、毒を全身に浴びていいく気分になる訳ねえだろー！」

「……あるえ？」

出雲がとつたに出したポケモンは、重そうな鎧に身を包んだ男、ボスゴドラ。岩・鋼タイプのポケモン。鎧は、毒を無効化する。……つまり、どれだけ強い一撃でも、意味がないのだ。まあ、精神面とか衛生面は置いといて。

「……それでも、あんな人間が受けたら死ぬような一撃、躊躇

なく撃つか？」

「戦場では男も女も関係無いのに、人間とポケモンは関係あるの？」  
「それが言いたかつただけかよ」

出雲は苦笑いだ。まあ、とつさの判断が無ければ死んでたかもしないんだから、そりゃそつか。

しかし、ボス「ゴドラ」といえば、格闘と地面タイプにとても弱いことで有名だ。格闘タイプを持つドクロッギ相手に出すと壊るのは、一体どうこうことだ……？

「疑問だらう？　だけどな、全てがゲームのシステム通りとは思わないことだ」

「……？」

「……と、とにかく、何で効かなかつたのかは分からぬけどもう一回ーー」

「馬鹿、鋼タイプを相手にしたこと無いのかー？　鋼タイプに毒は効かない、格闘技で攻めろー！」

「わ、分かった！」

ドクロッギが再び動き出す。

「……くそ、なんとか隙を見てゴースト達を逃がしてやれないかな。ゴースト達が入ってると思われる袋は、幹部が持っている。しかし、

いるのは出雲より奥の方で、出雲を抜かない限りには手を出すことができない。かといって、コースがこっそり近づいていて、気付かない出雲でもないだろ？。コースには頼れない。とにかく、ボスゴドラを倒した瞬間の隙を狙うしか

「 もやあつー？」

……え？

何かが床に叩きつけられる音が辺りに響く。しかし、それはボスゴドラのような鎧の音ではなく、生身の体の音だった。

「 ドクロッグ！？」

「 ……つく」

見れば、ドクロッグはボスゴドラに投げ飛ばされたようだった。……しまった、考え方をしている場合なんかじゃ、なかつたんだ。

今は、このポケモンバトルから目を放すべきではなかつた ！

「 ドクロッグ、大丈夫か！？」

「 ……んー、あー、大丈夫。なんとかね」

手をひらひらさせて、元気なさげにドクロッグが答える。

「なアーラ、割と大したことないじゃねえか。警戒して損したつての」

「つ……そんな馬鹿な！」

「だから言つたら、全てがゲームのシステム通りにはいかねえって。あくまでこれは、リアルなゲームなわけじゃなく、現実なんだよ。リアルボスゴドラは、重い鎧を纏つたポケモン。そりや、格闘。ポケモンは頑丈だから鋼も撃ち抜くが、反対に鋼だつて、生身の体には大きな衝撃を与える。鋼タイプは、ポケモン世界じゃ優遇されてるな」

……鋼タイプに毒は効かないのに、か。本当に優遇されてるよ。

「……まったく、まさか手で受け止められて投げ飛ばされるとは思つてなかつたよ」

「スマン、俺がいながら……」

「いや、私も少し油断してた」

手をぶらぶらと動かすドクロッギ。屈伸とか、伸脚とか、準備運動みたいなものをし始める。

「……本気でいかないとなあ。殺す氣でいつても、死はないよね？」  
「舐めてんのか？ 殺す氣でいつても傷一つ引かれないと」

「さあ、どうかなあ」

そして、彼女が明らかにスピードを上げた。相手と戦うために近づくのではなく、まるで突進するようなスピード。

「ボスゴドラ、受けるな、攻めろ！」

「言わねなくてもそうするつての！」

「ああもう、てのてのうるさい！」

「なんどうでもいいことに気を散らすな！ 最大限神経使って、何とか倒してくれ！」

そして、ボスゴドラとドクロッギがぶつかり合った。

ボスゴドラは、大柄で力もある。が、鈍い。反対に、ドクロッギは素早いが、力はボスゴドラに劣る。

よってドクロッギは素早さで翻弄できるが……一発でも当たつたら分からぬ。俺には、試合の流れをそこまで見定める技術はないから、再びドクロッギを見守るだけ、といつことになる。

反対に、

「ボスゴドラ、前に出て攻めろ！」「おうっ！」

「ボスゴドラ、後ろだ！」「うおっ、危ねつ！」

「違う、翻弄されたらおしまいだ！一発当てたらこいつのものだ、落ちついて当てに行け！」

「うう……やり辛いなあ」

出雲は、さすがポケモン世界の先輩、悔しいがアドバイスは的確だ。ポケモン同士一対一での対決なら、間違いなくドクロッギが勝つているだろう。今まで、出雲のアドバイスが無ければ勝っていたところがいくつもあった。

……先程から、モンスター・ボールが微かに揺れる。「私たちを使え」と言いたいのだろうか。だけど、それは無理だ。確かに今、ドクロッグは不利な状況だが……はつきり言つてしまえば、ドクロッグはこの三人より遙かに強い。今ここで出しても、状況は変わらない……いや、更に不利になるだろ？。ドクロッグは、この三人に弱いし、多分身を呈してでも守つてしまつだろ？。まだ、だめだ。

ドクロッグが、ボス・ゴドラを倒した瞬間……その瞬間に、一気に三人で突撃すれば、抜けられる。狙うのは、その瞬間しかないのだ。

「ドクロッグ……」

やはり、今頼れるのはドクロッグのみ。

「 そらあつ！！」

「あつぐ……！？」

「ドクロッグ！？」

しかし、遂にボス・ゴドラの繰り出した掌打が、ドクロッグにヒットしてしまった。そのまま、床へと叩きつけられる。しかも今度は、投げ飛ばされたんじやなく直接の殴打で叩きつけられたんだ、そのダメージはさつきよりも明らかに重いはず……！

「ドクロッグ、大丈夫か！？」

ドクロッグ、大丈夫か！？

シグの声が聞こえる。

……返事はできそうにないな。

まったく、どうしてこんなことになつたんだろう。可愛い子たちと一緒に観光とかしてみたかつただけなんだけど。それなのに、成り行きでポケモンタワーなんて靈園に来るわ、なんか、大ピンチだわ、もー、散々。

だけど、ゴースちゃんも助けたいし、ゴーストちゃんたちも助けてあげたいしな……かといって、あの子たちに頼る訳にはいかない、というか、ぶっちゃけこの人相手に何もできないだろうしなー。つと、いけない。倒れたままだ。早く起き上がらなくちゃ

.....。

起き上がりない。

意識はある。

起き上がりない。

.....んー。

これは、まずいんじゃない？

「.....意識はあるようだな。一応、もつかい叩きこんじくかー」  
ああ、やばい。ここで私が戦闘不能になつたら、全滅確定だ。そし  
たら、まんまと『ペーストちゃんたちは連れてかれて、ついでに私た  
ちも連れてかれて.....シグはどうなっちゃうんだろうなー。そのま  
ま身ぐるみはがされてポイ、か、それとも殺されちゃうか.....でも、  
出雲つて奴の口ぶりからして、それはないかな。

でも、サイホーン、イーブイ、アブソルは.....どうなつちゃうんだ  
ろう。私も、の人たちに怪しいことされかけたし、きっとみんな  
酷いことされちゃうのかな。

あの子たちだけでも守つてあげたいけど.....今の私には、ムリ。

長年あの人には鍛えられてきたけど、まだまだ未熟だったってことか。

シグ、期待にこたえられなくて、ごめんね

「ドクロッグ、頑張れーッ！」

。

「あ？ 頑張れって、こいつもつ動かないっての」「諦めないでくれ！ 頼む、もつ少し、もつ少し頑張ってくれ！」

あはは、シグ。

私、倒れてるのに、もつと頑張れなんて無茶言わないでよ。

「お前なら、勝てるはずだ！ ボスゴードリフより強いんだからー。」

そうかもしれない。

でも、出雲がいるから、勝てないよ。あいつのアドバイスは、本当に的確だもん。

「俺も、もつとトレーナーとして強くなるから、約束するから！ その為にも、今は……今は、勝ってくれ！ お願ひだ、立ってくれ！」

…… そうだよね、ここで負けたら、みんなバラバラだ。  
だからって、何も私にそこまで頼らなくともいいじゃない?  
つて、女の子なんだから。頼りたいんだよ。

私だ

……まあ、今後のシグに期待ってことだ。

だから、しょうがない、もう少しだけ頑張ってみるよ。

ガシッ、と、音がした。

ボスゴドラの攻撃がヒットする音ではなく、

その攻撃が、受け止められる音だ。

「なつ……お前、どうにそんな力残ってたんだ！？」

「残つてたんじゃなくて、もらつたんだよ。シグにね」

ドクロッグが、ボスゴドラの攻撃を受け止めた音　！  
信じてたぞ、ドクロッグ！

そのまま攻撃を振り払い、立ち上がる。

「まったく、か弱い乙女に頼り切りなんて、男として失格だよー？  
そしてそんな軽口を言つのだから、勝てない。

「そうだな、今度はお前を守れるよう頑張るよ

だから、今は勝ってくれ、ドクロッグ。

「ぐつ……やけんなつ、応援だけで、そんな強くなれる訳ないだろ  
！　なんかしあげたなお前！」

「応援は馬鹿に出来ないぞ。心理学的にも生理学的にもな

「なんだそのしんりがくせいりがくつて……つが！？」

ガキイ！！　という音と共にボスゴドラの鎧が大きく軋んだ。

「もう少しで鎧」とぶち破れるかなあ？

「バッカ、これは皮膚だつての！！」

「あ、そうなんだ」

皮膚なんだ……。

「ふむ、それにつけてもこれは一転不利だな。……ルールに則らないと負けな気がして自重していたんだが、これは仕方がない。残りの奴らも出すか」

なつ！？ そんな卑怯な

…… そうか、これはあくまで現実だ。ポケモンバトルがいつでも平等とは限らない。出雲はもともと人間世界にいたから、ゲームのルールをある程度リスクペクトしていただけなんだ。

くそ、ドクロッギはボスゴドラの相手で精いっぱい、残りの三人では到底出雲のメンバーに敵わない。

万事休すか……！？

「いけ、 ドサイドン 」

出雲がモンスター ボールを取り出したとき、

突如として現れた炎球が出雲の手に襲いかかった。

「なつ！？」

さすがの出雲でも驚いて、モンスター ボールを手放してしまった。中のポケモンも、まだ出てくる気配がない。

「一対一の対決に水を差すとは無粋じゃないか、出雲」「……ワインディか。余計なことを」

え？

ワインディ、来てくれたのか！？

「お前が私に説いてくれた『武士道精神』はどこへやら、だな。お前の言うところ、随分と姑息になつたものだ」「人間として強くなつた、といってほしいね」「ふん、どこが」

「強者とは戦いの場に最後まで立つていた者のこと、といふ言葉もある」

「お前は戦いの場になぞいない。人の上に威張つて立つているだけだろう？」

「つま」と言つじやないか

会話の間でも、構わず炎球の追撃が入る。出雲も一応は人間のようで、当たるとやばいのか必要最小限の動きで避けながら会話している。

さつきからとりとめのない会話を淡々と話しているけど……やつぱり、二人は知り合いなのか？

つて、そんなこと考へてる場合じゃない。  
……これはチャンス、じゃないか？

「シグ、といったか。出雲は私に任せろ」

やつ叫びた瞬間、ワインテイが消えた。

そして、いつの間にか出雲に突きを繰り出していた。出雲が、それを腕で受け止めている。

「ぐつ……あのは、ワインテイ。いくら鍛えている俺でも、人間だ。

お前の神速はそれなりにきついんだぞ」

「大丈夫だ、私の神速を受け止めている時点でお前はもう人間の枠を超えてる」

「褒められてんだが、けなされてんだが」

神速……そうか、神速か！ 神速は、ゲームでは先制攻撃、その名の通りものすごい速さで攻撃する技だ。この世界では、スピードも相まってものすごい威力なのだろう。だが、その分大技で、ある程度の間合いが必要、ってとこか。

なんにしても、今がチャンスだ！

「よつしやあ出て来い三人共おつ！」

「はーい待つてましたあ！」

「きゅうくつだつた」「やつと出れましたー」

「お前ら状況は掴めてるよな！ アブソルはあの奥にいるロケット団を迎撃して、ゴースト達を解放してくれ！ イーブイは落ちたモンスター ボールからポケモンが出て来れないように抑えて、サイホーンはドクロッギに加勢！」

「はい！」

まず、イーブイがモンスター ボールを抑えた。これで、中のポケモンは出てくることができない。

そして、

「 ちょっと、また脳天直撃踵落としど勘弁 」

「 ごめんね 」

アブソルのえげつない踵落としでロケット団幹部（っぽい奴）を沈めた。

「 ようやく私の番だね、ドクロッグそこどいて！ 」

「 やーだよー 」

「 よし、突進準備……つてええーーー？」

「 だつて、私一人で倒さなきゃ、こいつに悪い気がしてさ 」

「 ぐう……舐めやがって、絶対倒してやるー！」

「 出雲の助言なしに？ 」

「 うつ 」

確かに、その通りだ。出雲がウイングディと格闘している今、出雲は助言を出すことができない。

そして、ボスゴドラは彼の的確すぎる助言で今まで有利な状況につたというだけで、本当の一対一であれば、ドクロッグの方が強い。

「 だ、黙れ！ お前は今手負いだ、俺が負けるわけないってのー！」

「 ふうん？ あらそつ 」

出雲の助言がない今、ボスゴドラは焦っている。本来の実力すら出し切れていない。今も、大ぶりの攻撃を余裕でドクロッグにかわされた。

「ぐつ……」

「どうしたの？ 負けるわけないんだよね？」

「う、うるさい！」

「……まったく、相手の力量も自分の力量もわきまえないでさあ？」

ドクロッグが、避けながらもゆっくりと力を溜め始めているのが、俺でも分かる。いろいろされたし、その恨みもこもっているんだろう、少しずつ声もドスの聞いた声になつて来ている。でも、興奮状態のボスゴドラには気付かれていない。

「 相手選べよ、青二才」

顎を撃ち、脳を揺らす、渾身のアッパー。

ボスゴドラは2・3mほどまで浮かび上がり、そして落ちた。

動かない。

ドクロッギの勝利、ってわけだ。

「みんな、でてきて」

それと同時に、アブソルがゴースト達を解放した。

「戻れボスゴドラ。……あー、くそ、またかよ。畜生、また何匹かゴースト捕まえて」

「それはできねえよ」

「あ? ……ああ、そういうこと」と

残念だが、もうゴースト達を捕まえることはできない。

お月見山のポケモン達は、解放した途端に逃げ出したから、やはり何匹かは捕まってしまったんだろう。

だが、ゴースト達は違う。

全員で固まって、出雲を反撃せんと迫つて来ているのだ。

「お前の負けだな、出雲。分かつてていると思うが、隙を見てモンスター ボールを出せるほど、私は甘くないぞ」

「…………ウインディよ。お前、何でここちらの味方をするんだ?」

「敵の敵は味方だ」

「利害が一致するとは限らんよ」

「利も害も無いじゃ。お互い、ポケモンを助けたいだけなのだから」

淡々と、会話を続ける一人、出雲とワインディ。

「ふん、まあいいや。ここで『ゴースト達に殺されちゃ、それこそ敵わない。退散させてもらひ』

そう言って、出雲はゆっくりと階段を下って行つた。目覚めた幹部も、慌ててそれについていく。

……これからも、こいつは何度も悪事を働くのだろう。ここで捕まえた方がいいのかもしれない。

でも、やっぱり駄目だ。こいつを捕まえることはできない。口ケツト団を、出雲を止めたいと言つてているワインディさえも、出雲が去つていくのをただ見ているだけといつのが、そう考えさせた。

そして、

後に残つたのは、『ゴースト、ゴースの嬉々とした歓声だけだった。

## シオンタウン。後編（後書き）

やつとりトルポケモントリオが出てきた…  
シオンタウン編はだいたいがドクロッグ回でしたね。ちよつと田立  
ち過ぎた感もあります。

田嶋セタマムシ。（前書き）

しばらく投稿しない内に何件もお気に入り登録が減りましたが、私はまだ生きております

「大丈夫だったみたいだな。間に合ってよかつた」

「ありがとうワインディ。おかげで、みんな助かつたよ」

「ワインディがいなかつたら、今頃どうなつていか分からない。」

「出雲が怖かつたんだろう? それなのに来てくれて、本当にあつがどうな」

「えつ? あ、ああいや……こんな子供たちを見捨てるのは、あまりに酷だと思つてな。その、勇気を振り絞つて」

?

「ワインディが、なぜか少し戸惑つた。」

そして、なぜか後ろでドクロッギが「ヤーヤ」と笑つてゐる。

「……自分で言つた嘘を忘れるなよー」

「ん? ドクロッギ何か言つたか?」

聞き取れなくて聞き返したのだが、ドクロッギはそれ以上何も言わなかつた。

「それにしても、出雲とワインディは、一体どうこう関係なんだ?」

「……ふむ、簡単に言えば、旧友だらうか」

「旧友? 出雲のポケモンだった、とかじゃなくて?」

「えつ」

「えつ」

「そんな心底意外そうな顔されても、普通はそう考えるだろ。」

「いやいや、あり得んあり得ん。あいつなんかのポケモンなど」

「あ、そつすか……」

鼻で笑うワインディ。うーん、そうだと思つたんだがな。でもそつ

だとしたら、まだチャンスはあるってことか。

「俺なんかのポケモンになるってのは、どうだ？」

「…………」

そんな提案を、出してみる。ワインディングが少し黙つた。  
そして、じつとこちらを見つめた。

「…………ふむ」

なんだか照れくさくなるが、ワインディングのことだし、何か見定めて  
いるのだろうから黙つていい。

「…………ふーむ」

「ど、どうだ？」

「うむ、血色がいいな。いたって健康だ」

「…………。」

272

「…………突っ込んでくれ」

「すまん」

「こつは真顔で[冗談を言つから]反応しちらうんだよ……。

「冗談はさておき、それはやめておくよ。一匹狼というわけではな  
いが、人間の足に合わせていてはこわとか遅すぎる。まあ、私の足  
に合わせてくれるというなら別だが」

「こつもは、どれくらいこの速さなんだ？ もちが神速のスピードをいつも続けるわけじゃないだろ？」

「ああ、そうだな。いつものスピードになると……だいたい時速50kmくらいいだろ？」「

「無理」

平均の速さが人間の限界超えてんじゃねえか。

「なら、私が運んであげるよ！ 私ならそれくらい出せるし！」

「勘弁してください」

サイホーンに乗って旅なんてしたら、中身が全部出る。それにお前、まだ曲がるの苦手だろ。

「はは、まあ無茶するな。私は、私だけでロケット団を追う。お前たちも、お前たちの旅を続けてくれ」

「……残念だが、そうだな。そつするよ」

俺の目的は、ポケモンリーグを田舎じつ元の世界へ帰ることだし  
な。

待てよ？

今更、本当に今更だけど。

「こつもは、俺を元の世界へ帰る手伝いをしてるんだよな。

俺と別れるため、俺と旅してゐるわけなんだよ。

……今まで明言してないから、みんなは知らないだろ?ナビ。  
言ったほうがいいのか、言わないほうがいいのか。  
でも、俺がそれきり言つたら、こいつらはどうするんだ?  
それでも俺の手伝いをしてくれるんだろう?か?

……あーへそっ、俺はここひりてこながり、ここひりを  
信じることができないのか。  
皿口嫌悪って、まさにことだな。

「シグ~、ビッたの?」  
「あー、いやなんでもない。それじゃ、また縁があつたひめね、  
ウインディ

「ああ。無事でな

「せんじゅー、行こうか!」

「指すは、タマムシシティ。

とりあえず、ポケモンリーグへ行くための旅。

「サイホーン！」

「は、はいっ！」

「アブソル！」

「……はい？」

「イーブイ！」

「は、はい」

「ドクロッギー！」

「はーい！」

全員の名前を、確かめるように呼んだ。  
一緒にいることを、確かめたくて。

馬鹿だよな。騙してるのは俺のまつなのよ。

「出発だ！ 田嶋すはタマムシシティー！」

さ、何事も切り替えが大事だ。  
次に行く街について考えるか！

タマムシシティは、デパートもあるし都会とこつてもいいだらうな。  
きっと他のポケモン達もたくさんいるんだろう。しばらく滞在してもいい気がする。

お金？

それは、3つのジムリーダーを制覇したことで結構貯まったよ。  
現在、ざつと二十万くらいかな。

「オイゴルア！ そこのしめえ、金よじせやー。」

「……はい？」

突然そんな叫び声が聞こえてきた。ブロロロロロといつむをい改造バイクのエンジン音も聞こえる。

……お金の話をした瞬間にこれがよ。

「はい？ ジャねえだろ！ 金よじせつて言つてんだよ！」  
バイクに乗つて現れたのは、いかにも世紀末な髪型モヒカンをした4・5人の男。

どう見ても暴走族です。

つか、本当にこんな格好してんのかよ、暴走族。

「あ～……いや、持つてません」

「嘘つけゴルア！ ポケットから札見えてんだよ！」

あ、本当だ。

ふーむ、そろそろ財布買わなきゃな……。

「シグー、どうする？ めんどくさいし、のしつく？」

ドクロツグがニヤニヤしながら聞いてくる。……あれだけ戦つたのに、まだ暴れるつもりかよ。

「いや、いいよ。大勢を相手にするんじゃ、時間かかるし」「ふむ？ ジやあ、どうするの？」

「いけ、ベトベター！」

「ドガースもでこい！」

「……おいおい」

話しあつてる間に、勝手に暴走族たちがポケモンを出してきた。一人対大勢とはさすが暴走族、ルール無用だな。ちなみに、ベトベターは紫色の布を羽織った紫色の髪をした紫色ジト目の女の子で、ドガースは紫色の服を着て紫色の髪で紫色の目をした背の小さい女の子。

「うう……目に悪い色だなあ。  
ま、そんなことはさておき。

「しょうがない、サイホーン出番だ！」

「あ、私？ 分かった！」

「ベトベター、ヘドロばくだん！」

「……はーい」

「サイホーン 地震だつ！」

「わつふうーいつ！」

「……あ？ 何だこの揺れ」

サイホーンも、さぼっていたわけではない。確實に、強くなつていつてる。だいぶ地震の精度も上がってきたみたいだな。1m以上の

誤差はほとんどなくなってきた。

まあ、少しポケモンかじってる人なら分かると思つが……

ベトベター 毒タイプは、地震、すなわち地面タイプの技に弱い。  
その「じゆね」、

「いだあつ！」

「べ、ベトベター！？」

ベトベター、全員戦闘不能。

んでもつてだ。

この世界での「い」と「じゆね」、

ルールを無視するようなトレーナーも、問答無用で懲らしめられる  
つてこと。

「ぐえつーー？」「あだだだつーー！」

「ちよ、ちよつ……ますたー、しつかり！」

ベトベターは全員戦闘不能だが、ドガース組は転げまわる暴走族を  
必死に追っている。

あ、そういうばドガースは特性が浮遊だから地面タイプの技は効か  
ないんだよな。

……まあ、この調子なら逃げても大丈夫だろつ。

「よし、サイホーン、地震やめ！ みんな、今の内に逃げるぞーー！」

「……ふう。走ってる内に、タマゴシまでついたみたいだな  
「え、もう次の街？」

くせむらの向こうには、いくつもの建物が顔を出していった。  
予想していたが、やはりカントー地方の中でもタマムシシティは都  
会らしい。

「タマムシはどうやら都會みたいだ。ジム戦の前に、いろいろ見物  
してまわってみるか?」

「おー、いいね!」

「でもマスター、お金は?」

「心配ないよ。お前らにまほ結構助けられてるし、こりへんで羽田  
外そうぜ」

「……なにもやることない」

「ま、まあいろいろ見て回つてみよっぜ。ひょっとしたら面白にも  
のがあるかもしないし」

「わかった」

みんなの賛成を得られたことだし、それじゃ都會見学といこうかね。

え、ドクロッグ?

「おーい、みんなあ! 早く行こうよー、見て見てアレめつちや高  
い! 何メートルあるんだるー?」

ホッホーウ、と機嫌な声をあげて、既に行く気満々です。

「んにゃータマムシにはどんな可愛い子がいるんだろう? .....はつ、

そこにいるのは一ヨロモサちゃん！？ おー仲間仲間！ カエルカエ

ル！ ケーロケロケロ！」

「わつ、私はまだカエルじゃないです！」

「いざれなるでしょ～？ 同じ同じ！」

……テンション高いな、酒でも飲んでのかアイツは。ほら、一ヨロモ困ってるじゃん。

「もう、なんなんですかあなた！ もう、行つていいですか？」

「うえ～待つてよ～う！」

「ちょっと、追いかけて来ないでくださいよ～ 大丈夫ですか！？」

「酔つてるんじゃないですか！？」

「うえへへへ待て いたつ」

もう完全にスイッチ入つてたので、じつんと頭を叩いてやる。

「うちのカエルがごめんな」

「い、いえいえ……じゃあ、私、もう行きますね」

そそくかと二ヨロモは川の方へ行つてしまつた。

……タマムシに行つて大丈夫かなあ、こいつ。都会であんなことしたら、間違いなく裁判モノだよ。

……はあ。前途多難だ。

「ん～？ ドしたのシグ、溜息なんてついて～ 元気出してケロッ

」

「うぜえ

お前は元気ハツラツだな。つか、ケロッ つてなんだよオイ。アイドル気取りか。

……つていうか、みんなドン引きしてつけど。

「さて、ダッシュで行こうシグ。あいつが追いつけないくらいダッシュで」

「まつてサイホーンちゃん」

「……早くいこひ、シグ。カエルはほつといで」

「カエルはひどいよアブソルちゃん」

「そうですね。カエルはその川で泳いでてください」

「容赦ないねイーブイちゃん」

イーブイがどんどんドリになつていぐ。

「ま、まあまあ……お前ら、仲良くな。ドクロッグも落ちつけ  
はーい……いやー、あんな高い建物初めて見てさ……。ほら私、  
田舎、むじり山育ちだからわ……あの、また元井の中の蛙つていう  
か……」

「カエルのくせにややこしい考え方すんな」

「ま、まあ、ちょっとはしゃぎすぎたね。ちよつと自重するよー」

さあみんな、行こう!」

まだ街にもついてないのに、不思議な奴だ。

……はあ。

ほんと、前途多難だな。本気で心配になつてきた。

大丈夫なのか、タマムシ観光。

シ  
グ

第三回 試験はタマラジ。（後書き）

イーブイよ、何故じんざんサドになつていくんだけ

ちなみに最後の俳句もどきは10秒で考えました。

季語2つありますし、微妙ですけど

## カフエ。

「 うわあー！ 広いねー！」

「 おおきい」

「 うわー、みんな高い」

都市を間近で見て、みんなも徐々に騒ぎ始めた。

それでも、タマムシって結構な大都市だつたんだな。正直俺も、  
都市部の方とかあまり行ったことないしよく分かんないけど。

「 あんまり見上げるなよー？ 田舎者だと思われるし

「 私、田舎者以前に山育ちだよ？」

「 わたしも」

「 私も山育ちだねえ」

「 そういう問題じゃねえ」

ホント、大丈夫かなあこいつら。

「 ねえねえ、次はどこ行くの？」  
「 んー、そうだな。そうだ、カフエで休憩するか？」  
「 うん、そうするー！」

そんな中で、ポケモンと人間のカップルみたいな二人が前を通った。

……「うーん、赤い髪に耳、ふわふわしつぽ……あ、ブースターか。パークーを着て、すつじこ楽しそうに、隣のイケメンと並んで歩いている。

そして、それをウチのポケモンたちがぽかんと見ている。

「ねえねえ、次はどこに行くの？」

「……次も何も、まだどこにも行ってねえよ」

予想通り、サイホーンがわくわくしながら聞いてきた。

「ねえねえ、次はどこ行くの？」

……そしてこれも予想通り、ドクロッグがにやにやしながら聞いてきた。

「んー……そ、そうだな。そうだ、カフュで休憩でも、するか？」

「「うん、そうするーー！」」

おこおいお前ら、せりあきのを「 Kapoor 」しただけじゃんかよ。まあ、ノつた俺も俺だけど。

「～～～」

「……イーブイー？」

尻尾、ビンッビンだけど？

「なつ、なんでもないです」

「うにやははー、照れてるイーブイちゃん可愛いーー！」

「て、照れてないですってばー。や、マスター、カフュ行きましょう、カフュ！」

……まあ、ブースターはイーブイの進化形だ。言わば姉妹みたいなもの。その憧れとか、羨望とか、みんな以上に感じるんだろうな。

自分と重ねちゃって。  
だけど、「めんな。

俺、あんなにイケメンじゃない。

「……つっても、まだこの街のこ」となんてまつたく分かんねえしな  
ー。カフフッヒヂー?」「あのカップルに、いつやりつこでけばいいんじやない?」  
「みつともねえな……」「でもま、ドクロッギの意見が一番確実か。

「ま、しょうがない。……あんまり、気付かれないようにな  
「わかつた!」

いい返事だ、サイホーン。暴走するかと思つたけど、これなら何とか

そろーり。  
そろーり。

抜き足、差し足、忍び足……

「つてアホかあ！ んな歩き方してたら、すぐ怪しまれるだろがー。」「えつ！？ こつそり、気付かれないよつて、じゃないの？」  
「さりげなくつ！ さりげなく歩け！ モブを裝え！ んな忍者歩  
きで都市を歩くなバカホーン！」

「バツ、バカホーンつてちょいーー!?」

「…………だいじょうぶ、私についてきて  
「アブソオール! ほふく前進はやめろ! それじゃもはや変態だ  
!」

「ぐ、へんたつ……!?

つたぐ、なんでどいつもこいつもビックが抜けとんだよ……。  
あれ、イーブイは?

「…………ちょっとといいでですか?」

「ん? 何、イーブイ? ビッグしたのこんなとひひで?」

「ここいらへんにカフHつてあります?」

「ああ、それなら俺達も今から行くとこだつたんだ。一緒に行く?」

「わー、いいね! 同じイーブイ系だし、これも何かの縁だよ!」

「あ、いえ。マスターから頼まれただけなので、場所を教えてもらえるだけだけつこうです」

「…………なーんだ、つまんないの」

「まあまあ、そういうなよブースター。えっと、それならこの道を  
曲がつて」

俺達がバカやつてる間に、

イーブイは、さつきのカッフルに道を聞いていた。

「おー、イーブイが一番まともだね」

「…………こつそりついてくつて言つたのは、お前の意見だろーが!」

「マスター、カフュがどこにあるか、きこてきましたよー」

「ありがとな」

「…………バカって」

「…………へんたいって」

「…………気にしそぎだる、お前ら」

「だつてえ、そんな、私は元々バカホーンって種族ですみたいな言  
い方……」

「してねえよ」

「だつて、へんたいって、そのカエルみたいな言い方……」

「アブソルちゃん。そろそろ私おこっちゃうよ?」

「まあ、それはすまんかった」

「待てい」

ドクロッギに軽くチョップされた。地味に痛い。

「…………あの、えっと、早く行きましょうよ、カフュ」

「あ、ああそうだな。道を教えてくれ、イーブイ」

「はっ、はい!」

嬉しそうに歩き出すイーブイ。

…………一番行きたがってるのは、どうやらイーブイみたいだな。

「いらっしゃいませー。五名様ですね？」

イーブイのおかげでカフェにつくことができた。ウエイトレスが、笑顔で席を案内した。

……正直言つと、カフェとかそういう洒落たところはあんまり来たことがないんだ。彼女もいないし。えーっと、こうこうのって、なに頼めばいいんだろう？ まあ、コーヒーでも頼むか。

「お前らは何飲むんだ？」

「うーん……よく考えたら、飲み物とかよく知らないんだよね、私たち」

そりゃー山育ちなんだから知らないでしようよ。

「……サイホーンとアブソルとイーブイは、適当にオレンジジュースでいいんじゃないかな？」

「どうせだから、みんな違うの頼んで飲みあいつこいつよー。」

「じゃあ、わたしはこの『ジーひー』っていうの」

「私はこの『コーラ』とこうのにしましょうか」

「……おーおいアブソル、コーヒーなんて頼んで大丈夫なのか？」

苦いぞ

「なに」とも、チャレンジ

なんでそんな無駄にチャレンジヤーなんだよ。

「ドクロッギは何飲むの？」

「うーん……緑茶つてないのかなあ」

「緑茶？ いや、紅茶ならともかく、こいつにカフェに緑茶はあんまりないと思うけど」

「そつかあ。お茶とかつて、師匠と一緒に飲んだ緑茶くらいしか知らないんだよねー」

……師匠？ ドクロッギの？

「よく見るとこれ、『ポケモン専用』ってこいつメイバーがあるね」

「へえ、そうなのか?」

「うん。あ、この『毒タイプ専用ジユース(ヘドロ味)』っていうのにしようかな」

「どんなジユースッ!?..」

「あ、ドクロッグも、のみあいつーするの?」

「アブソル、今聞いてた!/? ヘドロだよヘドロー。そもそもヘドロ味ってどんな味だよー?..」

「ヘドロ味でしょ?」

「知ってるわい!」

ヘドロ味ってなんだよ…… どんな味なんだよ……。つつかもつ、『ヘドロ』がゲシュタルト崩壊してきたんだけど……。

「とつ、とにかく……みんな、決まつたんだな? 僕もコーヒーにするし、んじやあ押すからな」

「何を?」

「……何をつて、ベルだよベル。店員さんを呼ぶ

「へえー、私に押させて!..」

子供か! つて、お前はそういうや子供か。

サイホーン。ピンローンがベルを押した。あ、間違えた。ピンローン。サイホーンがベルを押した。

「注文はお決まりでしょうか?」

「えつヒー、コーヒーが二つ、オレンジジユース、コーラ、……ヘドロ味の、ジユースが一つずつ」

「はい、かしこまりました」

普通に注文できひやつたよ。普通なのか、このヘドロ味のジュースつて？

「あ、そういうや、タマムシのジムって草タイプのジムだけど、草タイプつて毒タイプがつく」とも多いからな。その影響だろうか。

ほどのくして、全ての飲みモノが運ばれた。

……ちなみに、『ヘドロ味のジュース』は予想通り紫色のジュースで、しかしさすがに臭いは無い。

つうか、ヘドロにストローをして飲むつてどういう状況なの？まあ、いいか。えーと、ミルクは入ってるな。よかつた、ブラックはあんまり好きじゃないんだ、俺。

……カフエは入つて当たり前なのかな？ よく分からん。さて、ちょうどいいことにスティックシュガーもあるし、入れて

ブショウツ！

そのとき何か、勢いよく液体が吹き出る音が聞こえた。

「…………アブソル？」

「…………に、にが、にが」

アブソルが、コーヒーを吹き出す音だった。  
目を丸くして、涙目のまま固まってる。

「…………だから言つたら、コーヒーは苦いって。しかも、砂糖も入れてないじゃん」

「そざいのあじをたのしむのが、いいかなつて」

「何その無駄に立派な心構え」

「…………ふにゅう。シグ、代わりに飲んで」

「はいはい、分かったよ」

「それで、サイホーン。そのおにしそうなジュース、ちよつとちようだい」

「う、うん。いいよ」

「お姉ちゃん、コーラもおいしいよ?」

「それ、こーひーとおなじ色してる」

「…………おいしけどなー」

アブソルはひょっとしたらオレンジみたいな柑橘系もダメなんじやないかと思ったけど、そんなことは無かつた。美味しそうに飲んでる。

でも、アブソルに断られたイーブイは若干しおれてる。まあ、大好きな人とおんなじ味を共有したいって気持ちは、分からんでもない。

「…………んで、そのヘドロ味のジュースはどうな味だ?」

「ヘドロの味」

わかるかボケ。

…………一応、美味しそうに飲んでるから、まあ、いつか。

ちょっと気になるが、飲んだらぶつ倒れそ.udだからやめておく。

「ねえ、シグ」

「ん? なんだサイホーン」

「ひょっとして、カフェってこれだけ?」

「これだけだけど?」

「…………あの、すっごく美味しそうな食べ物は?」

なんだそれ?

サイホーンの指差す先には、例のイケメンとブースターのカップル

がいた。

「すっごく大きいね、これ！ 食べきれるかなあ？」

「はは、ノリで頼んだけど、休憩のつもりがさらに疲れそうだな」

二人は、大きなパフェを仲良く食べていた。

……お前は、どんだけまねっこしたいんだよ。

つうか、なんだよあの大きなパフェ。何？ 巨大パフェって、こっちでも流行つてんの？

メニューを見てみると、なるほど確かにある。

『ジャンボパフェ』 5980円

……高っ。

「おいおい、クリームが口についてるぞ？」

「わっふ、えへへ、ありがとー」

ブースターの口についたクリームを、指でふき取るイケメン。

少女漫画とかでありそудだな、今の。

「ねえねえー、あれ食べてみたい！」

「お前な、あれけつこう高いんだぞ？ いくら都会にそりそり来れないからってなあ……」

「ええー……」

「わ、私も、食べてみたいですっ」

「イーブイまで……だから、高いんだってあれ」

「そうだよな、あんまり贅沢させるのも駄目だ。

……いくら一人がすごい落ち込んでるからって、駄目なものは駄目だ。甘やかすぎても、ポケモンは駄目になつてしまつ。それは人間と同じだ。

だから……だから、  
だけど、

「……すいません。オレンジジュースと、『ジャンボパフェ』くだ

さい」

「あ、はい。かしこまりました」

「ふえ？」「えつ」

「し、シグ、今頼んだのって」

「……だからー、あのパフェと同じもの。今日は特別。お金もある程度余裕あるし、と・く・べ・つ・に、今日は大目に見るー。」

「わっふーい！ ありがとうシグ！」  
「うわあー、あれと同じのが……」

……はあ。

甘いなー、俺も。この喜んだ顔が見たかつたからってぞ。  
ま、この顔が見れて出費が何千円っていうなら、安いもんか。

結局ポケモントレーナーってさ。  
自分のポケモンが可愛くて可愛くて仕方がないんだよな。 親が子を  
想うみたいに。

うん、今日だけ特別！

カフエ。 (後書き)

ちなみに、イーブイ系はみんなパークー着です。  
イーブイも同じく。

パフュ。 (前書き)

ギャグにキレがでない…

## パフュ。

田の前には、とにかく大きいけど、美味しいそうな食べ物があった。ジャンボパフュっていうらしい。

「ま、マスター……これ、本当に食べてもいいんでしょうか?」「当たり前だろ。せつかく頼んだのに食べなかつたら怒るぞ」「やめんなよ!」

「んじゃー、いただきます!」「

「待つてサイホーン! 待つて!」

「うえつ!? な、なにイーブイ?」

……しまった。なんか、食べられるのがもつたになくて止めひやつた。

えっと、サイホーンが口を開けたままずつといつちを見てるんだけど、じいじよづ。

「……どっけが先に食べるか、じゃんけん」「

「な、なるほど! 一口田つて大事だもんね!」

私が最初に食べたい、つてこののはわがまだから、じゃんけんで決めることにした。

「……」「……」

無言で、じさまりと睨みあつ。

「「じやんけんポン」」

「つやあーー」「むしゃーー」

「お前ら元氣いいな」

かっこ、勝てた！

「……じゃ、じゃあ遠慮なく先に」

「はーい、焦りしないで早く食べてよー？」

。

。

「どうやって食べるんですか、これ？」

「そこ」のスプーン使つたらどうだ？

。

。

「えっと、これ、どうから食べたらいいんですか？」

「その上にあるくへうんば食べたら？」

「いやですよー！ それは、なんとか、ロマンがない気がするんです！」

「……パフュ食べたこと無いくて向こう言つてんだか

。

「とにかく、そもそもこれどんな味が

「いいから早よ食べい！ みんなお前が食べるの待つてんだけどー！

？」

「はっ、はー」

上に乗つてゐるのは、イチゴとかメロンとか。すり甘やつ。

でも、この全体的に盛つてある白いのと黒いのは見たことないなあ

……。

まあ、毒じゃないんだから、食べても大丈夫だよね。

パクッ。

「……ふにゃあああああああ」

「ああっ、なんかイーブイがとけてるー！」

「えっ、これ毒でも入つてるのー？」

「いや、あれはなんとこつか、すりく美味しいからあんなつてるんだと思つー！」

「ええー？ 体がとけるくらいおいしいのー？」

「いやー……あれはあつと、イーブイがそういう体質なんだと思つー！」

「おいしいものを食べると体がとける体质なのー？」

……シャワーズになる素質でもあるんかいーブイは。そう思いながら、俺はイーブイを氷で冷やしていた。徐々に元の形へ戻っていく。

「……結局どうだつたんだ、パフュームは

「」の世の天国を見ました

「実際に天国に行きかけてたしな。とけて」

「そ、そうだ！ パフューム、どうなりました？」

「サイホーンとアブソルがゅっくり食べててるよ。まだまだ余ってる」

「あ、イーブイ起きた？ 早く食べないと、無くなっちゃうよー。」「……ゆっくりしてていいよ。のこしておくから。サイホーンはまかせて」

「ちょっ、なにそれ！？ 冗談だよ、全部食べたりしないよー。」

「……ふう、よかつたー」

「食べてもいいけど、とけるなよ。」

「氣をつけます」

しかし、LJのパフェ本当にでかいな。無くなる気がしない。  
今のところ、サイホーンもアブソルも美味しく食べてるので、絶対  
LJのこの辺の飽きるからな。

……？

「ん？」

「ドクロッギは食べないのか？」

「これか、だかいじやん」

「ああ」

「甘いじやん」

「ああ」

「太るじやん？」

「……それさ、あいつらの前で言つなよ？」

「ふふん、その辺の気配りもできないなんて、あの子たちもまだ甘  
いね。パフェだけに」

うまくねえよ。

でも、ドクロッギは一応そういうこと薦めてんだな……。ちょっと  
意外だ。ああでも、こいつスタイルいいもんなー。

「それより、シグも食べてみたら？ 美味しーよ、たぶん」

「いい加減なことを……」

でもまあ、確かに頼んだ俺が食べないってのもおかしいよな。

パクッ。

……「うん、うまい。すごくうまい。

「おいしいな、これ。夢中で食べるのも分かるわ  
でしょでしょ？ 分かるでしょ！」

「うんうん、パフェって美味しいもんだな  
私がとけるのもわかりますよね！」

「それは分かんねーよ」

でも、本当においしいな、これ。  
これなら、全部たいらげられるかも

無理でした。

サイホーンもアブソルもイーブイも俺も、額を押されてパフェを見ていません。

「みんな見えないから分かんないだろ? けど、かなりシユールな光景だよこれ?」

ドクロッギの声が聞こえてきた。

「……シグ、食べないの?」

「食べない。俺はもう無理。お前らしさ、最初の勢いはビリしたよ」

「……ダメ、ムリ」

まだ、盛り上がりがつてるとこが無くなつたにすぎない。ソフトクリームで言えば、これからコーンだ。マジできつい。

「……ドクロッギは食べないのー?」

「私は食べないよー?」

くそ、少しくらい食べるの手伝つたつていいじゃないか、ドクロッギめ。

「……私は、まだ食べれますよ」

「イーブイ? 大丈夫?」

「ええ……だつて、もつたいないじゃないですか。こんなつ……こんな、美味しいものを、残すなんて」

無理してる。

確実に無理してる。これ以上食べたら、お腹壊すだろ、絶対。

(……ドクロッグー)

ちらり。

にやり。

「ねえねえイーブイ」

「なんですか?」

「力・口・リー」

「つ!」

その時、イーブイに電流走る。

正確に言えば、イーブイ・サイホーン・アブソルに電流走る。

「……も、もつたいないけど、残しましょうか!」

「そうだな、十分食べたよな、俺達!」

「サイホーンもアブソルも、異論ないよね!」

「う、うん」「……うん」

結局、俺達はそのままカフュを出た。

「うーん、久しぶりの外ですね……!」

「大げさすぎだろ

開口一番これだ。本当は限界だったんじゃないのか。

「さあ、次はどこ行きましょうか?」

「次はポケモンジムだな」

「えつ」

「えつじやねえ」

この街に来た目的を忘れてやがったなこいつ。

「ジム挑戦にあたって、ある程度ドクロッギーのことも知つておかなくちゃなんないし、まずはどこかの草むらで特訓といくか! さあみんな、観光はこれまでだ!」

「」「」「ええ……」「」「」

いかん、みんなの士気が思いつきり下がってる。アブソルまで不満を漏らす始末だ。

これはなんとかしないと……。

あ、

「ブースター、頑張ったな! レインボーバッジゲットだ!」

「あはは、ありがとーマスター!」

さつきのカップルと、またすれ違つた。

どうやら、レインボーバッジ……タマムシジムのバッジを、手に入れたばかりらしい。はしゃぎながら、俺達の前を通り過ぎていった。

「…… もーてみんな。今までどおり、あのカッフルのまねっこじこ

いじりか！ なあサイホーン！」

「うひ……」

「な、イーブイ！」

「う~ん……」

「とうわけレツツゴー！」

たまにはあのカッフルにも感謝だな、うん。

さあ、特訓特訓！

パフュ。（後書き）

サイ「ねえシグ？」

シグ「なんだ？」

サイ「シグはメインの一人称だし、アブソル、ドクロッグも一人称やつたし、今回でイーブイも一人称やつたよね？」

シグ「まあ、そうだな」

サイ「なんで最古参の私の一人称がないの？」

シグ「それはほら、アレだ、お前何にも考えてないだろ」

サイ「なにそれひどい！？」

ホントはちょっとだけ出てます。

まさか、作者自身も忘れてたとは言えないなあ…

**裏来。（前書き）**

遅くなつて申し訳ない。  
でも評価は上がつたようだし、皆さん見捨てずにしてくれてありがと  
うございました。

「ねーアブソル、もうちょっと早く行こうよー」「ショウジのうんどう、ほんとはからだによくない」「おお？ アブソルちゃん物知りだねえ！ ところで、人とポケモンは抱きしめられると幸せな気持ちになれるっていうのは知ってる？ 知らないなら実践してみせようかー？」

「……幸せな気持ちになれるからこそ、大切な人としかしちゃいけないんだよ」

「えー？ 私のこと大切だよねー、アブソルちゃん！」

「…………た……たいせつ」

「…………どもつた。あのアブソルちゃんがどもつた」

「お前らさあ…………テンショントン下がつてた割に元気だよな」「さすが山育ち、と言わざるを得ない。イーブイは少し疲れ気味。もちろん人間スペックの俺も疲れ気味だ。

「ねーねーシグー、今回はバーベキューするの？」

「いや、さすがに毎回する余裕はないな…………。今回は、普通にお弁当」

「シグが作ったのつ？」

「俺に5人分の弁当を一晩で作る技量は無い」

「ええー、買ったの？」

手作り弁当に憧れるのは分かるけどさ。

「 セー、歩く歩く。歩いて疲れりやどんな弁当だつて美味しいぞ」「 美味しいとか美味しいとかじゃないとかじゃなによー。シグはわかつてないなー！」

ポケモンに入間の文化を分かつてないと言われるとは……。

「 とにかくなー、俺はお前らのお父さんじやないんだから、お弁当まで見きれません！」

「 あつらひあ～ん？ シグがお父さんなら私がお母さんかなー？」  
「 ままでするのか？ お前意外と子供っぽいんだな」「 ケロッ…… 今日のシグつまんない」

「 お前が俺と何田過いしてるつて言つんだよ……」

「 さあ～………… 107日くらいかなあ？」

「 なんでだよ。一年ゼンとか一日しか過いしてねえよ」「 マジでつ？」

まあ、その気持ちは分かる。ほんと、今日は濃い一日だったからな。  
…… つか、その生々しい日数はゼンから出てきたんだよ。

「 でも、シグはどつちかつていつとお母さんだよねー」「 どつちでもよろしご。セー、歩くぞー。何はともあれ、まずは上を田指せ！」

「 最後尾の人人に言われても説得力無いなあ……」  
そんなこといつたつてしまふがないぢやないかア。人間なんだから。  
みつを。あれ？ 違つたつけ？

「今回はどうぞくらべ歩くのー？」

「山じやないから、特にどこまでついてことはないな……。でも、もう少し人がいないうなとこまで」

「まあ、人気のない所に連れ込むなんてシグつてばダイタン」

「俺、そんな巨入じやないよ？」

「シグ、それタイタンじやない？」

ギリシャ神話はポケモン世界にあるのか。ホント不思議な世界だ。つか、そもそも金が円単位だもんな。

「ち、もつすべ野原地につくはずだ。アブソルも言った通り、食後の運動は体によくない。それで今日は、例のキャンプセッターでお泊り」

「お泊り!? ほつぼーう、ステキなふいんきの言葉だね!」

ふんいきな。ドクロッギのことだから、いささか心配だ。それとお前テンション高いなオイ。あ、いつものことか。

「じゃあ、今日は別に何もしないの?」

「ああ、そうだ。今日はみんな、一日頑張ってくれたしな」

「ケローウ、そだねつ! ロケット団撃退やら、パフェ大食いやら大変だつたし!」

ロケット団とパフェを並べるか……というか、お前パフェ食べてねえだろが一片たりとも!

「じゃあ、もう少し速めに歩きますか……パフェ食べ過ぎて、苦し

いですけど

「うん、がんばろう

「はは、俺も頑張るか

…

俺が歩みを速めたとき、

口ロス。

恐ろしく、不気味な声が聞こえた。

「シグツ、伏せて！！」

次に聞こえたのは、ドクロッギの、ポケモンタワーで聞いたような声。

不気味な声が聞こえていただけに、俺は咄嗟に伏せた。

といひながら、

俺は吹つ飛んだ。

「なつ……なつ！？」

「シグッ！　　イーブイちゃん、シグをお願い！　苦しいとか言つてたけど、動けるね？」

「そ、それくらいの自制力くらいあるー。わかった、シグは任せて！」

イーブイが、吹つ飛んで近くの木にぶつかつた俺に近寄つて来る。

危険だ！

「戻れ、イーブイ！」

「え、ちょっと！？」

その瞬間、イーブイが今までいたところを、凄まじい速度の水が光

線のように通り抜けた。木々が次々に倒れていく。

……これの余波で、俺が吹っ飛んだんだ。あぶねえ、これが当たつてたらまず生きてなかつた。

「……つドクロッグ、原因は分かつたか！？」

「シグの考えているとおり、ポケモン！ その川から狙撃してみるとみたいだね！」

「わかったありがとう！ サイホーン、アブソル、伏せて攻撃を避けろ！ 木の後ろに隠れるんじゃ駄目だ、木ごと吹っ飛ばされる！」  
まったく、口ケット団の後は、野生のポケモンか……しかも、これはやばい。

サイホーンと初めて会った時と、感覚は似ている。だが、あの時サイホーンは無邪気に遊んでいるだけだった。

今回は勝手が違う。はつきりと殺す氣でこちらを狙っている。

……だが、怯えてはいられない。今回は仲間のポケモンだつているんだ。しっかりと伏せて、近くの木にしがみついた。

ツ！！

再び、俺の頭上を水のレーザーが通り過ぎる。

何度も攻撃されたが……これは、ハイドロポンプか？ 威力120の、水タイプの主力技で、数多くの水タイプが覚えられる技だ。これだけだと、特定はし辛い。

「サイホーン、アブソル、無事か！？」

「うん！」 「なんともない」

よかつた、二人は無事だ……。とにかく、サイホーンだけは早くボールに戻さないと！ 水タイプ技、それもハイドロポンプなんて大技受けたら、生死すら危ない！

「今の内に戻れ、サイホーン！」

「…………わかった」

もう少しづがまま言うかと思つたが、素直に了承してくれた。ありがたい、サイホーンも少しずつ成長してるんだな。……つと、今はこの謎の襲来者について考えないと。

「ドクロッギ、アブソル、お前らの能力で、敵がどこにいるか分からぬいか！」

「川に潜んでいるっていつ以上には、何も分からぬいよ！」

「…………めんなさい、わたしもそこまで」

川に潜んでいる……まあ、ハイドロポンプを覚えていい時点では水タイプのポケモンだろう。しかも、何故かは知らないがひどく人間を

憎んでいる様子だ。

「……あのさ！ 誰かは知らないけど、出できて、いらっしゃよー。 私たち、そんな悪い奴らじゃないから！」

ドクロッギが叫ぶ。

確かに、有効かもしない。ポケモンを乱獲しようとする悪人だと勘違いしているだけなのかもしれないからな。

彼女が叫んだ数秒後に川の辺りから、ざば、と何かが上がって来る音が聞こえた。

ぺたぺたと、裸足でじゅうじゅうに近づいてくる。

そして、

空気が凍りついた。

襲撃者の姿が見えた瞬間、はつきりとドクロッギがたじろぐのが見えた。怯えたといつてもいいかもしない。……おそらく危険予知の本能だろうが、1・2秒ほどだが身を震わせた。

アブソルも同じだ。いや、彼女に至つては、先程から一步も動けないでいる。

「…………あ、り、ひ、可、愛、ら、し、い。ス、タ、ー、マ、リ、ー、ち、や、ん、だ、つ、け？」

「…………」

「無視ですか」

襲撃者は、ドクロッグと同じかそれ以上の年といったくらいの女性だった（そんな人に可愛いくて言うドクロッグはどうなんだろうか）。紫色の髪に、紫色の服を着ている。ドクロッグの言った通り、スター・ミーだ。同じ種族であるカスミのスター・ミーはどちらかというと子供らしくて可愛かったが、彼女は正反対だ。背が高く、何より一睨みすれば人を殺せるんじゃないかといいくらい鋭い目をしている。

「…………あんたらが」

「え、何？」

「あんたらが、ここに殺すの手伝ってくれんなら見逃してやるよ」「不思議なこと言つねえ。ここに守るために私たちは命張つてるのでに」

「…………ドクロッグ、挑発するような真似はやめろ」

「じめん」

一触即発の中、よくもそんな軽口を言えるもんだ。

「つとー、いつわけで、交渉決裂かな？ 悪いけど、少し痛い目見て

もりづよ」

「…………ハツ」

「ケロ？ 何で笑ったの？」

「お前、うよお、どちらが交渉権握ってるのかくらい分かれよ」

「 ッ！？」

一瞬、だつた。

一瞬で、ドクロッギが吹っ飛んだ。木々を倒して、かなり遠くの方まで飛ばされた。

ハイドロポンプじゃない。

「ドクロッギー！？」

返事が来ない。余程遠くまで吹っ飛んだのだろうか。

……これは、

サイコキネシス。

い。  
エスパー タイプの大技だ。……特に、ドクロッグにエスパーはまず

毒・格闘どちらも効果抜群で4倍の威力……ドクロッグは、一番工  
スパー技に弱いポケモンなのだ。

「さあ、交渉決裂だ。悪いがお前ら全員死んでもらう」

?

「……さてな。オレにも分からぬ」  
意味が分からん！ 目的が分からないなら、なんで俺達を襲うんだ  
！？

「まったく、奴が格闘タイプでよかつた。厄介そうな相手だつたらから、真つ先に潰させてもらつたよ。さあ、そこで固まつてゐるアブソルとお前を殺すか。ボールから出さないようにしてたら、殺さずに

「済むかもな」  
.....  
「ボーラーから出さなかつたら、ね。」

「シグ、なに考えているの？　今、わたしをボールのなかに入れた  
らおこるよ」

「ああ、分かつてる」

俺だって、死にたくないさ。死ぬわけにはいかない。

「さあ決めたか？　一人で死ぬか、心中するか」

スター・ミーが、ゆっくりと歩み寄つて来る。……凄まじい殺氣は感じ  
るけど、別に全力で潰しにかかる様子もない。むしろ、ただ苛立  
つて物にあたつてる、って感じだ。

「シグッ……どうすれば、いいの？」

「今は、全力で避けてくれ」

……ハイドロポンプとサイコキネシスだつたら、まだ分からぬ。  
もう一つ、技を出せば、分かるんだが……。  
リスクは大きいが、頼つてみるか。

「アブソル！　相手の攻撃に気をつけながら、かまいたちだ！」

「わかった」

かまいたち。あんまりアブソルには向かない特殊技なんだけど、こ  
の世界では遠距離攻撃ができるため重宝してる。ゲームだと1ター  
ン溜める必要があるわりに威力が大したことないからあまり注目され  
ないんだが、鍛えれば溜めも少なくなるし、威力も上がっていく。  
熟練度システムみたいなもんだ。

アブソルの周りに、円状に渦巻く空気の塊ができる。……見えにくいつてのが弱点だ。相手にも分かりにくいが、自分たちにも分かりにくいデメリットの方が大きい。でも、アブソルもだいぶ慣れてきたみたいで、俺の方には少しも風が来ない。

そして、かまいたちがスター・ミーへ飛んで行った。

近くの草を切り裂きながら、まっすぐ飛んでいくのが僅かながら見える。

「……鬱陶しい」

バリバリバリッ！　と音がして、あたりが白い煙に包まれる。辺りが黒く焦げる。

……そして、何事もなかつたかのように、スター・ミーが再び歩み始めた。

「嘘つ……！？」

「気にするな、アブソル。新しい技を出させたってのは大きい」

今のは、十万ボルト。その名のとおり、十万ボルトの電撃を放つ技

だ。おそらく、電撃を放つて空気を乱し、かまいたちを防いだのだろう。

十万ボルトを覚えている、ってことはだ。

このスター・ミー、やつぱり人に育てられたんだ。しかも、相当の腕利きトレーナーか、……はたまた、

出雲に。

何故かつて？ スター・ミーの、典型的な育て方だからさ。ハイドロポンプ・サイコキネシス・十万ボルト・冷凍ビームつてな。

とすれば、フルアタッカー。アブソルの不意打ちが、必ず刺さるつてことだ！

「アブソル、不意打ちの準備だ！」

「わかつた」

「……ふん」

ビリリツ、と、

先程より数段弱い電気が迸った。

「……あ、あれ？」

アブソルが、いきなり地面にへたり込んだ。

「ど、どうしたんだ！？」

「か、体が、うごかない」

わ、訳が分からぬ。どうこうとだ、…… 麻痺状態？ 電磁波？

「邪魔だ」

そして、スター＝ミーが無造作に空を薙いで、

「 あぐッ！？」

電撃の弾が、十万ボルトの電圧が、アブソルに直撃した。

やつぱり、何事もなによつてスター＝ミーは歩みを止めない。

「……つあ、アブソル！？」

何を思考停止してんだ俺は！ 予想が外れたくらいで！ シグ、お  
前のせいでアブソルが負わなくてもいい傷を負つたぞ、畜生！

「アブソル戻れ！」

咄嗟にアブソルをボールの中に戻した。

…… それでも、何でだ？ 普通、ハイドロポンプ、サイコキネ

シス、十万ボルトときたら冷凍ビームしかないだろ。ふつうそこで電磁波を選ぶなんて、ドラゴンタイプや草タイプ対策ができないし、あり得ないはず……。

……あつ！

代表的厨ポケとはいえ、いつから俺はゲームのポケモンと混同させていた！？

技を4つしか覚えない訳じやない、いくらでも覚えるんだ！

……ああもうひ、こんな切羽詰まつたときに、なんて勘違いをしてるんだ俺！

「覚悟を決めたか？」

スター・ミーの口がゆっくりと動く。彼女は、もうすぐ近くにいた。2・3メートルほどしか距離が空いていない。

そして、俺の周囲には、一人のポケモンもいなかった。

アブソルは大ダメージに加え麻痺状態、ドクロッギは吹っ飛ばされてどこにいるかも分からぬ。サイホーンは相性が悪いし……イー

ブイしか頼れないか。

さつきから言う様に、こいつは全力で俺を殺しにかかる様子は無い。本当にただ当たってる感じだ。気持ちが動搖してるだけなんだろうから、できれば傷つけたくない。……だが、このままでは俺が死ぬ。それもごめんだ。

コンコン、ヒ、イーブイが入ったモンスター ボールを軽く叩く。

「へやあつー

出てきたイーブイが、スター ミーに飛びかかった。

**裏来。（後書き）**

107日：10月7日はケロロ軍曹役渡辺久美子さんの誕生日であります。

蛙つながりです。けろー

「てやあっー！」

出てきたイーブイがスター＝ミーに飛びかかった。

「な……ッー？」

さすがのスター＝ミーも反応しきれなかつたようだ、そのままイーブイと一緒に倒れ込んだ。

「離せよッー！」

「嫌ですー！」

「いいぞイーブイ！　そのまま離すなー！」

しうがない、このまま捕まえるのが確実だ。……捕まえても暴れるようだつたら、仕方ない、ボックスの方で預かってもらひしかないか。

「よしつ……捕まつてくれー！」

モンスター＝ボールを、スター＝ミーに向かつて投げる。あとはイーブイに抑えられれば、捕まえられるはず……！

「捕まつて……たまるかっー！」

なつ……！

モンスター＝ボールが弾かれた？　何にも当たつてないのに？

よく見ると、スター＝リーはイーブイに抑えられながらも右手だけ空いていた。

「しまった、サイ！」キネシスか……！」

「あつ……」「めんなさい」

「いや、いい。そのまま頑張って抑えてくれ！」

イーブイがスター＝リーの上で押さえていれば、スター＝リーも技をイーブイに撃つことができないはずだ。

……でも、このままじやじり貧だな。もし振りほどかれたら……

つて、待てよ。

もしかして右手が空いたこの状況、俺が一番危ないんじや

「うわああああああつ！？」

「マスターっ？……あれ、マスター＝リーですかっ！？」

イーブイの声が僅かながら聞こえる。

イーブイ、俺はお前の上だ。

30mくらい。

ポケモンって、本当に人間にとっちゃ驚異だな。  
まさか、サイコキネシスでここまで上空に飛ばされるとほ。

しかも、鋭そうに尖った木の真上。

ああ、

俺死ぬのか

「よ、っと。うわっ、シグ軽っ」

何にも刺さぬ」となく、

俺は、何かに受け止められた。

「……てっきり氣絶してゐるかと思つたよ、ドクロッグ

器用にも彼女は、尖つた木の上に器用に立つて、俺を受け止めていたんだ。

「ふふーん、私はそんな瞞ませ役やらないよ。私はむしろ大役を苦勞せずかつたらう、いわば白馬の王子様かな?」

「はは、お前らしきな。だけど苦労はしてもらひ。……イーブイに加勢してくれ」

「りょうかーーー!」

「……つか、この体制は、ひょっとして、お姫様だっこか? うわー……なんだか嫌だ。男としてのプライドが傷つくな、なんて言ってられないか。

ドクロッグに地上に戻され、やつと足をつぶ。……まだ若干震えるけど。

「ドクロッギ、早く……！ もう抑えてるのも限界！」

「別に抑えてなくてもいいよ？」

「えつ？」

「シグ、イーブイを戻してあげて」

「あ、ああ分かった…… 戻れイーブイ」

当然だけど、イーブイがいなくなつてスター＝ミーが起き上がる。

「何だ？ オレに加勢する気にでもなつたか？」

「ならないならない。ただ、一対一の方がやりやすいからさー、格

闘技つて」

「……？」

スター＝ミーが構える。

何考えてるんだ？ エスパー＝タイプのスター＝ミーに格闘で勝負を仕掛けても、不利になるのはこちらのはずだ。そりや近接戦に持ち込めば分からぬが、いくらドクロッギでもスター＝ミー相手にそこまで持つていけないだろう。

それに、意味不明の技宣言。ドクロッギらしからぬ（？）正々堂々な発言だ。

格闘技に何か秘策が……？

あつ、そうか、わざと相手を警戒させておいて、その隙に気合いパンチを

「つ！？ ひ、卑怯者！」  
「川からハイドロポンプ狙撃してくるポケモンに言われたくないな  
あ……ってアレ？ シグどったの？」  
「……いや、お前を信じた俺が馬鹿だったと反省していた

ドクロッギの右手から出た、ソフトボール大の紫色の塊がスターーミーへと飛んでいく。格闘技と聞いてすっかりドクロッギが接近戦を仕掛けてくるものだと警戒していた彼女に、思い切り当たつてはじけた。

……オイコラ。

「なーんちやつてヘドロ爆弾でーす！」

「なんでもー！？ ちゃんと攻撃当てたよ私！？」

もつ「イツには騙されん。

ドクロッグのハッタリにまんまと引っ掛けたスター＝ニーも同じことを考へていてるようで、毒を払いながらもいつそう殺氣が高まった気がする。

「…………」

「あのねえ。相手を殺すことより自分が殺されないことを考えなよ。大体、目に毒入っちゃったでしょ？ しばらくは見えないよー。それとも、心の眼でも使うつもり？」

「つ

「大丈夫だよ。目に入つたつて数時間もすれば治るような弱い毒だから

でもさ、と、ドクロッグは付け加えた。

「 命まで狙つておいて、その程度で帰れるなんて思わないでよ  
ね」  
その瞬間、ドクロッグがスター＝ミーに接近した。今度こそ、格闘技  
を仕掛ける気か。

「せいやッ！！」

掛け声とともに、スター＝ミーの太股辺りに蹴りを入れた。

「 がつ！？」

「ローキック」 相手にダメージを与えて動きも鈍らせるんだから、  
お得な技だよねー」

ローキックか！ 威力60、攻撃と同時に相手の素早さを下げる技  
だ。効果はあまりゲームと変わらないらしいな。

「どうするシグ？ レーナーとしてこの子を捕まへるって言つたら、チャンスだよ？」

「…………そう、だな」

トレーナーとしてではないけど。

あいつは、まだ俺達を殺す氣でいる。そしてターゲットは、口ぶり  
からして俺個人じゃなく人間だ。だから、俺があいつをこのまま追  
い払えば、他の人間も襲うだろ？ そして、いずれは捕まつて、  
殺される。

あまり嫌がるポケモンを無理やり捕まえたくはない。……だが、それが俺達の為であり、自己満足かもしれないけど、あの子の為にもなるな」。

俺は、モンスターボールを投げた。

「……いやだあつ！」

だけど、スター＝リーはまたボールをはじいた。

田もうまく見えないのに、サイコキネシスではじいたんだ。

「嘘おー！？」

「……人間に捕まりたくないっていう、執念だらうな」

「じゃあ、しょうがない。ロー・キックもつ一度して、わらわに鈍らせ  
てから　　」

ドクロッグが、静止した。

そして、そのまま倒れた。

「おい、ドクロッグ！？」

慌ててドクロッグを支える。

「……あー、限界がきたみたい、だね」

「限界……？」

「じめん、シグ。我慢、してたんだけどさあ……むへ、無理みたい

……ああ、そつか。

いくらドクロッグでも、やっぱりサイコキネシスはきつかったのか。  
そりやそうだ。エスペータイプはドクロッグの天敵のようなもんだ  
からな。

「『』めん……先、眠らせて」

「ああ、ゆつくり寝てな」

ドクロッグをモンスター・ボールの中に戻した。

「ツ……ツ……目が見えなくても、人間一人くらい殺せるー。」

「うわっ！？」

手当たり次第に十万ボルトや冷凍ビームを撃ちまくろりやがって、危ないことにの上ない！

「疲労したイーブイと手負いのアブソルじゅ、お前の命は守れんだ  
うひー。」

ん？

「お前、何か忘れてないか？」

「……またハツタリか？」

十万ボルトと冷凍ビームの連撃が一旦止んだが、すぐにまた始まった。

ハイドロポンプとサイロキネシスは集中力がいるのか、使ってくる気配がない。

これならいける！

「大トリは任せた、サイホーン！」

「わたしを忘れるなあーっ！…」

サイホーンが、モンスター・ボールを投げた勢いそのままに、スター  
ミーへと突進する。

「 つ

「三度目の正直だ！」

スター・ミーが倒れたところへモンスター・ボールを投げる。

ボールは、三度揺れ、

動かなくなつた。

「…………はあああ～～～つ

総動員。

俺の手持ち総動員で、やつと捕まえることができた。

……怖かった。

今になつて膝が震えてくる。

「はいシグ、モンスター ボール」

「おお、ありがと」

これでボールの中から出てきて、ボールを踏み碎かれたんじや話に  
ならない。

サイホーンから、モンスター ボールを受け取る。

「……スター ミー、ゲット、だぜ？」

「シグー、自信なさげに言うのはやめなよ」

了承なしにポケモン捕まえるのは、これで一回目か。

なーんか、嫌なんだよな。ポケモンに悪い気がして。

アブソルは、怪我してたところをポケモンセンターで治すために捕  
まえた。

イーブイは、ロケット団から守るために。

ドクロッギは……シンオウへ戻る道中の、観光がてら。

サイホーンは、山では仲間外れにされてたし、スター＝ミーは人間をすげく憎んでるし。

なんていうか、ワケアリなポケモンばかり仲間になるよなー。

「それでどうするのシグ？」

「ん？ あー……どうじょうか」

スター＝ミーを捕まえたはいいが、それからどうすればいいのだろう。サイホーンみたいに、動きが読みやすくて、遠距離攻撃ができる奴ならいいけど、スター＝ミーは違う。

……でも、このままってわけにはいかないだろ。

「……しあうがない、一日出す。サイホーンはボールの中に入つてくれ」

「わかったー」

「待った」

その声は、サイホーンの口から出た言葉じゃなかった。ボールからでてきたドクロッグの言葉だ。

「おい、ボールから出て大丈夫なのか？」

「いやいや、ちゅうとやめと休んだいりこで元気にならぬ若者  
しないよ」

「じゃあ、何で?」

「あのスター＝ミーは危険だよ。私がシグと一緒に見てる  
「……ドクロッギはもう充分頑張つただろ、無理すんな」  
「シグ。卑怯な言い方だけど、シグが死んで困るのはあの子たちな  
んだよ」

「…………」

ホント、卑怯なことで。

なんというか、ドクロッギはふざけてばかりいるけど、シオンタウンでも、さつきの戦闘のときも、妙に誰かを助けたがる、というか、助けることに執着している、というか。彼女には、善意とか仲間意識とか、そういうたものとは違う、何かがはたらいている気がする。

「ドクロッギ、……」「ううう」と呻うつのもなんだかどき

「ん?」

「お前、過去に何かあったのか?」

ドクロッギは、しばらく黙つた。

「……シグ、話をそらしちゃあ駄目だよ」

「お互い様だ」

「……」

ドクロッグが苛立つてゐる。軽口で誤魔化していくつもりだろうが、分かる。

しょ「うがない、ここは俺が引くか。

「分かつた、分かつたよ」

「じゃあ、私にスター・ミーを見張る許可をくれるんだね？」

「ああ、ドクロッグ含め全員をボールから出して話をしよう」

「…………はい？」

「スター・ミーをどうするかつていう大事な話に、俺一人だけが参加するつてのは失礼だろ？からな」

「…………あー、そー」

「というわけで、全員でここに！」

そして全てのボールを、一気に投げた。

……分かつてたけど、みんな傷だらけだ。

「アブソル、一応まひなおしと傷薬かけとくな」

「わかった

「イーブイ、ダメージは受けてないとと思うけど、きずぐすりいるか？」

「いえ、擦り傷くらいならすぐ治りますから」

「サイホーンも大丈夫か？」

「うん！ 私は全然平気だよ！」

「ドクロッギには凄い傷薬が必要だな」

「ありがとねー」

「スター・ミーにも、どくけしと凄い傷薬かけとくな

「……」

「ちょっと待つてシグ」

「え、どうした？」

ドクロッギが手をあげた。

「弱らせたままではいいでしょ！ 回復させる義理がないにあるって

いうのやー！」

「そとは言つても俺が捕まえた、俺の仲間なわけだし。回復させる義理はあるだろ？」

「まだ仲間と決まったわけじゃないでしょーが！」

「分かつてないな。ボールは、人間とポケモンを繋ぐ絆だ。モンスター・ボールがある限りな、俺とスター・ミーは仲間なんだよ」

我ながら、歯の浮くようなセリフだ。

「まったくもー……きれい」と並べたつてどうにもなんないんだからね

まあ、ドクロッギの言い分が正しい訳だけだ。そんなフェアじゃない状態で話したつて、なんの解決にもなんないだろ？ スターミーが、いつでも逃げられるような状況でいいんだよ。

「というわけで、毒消しと凄い傷薬だ。人間が嫌いなら、自分で使つてもいいぞ」

「……毒、といつこともある」

「はは、違うつてことくらいスター／ミーも分かるだろ？？」

「…………ああ、分かるよ」

実におもしろくなさそうな顔で、スター／ミーは答えた。

彼女は、様々な技を覚えている。あれだけの技を覚えるのは、トレーナーがいないと無理だ。形はどうあれ、もともと彼女は誰かのポケモンだった。

だから、どくけしや傷薬なんてトレーナーアイテムを見たこと無い訳がない。

「人の親切ぐらい素直に受け取つとけ。もらえるときこそもうひとつかなきゃ損するぞ」

「……ふん」

あ、そんなふんどらなくとも。

スプレー状のどくけしと傷薬を、自らに吹きかける。うーん、これ

で傷が治るんだから不思議だ。何度見てもよく分からん。

「言つておぐが、オレは今の一瞬でもお前らを殺すことができるんだ。それを分かつてゐるのか？」

「そんなことも分からなきや、今頃俺達はお前に殺されてるよ」

「……だつたらなんで」

「だーかーらー、お前は俺達の仲間なんだから、治すのは当たり前だろ？」

今度は黙つてしまつた。なんとも複雑な顔をしてゐる。

……「へーん、困つた。

何があつたかは知らないけど、予想以上に人間を憎んでるみたいだ。というより、「人間は悪」だと思い込んでる、といった感じかな。今のところ敵意は感じないけど。

「……あのさ！ その、人間はみんながみんな悪いってわけじゃないんだよ！」

「サイホーン？」

意外なことに、サイホーンが説得を始めた。このことは苦手だと思つていたけど……というか、そもそもスター＝ニーのことが、本能的に苦手みたいだ。さつきからちょっとおどおどしてゐるし。でもまあ、俺達とスター＝ニーのことを想つて、思い切つて発言して

くれたんだよな。ちょっと、我が子を見守る気分だ。」じいは、黙つておこづ。

「だとしても、オレは悪い人間しか見たことがない。だから、オレは信じない」

「だつ、だから、それは……！」

まあ、でもやつぱりそれ以降となるとつまづく言えないよなあ……。

「お前らだつて騙されているなんて可能性は、考えたことないのか？　ただ自分たちが利用されているだけだと、そう考えたことは」「いやつ……ち、ちがつ……！」

「何が違うんだ。結局、お前ら人に飼われてるポケモンってのは、何も考えずにトレーナーの言うこと聞いてるだけじゃないか。お前たちが想つていてるほどに、トレーナーはお前たちを想つていらないんだよ」

「ふえつ……ち、ちがうもんつ……！　そんなこと、ないもん……！」

「はいはい、そこまで。小さな子をいじめちゃダメだよ」  
泣いているサイホーンを、ドクロッグがフォローする。

！

「ありがとな、サイホーン」

「……ごめん。ぜんぜん、分かつてもらえなかつた」

「大丈夫だよ。……ちゃんと、分かつてもらえてるさ」

「まつたく、小さな子泣かして何が楽しいのさ」

「教えるだけだ。人間にいい奴なんていない、って現実をね」

「自分の常識の押し付けは良くないねえ」

「経験則さ」

「同じようなもんだよ。井の中の蛙、大海を知らずつてね」

お前が言つか、つて、前も同じことを言つたよつな。

「おおかた、トレーナーから酷い目に合わせられて逃げてきたってことでしょ。どうしていいかわからず逃げ回つたあげく、闇雲に自分を酷い目に合わせた人間に仕返しを……とか、そんなシナリオかな？」

「ちょっと、ドクロッグ……！」

イーブイが制する。

……ドクロッグの、すぐ挑発する癖はどうにかならんもんかな？

「まあ、間違つちやいない。少し混乱していたのも認めよう。……だが、別に酷い目に遭つたってわけじゃない。ただ、嫌気がさしたのさ」

「嫌気がさして、人間を殺そうとする程混乱するの？」

「少し違うな。オレが混乱していたのは、それとは無関係……といふわけじゃないが、とにかく直接関係ない」

「ケロ？ ジャあ、なんで？」

「…………」

再び、スター・ミーが黙つた。

「……なあ、よければ教えてくれないか？　何があつたのかさ」

そして、一瞬で俺が発言した。

スター・ミーが、何で逃げてきたのか。何で俺達を襲つたのか。  
その理由を知ることは、こいつのトレーナーとして必要不可欠だろ  
う。……まあ、話したくないならしょうがないとして。  
でも、多分教えてはくれないだろうな……。

「いいよ、話してやる。話したら、少しは心が軽くなるかもしれない  
いしな」

だけど、意外にもあっさりと彼女は了承した。

**反撃。 (後書き)**

スター・ミーは擬人化しても性格が掴みにくいです……何色にも染まるのでしうね。

スターIIーの記憶 前編（前書き）

またしばらく更新できないかもです。

## スターIIーの記憶 前編

オレが言うのもなんだが、これでも昔は普通のオンナノコだつたんだ。

この辺のくわせひらかわ川で、よく友達と遊んだもんね。

ここいらはあまり人が来なくてな。その代わりたくさんの中が集まつてた。その時は知らなかつたが、それこそ、海を越えた方にこるはずのポケモンもここにいたらしい。

名前を覚えている奴で、ニャース、オタチ、……それにコドラもいた。ああ、お前と同じ、イーブイもいたよ。あの頃は、……なんというか、毎日が輝いてた。充実していた。幸せだったんだ。

「ちよっと、スター＝マーでばー..」

「うわっ……あれ、ええっと、どうしたのコドリ?..」

オレは、物凄い勢いでいたときからスター＝マーだった。何故だかは知らないが、きっと川の底にでも水の石が落ちていたんだろう。

「どうしたのほひつけのセリフだよ、せつきからぼーつとして。かくれんぼをやるひつて言つたのはスター＝マーなんだからね..」

「あ、うん、『メン』

「ほらほら、わひと遠くに行こう!..」

コドリはオレの親友だった。いつも一緒に遊んでたよ。逃げる時も隠れる時も一緒だった。当時のオレは気が弱くてな、一緒に

あの日も、いつもと変わらず……かくれんぼなんかして遊んでいたんだ。その日、私は、嫌な予感がしていたんだがな。皆を遊びなんか、誘うべきじやなかつたんだ。

「ねえ、街が見えてきたよ……。」

「うわわっ、ホントだ。ちょっと遠くに来すぎたね。ショウがない、  
ちょっと戻る?」「

人里に近づきすぎて、引き返そうとした時だった。

「…………ねえ、ちょっと?」

「何、スター? 早く戻らないと。街まで来ちゃったら、お母  
さんに怒られちゃうよ!」

「…………あれ、なんだろ?」

黒い塊が、こちらへ向かってくるのが見えた。

初めは、またタマムシの連中が勝手にヘドロでも流したのだろう、  
と思った。

だけど違う。液体があんな動きする訳ないし、そもそもヘドロを流  
すんなら川だ。道にそのまま流したら、さすがに人間だつてたま  
つたもんじゃない。

じゃあ何だろう、と思って、

ようやく、それがおびただしい数の、黒い服を着た人間だと気付いたんだ。

「……ツ！－－ 逃げよう、スター＝－－－ 早く、早くみんなに知らせなくちゃ！」

「う、うん！」

そりやもう、一目散に逃げた。人間が一人一人でポケモンを捕まえに来たことなら何回かあるが、あの人数となると、この周辺のすべてのポケモンが捕まつてもおかしくない。それか、このくさむらのボス……ボスゴドラを捕まえに来たか。『大量乱獲は禁止』『山海等のリーダー的存在のポケモンは、私的理由で捕まえてはならない』これらの法は、子供のポケモンだつて知ってる。これらを破る人間たちに関しては、例外で野生のポケモンが人間の法にのつとつて訴えることができる。

「あ、『ゴドラとスター＝－みつけ……』

「そんなこと言つてる場合じやない、人間が僕等をらんかくに來たんだ！」

「ええつ！？」

「……ところで、『らんかく』ってなに？」

「え？ ええつと、それは……とにかく、お母さんに知らせてくるよ！ みんなは隠れて！」

「わかった！」

……まあいくら子供でも知つてゐる法律だからと言つて、言葉の意味が分かるつてわけじやなかつたんだけどな。

呼ばれたボスゴドラは、何人かの幹部と共にやつてきた。その中には、俺の母もいた。それと、シャワーズだつたかな。

しばらくして、大勢の足音が聞こえてきた。

近くで見ると、奴らの胸には『R』のマークが入っていた。

……人間なら分かるだろ？ 口ケット団さ。

奴らは、当時のオレたちのボス、ボスゴドラを見て、ボスだと気付いたのかそこで止まつた。

「……どういふことだ、人間。」このよつな小さなくさむりで乱獲行為など。お前たちは、たしか口ケット団とかいつたか？」

「あー、そうだよ。最近ボスになつた出雲だ。」こらへんじやイーブイも出るつて聞いたんでな、乱獲させてもらひ」

「そつはいかない。イーブイも私たちの大切な同胞だ、乱獲など許さん」

「あーそつかい、まあどうせお前も捕まえるんだけどね 」

「……どうしました、出雲様」

「…………お前たち、乱獲は中止だ」

「えつ？」

「法に触れるのは、できれば避けたい。そりだらうへ。」「ええまあ、確かにそうですが……」

そいつは、何が見えたのか、不敵に笑っていた。ボスゴドラでもなく、周りの幹部でもなく。

オレと、ボスゴドラの子供、ゴドラの方を見て。

「……どっちとも。理由は分からねえが、この世界じゃ奇跡の他ない。神様からの、口ケット団ボス就任記念つてことかねえ」

「お前が神様から好かれる男とは到底思えん」「ちがいない」

口ケット団のボスは、わけがわからないことを呟いていた。ボスの横にはウインディもいた。ボスの方は笑っていたが、彼女は面白くなさそうな顔をしていたのを覚えている。

「決めた。乱獲はやめだ。その代わり、そのスター＝ニーとゴドラをいただいていく」「なつ！？」

それでボスはオレとゴドラを捕まえよつとしたんだが、もちろんあいつの母であるボスゴドラも、オレの母であるスター＝ニーも黙っちゃいなかつた。

「ま、待て！ お前たちのような悪党に我が同胞は預けられん！」  
「おこおこ、俺達の制服は確かに真っ黒だが、別に悪党と決まったわけじやないだろ」

「……ロケット団の悪名、この辺境にも届いている… 誤魔化する…」

「知ってるかこの世には正義も悪もないんだぜ」

「どのような言葉も所詮は詭弁にすぎん！ ポケモンの悪用は人間とポケモン共有の法律でも禁止されている…」

ボスは、眞面目のかふぞけているのか分からぬことばかり言つてはぐらかした。

「……で、だからと言つてどうするんだ？ お前に合わせて法律で言つたなら、『リーダー的存在のポケモンは、いかなる場合においても人間を傷つけるのを禁ずる』はずだう？」

「……私が、なんとしても守ります。私の娘と、ボスの子供を渡すわけにはいきません！」

「ほほう、あんたの子供だったわけか。そりや必死になつて止めるわな。なるほどなるほど、子供なら、突然慌てて止めるのも無理はないな。群れにいる他人ならともかくな」

「あつ、ひ、ひのひ…」

とここん嫌な性格をしていたよ、ロケット団のボスは。

オレの母も加わって、しばらくは論争だった。オレはそこまで詳しく法律を知らないから、あまり会話の内容は覚えてないが。

「……はあ、これじゃ水掛け論だ。ポケモンを説得するなんてのは、やつぱり性に合わねえ」

「おい、出雲……！ もうやめにしたらどうだ」

「そうはいかない、一匹の $6\vee$ が並んでるなんて、この先十年経つてもあるかどうか。個体値の研究も充分に進んでねえんだ、このチャンスは逃せない」

「だからと言つて、無理やり親子を引き離すのは……」

「ワインディ、人もポケモンも皆等しく親を持つてる。俺がポケモンを捕まえるにしたつて、それは親の前か親の見えない所か、それだけの違いさ」

「また、そいやつて屁理屈を……！」

「大人なんてのは屁理屈だらけさ。重箱の隅をつつき合つて、先に何か見つけた奴が、いつの間にやら論議の勝者になつてるわけだ。俺は苦手だがな」

この出雲つて奴、なかなか偏屈でな。ああ言えどこう言つて、話が見えなかつた。その上、面倒になつたら力ずくで解決するんだから、そこらへんの偏屈よりよっぽど厄介だ。

「埒が明かないから、ワインディ、適当に弱らせてくれ。ただ捕まえるだけなら、法には縛られないからな。別にいいだろう？ あ、お前らもう帰つていいよ。さつきも言つた通り、乱獲は中止。本部

へ戻つて、野生のポケモンの一匹でも育ててな

ロケット団が大量にいたのはやつぱり乱獲するためだつたらしくて、乱獲をやめると決めたボスは、他の下つぱ共を帰らせた。

「……しょ‘うがない」

弱らせる、と命令されたウインディイが、ゆっくりオレたちに近づいてきた。だけど、まつたく殺氣は感じなかつた。今思い出してみると、むしろ、子供を優しくなだめるような雰囲気だつたな。あのウインディイは弱らせる気なんてなかつたんだんだが、当時のオレ達には当然知る由もなく、ただただ怖くて怯えてた。

「ひいっ……！」

「怯える必要はない。……君たちに痛いことなどしないよ。ただ、聞いてほしいんだ。ここの中も、聞いてはくれないだらうか？」

「…………？」

「おこ、ウインディイ？」

「確かにロケット団は悪名高いことで知られている。だが、つい最近、そこにいる出雲が新しいロケット団のボスとなつたんだ。彼は、きっと何らかの形でロケット団を変えてくれる。その権力を利用して、じゅうやって強引に乱獲をしようとするような乱暴者もあるが、優しいところもあるんだ」

ウインディイは、私たちを説得しようとしたんだ。あの男のよきを並べて、納得させようとした。

「ポケモンに対しても少し手厳しいこと、冷淡なこと、強引なこと嫌味なこといい加減なこともあるが、その、自分で捕まえたポケモンは、責任を持って育てる奴なんだ。奴なりの礼儀を持つているんだよ。……だから、というのもおかしな話だし、もちろん皆と別れるのは嫌に決まっているだろうが……懸けてみてはくれないか、この男に」

「…………」

何も言えなかつた。彼女は冷静さを取り繕つてはいたが、すごく不器用に、若干照れながらすぐ後ろの男の良いところを言つていくんだ。

子供心に、「ああ、ウイングディはこの人が好きなんだな」って気付いた。

でも、それとこれとは全然違う話だ。

「し、しかしだな…………！」

「ボスたるものが親バカとはいねえな」

「出雲は茶々を入れるな！！」

「はいはいー、わかつたわかつた」

「まったく…………！ あ、えーと、それでだな、本当に普段はこんな偏屈な軟弱者なのだが、いざという時はポケモンを守ってくれる、根は、根は優しい奴なんだ。確かに出雲は厳しく、何度も辛い想いはするだろうが、あいつはポケモンを見捨てたりせず、どんなポケモンも強くなるよう育てるんだ」

捕まつてもいいかもしない。

そう一瞬だけ、確かに思ったよ。一匹のポケモンがこれほど好きになる人間なら、信頼できるかもとな。

だが、所詮それとこれとは全く違つことだった。

「えつ……ー?」

その瞬間、あいつ以外の全員が固まつた。

私たちは オレ達は、ボールの中に捕えられたんだ。

ウイングディが話している途中でな。

油断していたオレ達は、たやすく捕まつた。

「よいしょっ、と……これで一匹とも捕まえられたな

ボールの中から、あいつがボールを拾うのを見た。

「出雲つ……お前ー!」

「あれ? 話して油断しているところを捕まえるつて作戦じゃなかつたのか?」

「……お前たち、最初からそのつもりだつたのか!」

「違う! 私は……本当に、嫌がつて いるポケモンを捕まえるなんて嫌だつたから……!」

「ヒームドオー」

「はい、何でしちゃう、主人」

気付くと、あいつは違うポケモンを出していた。

「そらをとぶ、だ。本部へ戻るぞ」

「はい」

「せらむらや川から、様々なポケモンが出てきて、生きて帰すこと

近づいてきた。

「ぐつ……すまない！」

やがてウインディは諦めて、パツと消えた。どうにかして移動した  
んだろう。

「おー、相変わらず速いな。早くしろとは言ったが、俺たちより早く行く必要はないのに。なあ、スター＝ミー、『リカラ』

空の上で、あいつはオレたちに語りかけた。

それから、ロケット団での生活が始まったんだ。

スター＝マーの記憶 前編（後書き）

回想が入つたらワンドピース並に続きます。

久しぶりにウインディ書けたやつほう

## スター＝ミーの記憶。後編（前書き）

重要な所を書き忘れていました。

既にみた人はもう一度流し見ておいてください。

## スター＝ミーの記憶。後編

ロケット団に入つてからは、文字通り毎日が戦いだつた。

毎朝5時起きで、すぐに朝食。食事を終えたら、30分後にランニングと準備運動。そして実践訓練だ。

本部に入った直後に、オレはわけのわからない機械で、頭の中をかき回された。技マシン、とかいう、見かけはただの円盤なんだが、それに触ると気持ち悪くなつて、頭の中に無理やり記憶を植え込まれるような感覚がする。

それが数秒続くと、またわけのわからないことができるようになる。電撃を撃てたり、氷を放てるようになつたり、いろいろだ。人間の科学力つてのは、まったく、本当にわけがわからない。

士気向上のためか、実践訓練でいい結果を出していくと待遇が良くなつていく仕組みになつていた。ランキング100位以内のポケモンは個人で行動できるようになる、10位以内は個室、とかな。オレは元から強かつたから、はやい内から個室がもらえた。コドラもだ。

最初の内は、帰りたくてたまらなかつた。だが、それも三ヶ月したら慣れた。

一年したら、他のポケモン達とも仲良くなれた。

一年したら、とりあえず訓練を頑張り始めた。

三年したら、うまい具合にサボるコツを覚えた。

そして、四年したら生活が嫌気がなってきた。

「そー、何をほってんだ!? たらたらすんなよ、昼飯抜くぞ!」「す、すいません!」

驚くべきことに、訓練中のポケモンの管理はすべて出雲がやっている。こればかりは、出雲でないとできないだかなんだか、言つていいた氣がするな。だからたまに田を盗んでサボることもできたんだが。確かに、この集団は揃いも揃つてエリートばかりではない。といふか、むしろ使い下り端の方が多い。

だから、抜け出すことができたんだがな。

ある、夜のことだった。オレが、もうぐっすりと寝ていた時だ。

「スター!!」

「うわっ……！ だ、誰？」

誰かが、小声でオレを起こした。

「私だ、ウインディだよ」

「あ、えつ、ウインディ？　今まで一体どこで……？」

ウインディだった。

彼女は、オレが入つてからもしばらくはロケット団の中で出雲と行動を共にしていたんだが、いつだつたか急にいなくなってしまったんだ。あまりに急だつたし誰も何も言わないから、自然と忘れかけていたんだが……その彼女が夜中に私の部屋に来たんだ。

「すまないが、理由は言えないんだ。そりだ、『ボスゴドラ』は？　個室の方か？」

「あ、はい、『ボスゴドラ』なら、個室です。どこかは分からぬけど」

「……ああそうか。そうだな、進化していったつておかしくない。まあ、それはいい。言っておかなければならないことがある」「ただごとではない雰囲気だった。眠氣もいつのまにか吹き飛んで、話を聞いたよ。

「……出雲が、お前たちを一軍にしてじつといふる」「えつ！？」

一軍。

それは、出雲が正規で使う6匹の精鋭のことだ。

ここで育てられたポケモン達の、ゴール地点とも言える場所だった。

だが、それはここで生まれ育つたポケモンか、馬鹿真面目に頑張ってるポケモンだけだ。オレのように、隙あらばサボるような奴をしてみれば、そんなのたまたまんじやない。

「そ、そんなの嫌ですよ…」

「ああ、……お前ならそうだろうな。とにかくだ、出雲の一軍になってしまえば、常に出雲の傍にいることになる。そうなつたら手遅れだ。だから、その前に逃げる」「に、逃げる、って？」

ウインディは、そこで紙を取り出した。

「……非常用の避難経路だ。非常出口の位置はポケモンには知られてないが、そこから外に出ることができる。鍵は壊しておいた。メンテナンスなんてほとんどしないから、しばらくは気がつかないはずだ」

「えつ……それって…」

「そう、外に出られる。ロケット団から解放されるチャンスだ」「で、でも、ボールが…」

そう、ポケモンってのは、一度ボールの中に入ってしまえば、相手の言葉一つで強制的にボールの中に戻ってしまう。それが壊されない限り、とても自由とは言えない。

「心配ない。ほら」

「あ、それ…！」

ウインディは、手にモンスター・ボールを持っていた。

「それ、私のボールですか？」

「ああ。幹部が持っていたから、適当に氣絶させて奪つておいた。  
……これを壊すのは、このモンスター・ボールに縛られたお前自身が  
やつた方がいいだろ？」「わ、分かりました」

オレは、急いでボールを手に取った。

モンスター・ボールは、いとも簡単に壊れた。

「よし、これで安心だな」

「でつ、でも……何で、私を？」

「……いろいろ、理由はある。とにかくだ、明日の朝、ボスゴドラ  
を起こして一緒に逃げる。夜に部屋から出たら怪しまれるだろうか  
らな」

「わ、分かりました」

「すまない、まだ行かなければいけない所があるから、私はもう帰  
るよ」

ウインディは、避難経路の地図を渡して、すぐに出て行ってしまった。  
た。だけど、彼女はどうしたとか、そんなこと考えられないくらい  
にオレは興奮してた。

それくらい、願つてもない幸運だつたんだ。すぐこでもボスゴドラ  
にこのことを伝えたかったが、確かに夜に部屋を出て怪しまれるの  
は避けたかったから、我慢した。興奮して中々寝つけなかつたが。

そして、朝になった。

「 ハハヂカラ、あ、いやつ、ボスゴヂカラー。」

「 うわ、何だ！？ ……あれ、スター三一、久しづつ  
「 す」い、す」いものをもらつたのー。」

「 ど、とつあえず落ちつけってのー、肩をゆするなー。」

「 あ、「めん」

オレは、誰よりも早く起きて、ボスゴヂラの部屋を訪れた。まだ寝てゐたが、そんなことおかまいなしに扉を勢いよく開けて飛び込んだ。  
まあ、なんだ、それくらい興奮してたんだ。

「 それで、何だよこんな朝早く」

「 これ見てよ、これー！」

「 ……？」

ボスゴヂラにも、その避難経路図を見せた。

「 避難経路の道が書いてあるんだよ。これを辿つて行けば、外に出られるー。」

「 えつ……えつ？」

「 私たち、出られるんだよ、外にー！」

「 な、何言つてんだ、スター三一？」

「 だから……」の口ケット団から逃げることができんだって

「

「そんなことにして何になるんだ?」

「……えつ?」

しばらく、それがどういふ意味だか理解ができなかつた。それ以前に、思考が停止していった。

「いやつ……だから、私たゞ、このままじや、一軍になつちやうから……その前に、逃げなきや……」

「えつ、一軍に!?」

ボスゴーデラが驚いて叫んだ。

でも、それはオレと同じ意味じゃない。

喜びの叫びだつた。

「マジかよー、俺、ずーっと頑張つてきたけど、まさか一軍になれる日が来るなんて……」

「ね、ねえ、ボスゴーデラ、……」

「ん?」

「あんた、一軍になりたいの……?」

「せりや、ソレで訓練している全てのポケモン達の目標なんだから、なりたいことを叶つてみるだろー。」

「……」ソラは、頭が理解してしまった。

ボスゴードラ、ソレでロケット団に

「……なに、何なの！？ ボスゴードラ、ソレでロケット団なんかの為に働いて悔しくないの！？」

「な、何だよ？ 別にいいだろー。今の俺達は、ロケット団の為に戦うのが目的なんだからさー。」

「むりやり、みんなと別れなきゃいけなくなつたんだよ？ みんなみんな、ロケット団の仕業なんだよー。忘れたの、4年前のこと！ みんなに会いたくないの！？」

「そ、そりゃあ……会いたくないわけじゃないけどよ」

「一軍になつたって、死ぬまで出雲に利用され続けるだけなんだよ！？」馬鹿みたいに訓練してさつ、訓練したって、自分の為じゃなくて、出雲の為なのにー。自分の得にはなんないのにー。そんで、指すものだつて、出雲のポケモンでしょ？ 家畜になりにこぐよ

うなもんじやん！ なんで分かんないのよ！」

「お、落ちつけって！ お前、なんかおかしいぞ？」

「おかしこのはお前らだつ……」

私は……いや、オレは、ヒステリックになつてた。今考えれば、もう少し冷静に話してたら、何か変わつたのかもしれないな。もう確かめようもないけど。

「意味もなく闇雲に頑張つて、ロケット団とかいう意味分かんない奴らに利用されて！ それで満足してるお前らがおかしいんだ！ そうだよ、なんでポケモンが人間なんかに運命振り回されなきゃいけないの！？ ロケット団に捕まつてさえいなきや、私だって今頃、お母さんや、あんたや、他のみんなと一緒にいっぱい遊んで、いっぱい笑いあつて、いっぱい恋して、ふつつの女の子でいられたのに！」

「そりや……みんなのことは今だつて思い出すし、たまに、無性に会いたくなつたりもするし、ロケット団がいなきや、今頃どうなつてたんだろうな、とか考えるけどや……」

「…………けど、何？」

「『『いれ』が、今だり？ 昔の事言つても、始まらないしさ。今を生きて、今の目標に向かつて精一杯努力するから、俺達は前へ進めるんじやないか？」

「は……？」

「もう、四年も経ってる。俺は、『今』の俺、ロケット団の俺として、頑張ってるよ。だけど、お前は『あの頃』のお前のまま、ずっとひきずってるだけなんじゃないか？……まあ、それがお前の生き方だつてんなら、逃げるのを止めやしないけど。俺はここに残るよ。残つて、一軍になる。……出雲は、悪党だけど、悪い奴じやないよ。だから、信じてみようかな、つて」

「そ、そんなの……そんなのつて……！」

正論かどうかは分からぬが、当時の俺には、それがもっとも正しい分に聞こえた。

諭されていいるよつてで、悔しくて仕方がなかつた。

オレはあいつを助けてあげるつもりだったのに、何で俺が子供みたいになつてんだ、つて。

「じゃあつ……じゃあつ……！ もう勝手にすれば！？ ロケット団に利用するだけ利用されて、過労で死んじゃえばいいんだ、アンタなんかつ！」

「おいっ、あんまり大きな声出すなよー 見張りが来たら逃げれないぞ？」

「あ、アンタは、もつつ……！」

馬鹿だろ、アイツ？

死ねつて言われたのに、心配してくれるんだよ、オレのこと。どこまでも馬鹿で、お人よしで。だからロケット団にもいいように利用されるんだろうけどな。

オレは、最後の最後で、やつぱりボス「ゴドラ」を外に連れて行きたく

なつた。

けど、私は オレは、逃げるみたいに部屋から出で、そのまま驚くほど簡単に外へ出た。

ボスゴデラの言つ通りにしていれば、少なくともボスゴデラと一緒にられただろ？

一軍の仲間に入り、悪名をとどめかせて貰ったことじだと思ひ。

だけど、オレは外に出たかった。

自由を選んだんだ。

だけど、……いや、だから、か。

オレは一人だつた。

隣にアイツはいなかつた。

それが、たまらなく悔しくて、悲しかつた。

## スターIIーの記憶 後編（後書き）

回想書くのが苦手なんですよね…。

さて次からはようやくいつものメンバーが出てきます。

## スター・ミーは仲間。

「 それから、怒りが口ケット団からすべての人間に移るのはそう遅くなかった。誰もいいから、人間を殺してやりたくなつた」

「 …… そうだったのか」

「 自分でも、分かってる。完全なハツ当たりだ」

みんなが静まり返つていた。

あの陽気なドクロッギも気まずそうに視線をそらしている。

それにしても、あの口ケット団…… 出雲は、そこいら中で動き回つてるんだな。ボスがそんなふらふらしてていいもんなのか？

それよりも、また口ケット団に因縁のあるポケモンが仲間に……。

ボスゴドラつて、十中八九あのボスゴドラだろ? なあ……。

と、ふいにスター・ミーが笑つた。

「 どうしようもない屑だと思つたらう? オレは、物事が自分の思い通りにいかなかつたってだけでお前にハツ当たりしたんだ」

「 そんなこと、ないよ」

「 気を遣わなくていいさ。自分が余計に惨めに感じるじゃないか」

「本心からだ。同情とか取り繕いで言つたわけじゃない。お前は屑なんかじゃないよ」

「……そう感じじる理由を、教えてほしいもんだな」

「お前れ……ボス『ゴドラ』の」と好きだったんだ？』

「　」

「分かるんだよ。なんとなーく、だけど……失恋したときの顔つてスター・ミーが、露骨に田をそらす。やつぱり凶星なんだらア。

「せいや、自分じゃなくてロケット団を選んだんだから、振られたつてのと回じだよな。悲しくて、悔しいに決まってる。だから、無理もないさ。人間だつて、色恋沙汰で殺人なんてやらかすんだから」「殺されかけておいて、よく『無理もない』なんて言えるな」「ああ。分からぬでもないからな、その気持ちが

昔の『』じただけどな。

まあ、今言つたつてビービーいふもないから、言わないナビ。

「……そりゃ、オレはあいつが好きだつた。頭の中じゃ、あいつと一緒に走つて逃げるなんていう、ロマンティックな状況が浮かんでた。だけど、実際は違つた。あいつは、オレよりもロケット団の方が好きだつた。オレからボス『ゴドラ』をとつたロケット団が許せなか

つた。口ケット団が、人間が、ボスゴドラをおかしくさせたんだって思った。……けど、実際のところどうなんだろ？ 分からなくなってきた。軟弱だな、オレは。情けねえ限りだ。男に一回や一回振られたくらいでこんな混乱してよ

「スター＝＝……」

スター＝＝は、自嘲する。

彼女の眼は、潤んでた。

一回や二回つて言つけど……本氣で惚れた人に振られたって考えれば、それがどれくらい辛いものかは想像がつかない。しかも、スター＝＝の大嫌いな口ケット団に。

……いじっぱりだなあ、こいつは。

ゲームのスター＝＝としちゃ、相性最悪だぞ？ なーんて。

「どいてくれ。……わざわざ回復までしてくれたってのは、逃げてもいいってことだろ？ オレは人の所有物になんかならない。一人で、目的を果たす」

「どうするつもりだ？ また、人間を襲うつてのか？」  
「言つただろう、それはただのハツ当たりだつたつて。……ただし、口ケット団だけは許さない。理屈並べても、憎いものは憎い。奴らを壊滅させなければ、オレの気が收まらない」

「お前一人で行く気か？ そんなの、また捕まるのがオチだろ！ 何のために、ウインディがお前を逃がしたと思ってるんだよ！」  
「今のオレは、口ケット団に縛られてはいない。中へ入つて、ハイドロポンプで搅乱すれば捕まることはない。だいたいあんな集団、

真っ先に出雲を潰せば、ただの鳥合の衆だ。そして、説得なんて言わざ、俺がボス、ゴドラを奪い返す

おいおい……その出雲が問題なんだろうが。

ウインディがロケット団に潜入してまで、わざわざスター／ミーを逃がしたんだ。無駄にするわけにはいかない。

どうにか、説得できないもんかな……？

「……スター／ミー、今のお前じゃ絶対あいつには勝てない

「何故、分かるんだ？」

「俺達に、勝てなかつたからだ」

「…………」

「出雲は、お前よりもずっと強いポケモン、ずっと高い戦術を持つてる。俺達五人に勝てなかつたんだから、まず無理だ」

「……あの時は、混乱していただけだ」

「ボス、ゴドラと戦つてのに、混乱しないつて言えるのかよ

「ツー！」

スター／ミーの口が止まる。

「俺達は、一度出雲と戦つた。あの時のボス、ゴドラ、あいつがお前の言つボス、ゴドラなんだと思つ。出雲はやつぱり、ボス、ゴドラを一軍にしたんだ。だから、出雲を倒すのにはボズ、ゴドラとも戦う必要がある。……出雲は、ある程度のプライドこそあるが、勝利主義者

だ。スター＝ミー相手なら、平氣でボス「ゴリラ」と戦わせる

「…………それでも、やる」

「そんなこと、俺が許さない」

「お前には関係のないことだら」

「ある。お前は俺たちの仲間なんだからな」

「…………つまだ言つか」

スター＝ミーの田<sup>た</sup>が微かに揺らぐ。

「お前が、野生として生きたいって言つんなら、それでもいい。人間なんかと一緒にいたくないって言つんなら、仕方ない。だけどな、お前がわざわざ不幸になりに行くような真似だけは絶対にさせない」

「…………どいてくれ。仲間だらうがなんだらうが、オレを止めるなんら容赦はしない」

「スター＝ミー……！」

「…………」  
こいつは本気だ。感情が高ぶつてるとか、そんなんじゃない。一晩明けたつて同じことを言つだらう。  
でも、こいつをロケット団のところへ行かせるわけにはいかない。むざむざ捕まえられには行かせない。こいつをわざわざ逃がしてくられた、ウインディのためにもな。  
なんとかして、説得するんだ。

そう思つて、俺が動いた時だった。

俺よりも早く、誰かが俺の後ろから飛び出した。

そこには、ゆっくりとスター///ーの前に立しかぶさがった。

「アブソルつー？」

「……こいつやダメ」

彼女は、幼いながらもじっかりとした田でスター///ーを見据えていた。

「話を聞いていたのか？ 止めるなら、容赦はしない

「……今のスター///ーは本気だ。危険だ、アブソル！」

「シグは、ひとつでもちやしすが。……わたしだって、みんなをま

もりたい」

「アブソル……！」

「スター///ー、わたしのはなしを、きこて」

「……」

スター///ーが、おそらくはハイドロポンプの標準を合わせるために、手をアブソルに振りかざしながら立っている。

……とはいっても、彼女がハイドロポンプを発動させるのにここまで時間はかかるない。聞くだけ聞いてやる、つてことだらけ。

「わたしたちも、口ケット団にはいんねんがある。……でも、この

前たたかってわかった。いまのわたしたちじや、ぜつたいに出雲に  
は勝てない、って。だから、わたしたちは、シグと一緒につよくな  
つて、いつか出雲をたおす」

アブソルは、スター＝ミーを見据える。

「だから、スター＝ミーもいつしょにつよくなつて、  
出雲をぜつたいにたおそつ」

「…………」

だけど、スター＝ミーは何も言わない。

「スター＝ミー。わたしたちといつしょにて、こころづく」

それでも、アブソルは彼女の目を見続ける。

仲間として。新しい仲間を受け入れる、仲間として。

そして、スター＝ミーが手を下げた。

今度は彼女が、みんなの目を見る。

「……アブソル。イーブイ。サイホーン。『ひこう』は、本当に信  
頼するに足るトレーナーか？」

「 もちろん… 」 「 うん 」 「 はい！ 」

三人が三人とも、とてもうれしい返事をしてくれた。

……本当にありがとう、三人とも。

「 ケロ？ 私は？ 私は～？」  
「 お前からはまともな返答が返つてくる気がしない」  
「 そんな酷い」

ドクロッグを一蹴するスター＝。

つうかドクロッグ、お前だんだん耐性ついてきてない？ イーブイ  
のおかげ？ あれ、イーブイのせい？

「 シグ、つていつたか」

「 は、はい？」

いきなり名前を呼ばれるとは思わなかつた。  
でもまあ、アブソル、イーブイ、サイホーン、ドクロッグときて順  
番的には俺か。

「お前のポケモン達は、口ケット団にいた奴らとは全く違つてゐる」

「ああ。俺たちは『ロケット団じゃない』からな」

「『俺が育てたポケモンだから』とは言わないんだな」

「もちろんだ。俺は別に、自分の育て方に自信がある訳じゃない。知識こそあるが、本当にポケモン達が求めていることができているのかどうかなんて分からんんだ」

俺がゲームから学んだのは、ポケモンを強くする方法。

性格や個性こそあるが、あくまでもゲーム上のシステムで、バトル以外では関係ない。

俺は弟も妹もいないし、ペットもない、後輩を指導した記憶もない。ポケモンを強くする技術ならあるが、育てる相手がどう思つてるのかなんて、分からぬ。

……ただ、

「ただ、俺はポケモンを愛してる。それは、トレーナーだと言える最低条件だと思ってる。……みんながロケット団みたいな奴らじゃない、むしろポケモンが大好きなトレーナーの方が多い。俺は、そのポケモンが大好きなトレーナー達の一人にすぎないよ」

スター・ミーが納得できる答えを、探す。不器用ながら、言葉をつないでいく。

「だから……頼むから、ロケット団だけを見て人間を決めつけないでほしい。お前が思つてるより、ずっと世界は広いんだ。だからさ、

スター二ニ。……一緒に世界を見てみよつぜ」

「ふん。まあ、上出来だ」

「ありがとうよ。じゃあ、お前の答えは？」

「一緒にいってよ、お前たち」と

卷之二

その途端、みんながスター＝ニーに抱きついた。

392

「うわっ！？」  
「「「「よろしく、スター＝＝＝＝。」」」抱きついた四人が声を合わせて言った。

「ちよつ、離せ！」

「よいではないかよいではないかー！ ケーロケロケロ、シグの仲間になつたポケモンはみんなに抱きつかれる仕来たりなのだ！」  
「嘘つけ！ つーかお前だつて今日仲間になつたばっかりだろ！」

「お、おーおい、一田でこんなに打ち解けるものなのかな……？」  
「だいじょぶだいじょぶー。ドクロッギは慣れ過ぎー。」  
「そーかな？ 別に普通だと思つけどー。」

「…………ベたべたしそぎ。やだ」

「アブソルちゃん、最近イーブイちゃんに似てきたんじゃないかな……？」

「それって遠まわしに私が毒舌つて言つてない？」

「ソントナイトナイヨー」

「何故に片言……？」

「…………ふふ」

「お？ 今笑つたねスターミー！」

「あ、いや……そんなことない」

ん？

なんか、一瞬だけスターミーの雰囲気が違つて見えたような。  
以前の、口ケット団に入る前のスターミーの姿、なんだろうか？

いつか、俺たちにそうやつて接してくれる日が来るのかな。  
だとしたらそれは、たぶん、俺たちを認めてくれたってことで。  
自分の居場所を見つけたってことだよな。

……よし、なんかまたやる気が出てきた！

「よつしゃー、スターミーが仲間に入つたから、今日は一人分の歓

迎会をやんなあやだな！ ちよつと待つててくれ、焼き肉買つてくれー。」

「ふおおおおおおつつ、や、焼き肉ですかつ」

「さかなはー？」

「いや、魚は今回無理かなあ」

「……ふにゅー」

「まあまあ、おこしい焼き肉買つてくれるからセー。」

「もふつ」

「アブソルつて、口数少ないのに分かりやすいよなあ……」  
とりあえず「もふ」はアブソル語で「うれしい」で確定したな、うん。

「お、つてことは私も羽田はずしていいのかなー！？」

「お前常に外れつぱなしだるーが！」

「シグ、シグッ、ピーマンもようしくねー！」

「あー、そういえばお前は草食だつたなあ。分かつた、他にもせひとつもろこしとかいるか？」

「とつもろこじつー、こゑこゑー！」

「マ、マスターつ……焼き肉、たくさんお願ひしますつ」  
「はは、分かつてるつて」

イーブイは、未だにあの味が忘れられないんだなあ……。

「ふふん、じゅごうときくひこは空氣読んで食べるかなあ。ビーセ明日特訓するんでしょ？」

「やうだな。あんまり食べ過ぎて腹壊すとかはやめろよー？ 特に

リトル三人組

「し、しつれーなつ！ 私はサイだよ！ サイは頭も胃も頑丈なんだから！」

「結局食べ過ぎる氣満々じやねえか。お前らの歓迎会じゃないんだから、頑丈だろ？がなんだろ？が食べ過ぎない！」

「大丈夫です、私は焼き肉しか食べませんから！」

「焼き肉がメインだから！ ほとんど焼き肉しかないからっ！」

まつたくこいつらは……エクロッグとスター・ミーの歓迎会だつての

に。

「そうだ、スター・ミーは何か好物とかある？」

「……そうだな。魚とか」

「さ、魚かあ……じゃあ、買つてくるかな」

「いや、いい。……アブソル、魚、好きなのか？」

「うん」

「採つてきてやるよ、そこの川で」

「わたしもいくつ」

「いや、ここらへんには魚はいなくてな……少しばかり上流に住んでるんだ。オレ一人が行くよ」

「……わかった」

「大丈夫なのか、一人で？」

「おいおい、4年ぶりとはいえ、毎日ここで遊んでいたんだぞ？」

それに、オレは水タイプだ、溺れることはないと

さ

「そつか。それもそうだな」

こうして、この世界に来て一度目のバーべキューをすることになつた。

今度は、六人で。

## スター＝ミーは仲間。（後書き）

時雨「すたあーみー、すたあーみー」  
スタ「どうした時雨。そんなゾンビみたいなポーズで」  
時雨「話を引つ張りすぎだよ、スター＝ミー」  
スタ「いや、あんたが書いたんだろ」  
時雨「いつになつても、話が長引く癖が直らないなあ……」  
イブ「ダメ作者ですねえ」  
時雨「そこー、ドS属性発動しなーい」

## 第一回バーべキュー回。

4年ぶりの道を、ゆっくりと歩く。

4年ぶりの木々、4年ぶりの川。人間があまり来ないここは、今まであまり変わらない。

そして、その川の中で、何か泳いでるのが見えた。

ああ、あれで間違いない。

「 母さん」

『私』の、母親だ。

オレより少し背が低くなつた、同じスター二。

彼女は、オレを見るなり目を見開いた。

「あつ……そ、そんな、まさかっ、スター二ーー?..?」

「久しぶり、母さん」

できるかぎり笑顔を作つて、なんでもないよ」つに話す。

「ど、どひしたの？ 口ケット団[トケッタウーハ]のは？ 逃げてきたの？」

「ああ、いやまあ……その通りなんだけじゃ」

どうも歯切れが悪くなつてしまつ。

そりやそうだ。口ケット団から逃げてきたのはいいが、せつそく別のトレーナーに捕まつたんだから。

「逃げてきたはいいけど、また捕まつちやつたよ。別のトレーナーに」

「えつ……そ、それならなんで」

「『抜け出して』きた」

「……そうなの」

若干の寂しさが、表情から見て取れた。

再会できたと思つたら、また別れるんだから、オレだつてさみしさはある。だが、口ケット団みたいにポケモンを悪用する奴らに捕まるならいざ知らず、ポケモンがトレーナーに捕まるのはもう仕がないことだ。

だから、母さんはすぐに氣を取り直して笑顔になった。

「それにしても、大きくなつたわねえ……いつのまにか背も越しち

やつて。髪も長くなつちゃつて。切つてあげよつか?「

「いいよ。……」の方が、今のオレらしいから

「あら? 何か、あつたの?」

母さんが尋ねた。口調の変わりぶりに気付いたみたいだ。

「ボスゴドラ、…… ボスゴドラの奴さ、ロケット団を氣に入つたみたいで、まだあそこにいるんだ」

「あら…… そうなの?」

「それでかな? 『私』が、まだボスゴドラから離れようとしないんだ」

ボスゴドラが好きな、女の子の『私』。

それが、心からぱつかりいなくなつてしまつた。ボスゴドラの吸い寄せられるように、より強い磁石に引っ張られるように。

そして、オレだけが残つてしまつた。

「だからさ、オレはもう一度ロケット団のところへ行いつと想つ。今度は、ボスゴドラと『私』を取り戻すためにね。新しい仲間と一緒に」

「よく分からぬいけど…… また、行つちやうのね?」

「ああ。『ごめん』

感動の再会つて言つには、少し短すぎる時間だな。

でも、オレはこれだけ伝えられれば充分だ。

「母さん。オレはずつとロケット団で嫌々暮らしてきたけど、今度は違つ。ちゃんと、自分の居場所、みたいなものを、見つけた気がする。……だから、これ以上心配する必要はないよ。それだけ、伝えたくて、いつそり抜け出してここに来た」

「…………」

母さんは、少しだけ寂しい顔をしたけど、すぐにまた笑顔になつてオレを見つめた。

「ならいいわ！ あなたが満足なら、私も口の出しようがないしね。そのお仲間さんと一緒に、好きなところへ行つてらつしゃい」

「…………」

「これでいい。

別れを後悔するつもりはない。

あとは、魚を探つて帰るかな。新しい仲間の為に。

「焼けよー。」「スター＝ミーとドクロツグの歓迎会って言ってたけど、俺もスター＝ミーがないのに勝手に盛り上がりがっていた。というか、まだ焼いてすらいなのに盛り上がりは絶頂だった。おつ？ スター＝ミーが帰ってきた。

「おい、アブソルー。魚、採ってきてやつたぞ」「もふもふもふうつ」

スター・ミーとドクロッケの歓迎会って言ってたけど、俺もスター・ミーがいないのに勝手に盛り上がりついていた。というか、まだ焼いてすらいないのに盛り上がりは絶頂だった。

「今日のご飯はああああ、焼き肉かあああああああああああつ！？」「

合計3もふ出ました。

どれくらいうれしいのかは知らん。

彼女が持っていた二匹の魚の、大きな方を遠慮なくぶんざつしていく。

「ああ、じゃあバーべキュー始めるかー！」

「「「おーっ！…」」」

「さかなおいしい」

「だから焼いて食べりゅあおおつー！」

「元気だなあ、お前ら……」

「まあまあ、せっかくの歓迎会なんだ、これくらい盛り上がりなきやな。それに、お前も今日の主役なんだ。少しくらい羽田はずして、盛大に食べよひぜ！」

「…………そつだな。最近はろくなものも食べていなかつたし」「よひし。じゃあ、あのお祭り騒ぎに加わるつぜー！」

すぐそこでは焼き肉の取り合いが繰り広げられていた。

アブソルも生で魚食べたから焼き肉の取り合いに即参加。

サイホーンも器用にとうもろこしきを焼きながら待ち時間で焼き肉を食べ、イーブイは誰よりもすさまじいオーラで焼き肉を死守している。

ドクロッグはそれをものともせず箸で焼き肉をすくつていいく。

つて、

「俺にも食べさせりよー。なんでもう焼き肉が半分近く消えてるんだ！」

「ふつ……シグ、自然での食事はこれすべて戦いなんだよ」「せめて歓迎会という人間のイベントのときに戦うんじゃねえ！郷に入つては郷に従う！」

「とりあえず、魚を焼くか……」

「今はやめとけスター＝ミー。アブソルにとられるぞ」

「ふいづち」

「うわっ！？」

ポケモンの技まで使つてスター＝ミーが持つていた魚を掠め取るアブソル。

つうか、今の技はどうちかいつと「じりぼつ」「じゃないか？

「おい、アブソル！　スター＝ミーの魚を盗むな！」

このままではスター＝ミーの取り分がマジで無くなる！

そつ思つて没収しようとしたが、それはスター＝ミー自身が止めた。

その隙に、アブソルは魚をぺろりとたいらげてしまった。  
意地汚い。ふだんの大人しさからは想像できないくらい意地汚い。

「……ふつ」

「どうしたスター＝ミー？」

「アブソル……いつからオレが魚を一匹しか持っていないと錯覚していた？」

「な、なにつ」

なにつじゃねえ。

スター＝ミーが、胸に巻いた布と腰に巻いた布から、魚を一匹ずつ取り出した。

合計4匹。

つうか、あの面積の小さい布からどうやって魚を4匹も……。

といふか、暴れる魚を忍ばせて涼しい顔をしてたつてのもすげえ。

「修行が足りないな、アブソル。視覚からの情報でしか行動できないとは」

「……またとれぱいい」

「甘いな。ふいうちされると分かつてわざわざ真正面から突っ込む

馬鹿はいない」

「……？」

「そういえば、サイホーンが『食事は戦い』と言つていたな」

ビリーリッ。

電流の音がして、突然アブソルが動かなくなつた。

「でんじはだ。覚えておけ、『ひとのものをとつたりぬけ』なんだよ」

……すナエ。

『じべー』へ前のことを見直して聞いた。

「う」……かない……」

「ではオレは焼いた魚を美味しく食べてくれる。そこで指を咥えて見てこるといい。とはいっても、咥えられないだらうがな」

「シグ……シグ……」

「まつたく……食に意地はるからいつなるんだ。ほれ、まひなおし」スプレーを吹きかける。そしてしばらぐすると、起き上がつた。

「おとなしく、やせいくたべる」

「それがいいな」

もう半分しかないけど。

結構多めに呑つたのにこれつて、絶対誰か生で食べてゐるだろ。

てこうか、そんなことせざりでもいい。

「お前らあああ！　俺にも食べやせりおおおおー！」

今日の戦果。  
焼き肉一枚。

「……疲れた」

「お疲れー。いやー、楽しかった！」

「まあ、ドクロッギが楽しかったんなら別にいいんだけどさ……つ  
たく、あのリトル三人組め」

ドクロッグが適当に茶々を入れたりしていたが、結局一番食べたのはあいつらだった。  
今は真っ先に寝ている。

そして俺たちは、今度はゆっくりと雑談。

「しつかし、今日は本当に濃い一日だったな」

「ほんとほんと。私が加わってからー、ポケモンタワーで出雲たちを倒して、カフェで休憩して、それからスター・ミーを捕まえて……」

「その前にはジム戦もやつたんだよなー。はーっ、本当、77日間分くらいあつた気がするよ、今日は」

「シグこそ、その生々しい数字はどういうてきたの……？」

「…………シグ、ちょっとといいか？」

「ん？ どうした？」

れつきまで木に寄りかかっていたスター・ミーが、話しかけてきた。

「今日お前らと本気で戦ったときの違和感を言つていいか？」

「…………ああ。なんだ？」

「まずイーブイは、相応の実力だった。ドクロッグに至つては、出雲のメンバーともまともに戦える実力を持っている。……だが、残

りの二人は、実力が能力に振り回されるよつた気がした  
「実力が、能力に振り回されてる……？」

「潜在能力は、出雲のメンバーと同じですば抜けてる。……だが、  
扱いきれていない」  
「なるほど……」

「何も、それが駄目だつて言つてゐわけじゃない。ただ、非常に惜  
しい、とな」

「……まあ、少しずつ慣らしていくしかないよな」

「そうだな。でも、少しでも早く慣らすくらいはできるだろ?」  
「……?」

「明日の朝、オレも特訓の手伝いをする。いいか?」  
「そ、そりやもう大歓迎だ! 頼んだぞスター!!」  
「まあ、打倒出雲というからには、本気でかからなきやな」  
「じゃあ、私もお手伝いするよ!」  
「ああ、頼む。よし、明日は忙しな!」

こうして年長組三人も、明日の特訓に向けて寝ることにした。

第一回バーべキュー回（後書き）

ドク「結局、シグの言つてた生々しい数字は何だつたの？」

時雨「あれさ…実は、あれ一日を書くのにかかつた日数なんだ」

ドク「さすがに伸ばしすぎでしょ…？」

時雨「うん。伸ばしすぎた。なにせ、全話中のほぼ半分くらいあの一日で埋まっちゃったからね」

ドク「うわぁ……」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5119v/>

---

Dead in pokemon world!

2011年12月25日19時48分発行